332.9
0598g

0022930000

0022930-000

332.9-0598g

現代大都市論

奥井復太郎・著

有斐閣

1940

ADC

エ145 6

奥井復太郎著

現代大都市論

東京 書肆 有斐閣

3329
0598g

国立国会
27.6.10
図書館

270376

序

都市生活が問題になつたのは決して新しい事では無いが、今日の社會情勢裡、大都市社會に對する批判と反省とは最も痛切を極めてゐる。大都市は恰も邪惡の巢窟の如く思はれてゐる。唯、どの問題に就いても批判が深遠な理解に先き立ちやすい。正しき理解のない批判は徒らに問題を紛糾せしめるのみならず社會的混亂への幇助でさへある。

慶應義塾大學經濟學部では昭和二年に「都市經濟論」の講座を設け、私が擔當を命せられたが、之れは大學教程の社會科的構成を企圖せられた故堀江歸一博士の所懐の一表現であつた。爾來十數年、都市及び都市問題の何たるやに就いて不敏の身を顧ず講義と研究とを續けて來た。玆に呈する本書は其の間の私の仕事の成果である。私の研究分野は都市、殊に現代大都市の經濟・社會的解明であつて、都市經營とか都市行政とかは直接には問題の埒外にある。私は都市現象の正しい理解の上に立つてこそ立派な都市の經營も政治も可能であると信

するが故に、都市の本質を究明する事を以つて第一の課題とするのである。此の意味で私は現代都市として典型的な大都市丈けを研究の對象としてゐる。

百萬といふ人口に驚かなかつた人々も、現代都市の人口が三百萬となり五百萬となるに及んでやゝ驚異の眼を瞠つた。しかし七百萬となり纔ては一千萬にも達せんとする情勢に對しては又あまり過敏でなく、人々は當然の事として認容せんとしてゐる。かゝる巨大都市の成立は經濟社會的過程が規定する所であるが故に、大都市問題の大部分は現代の經濟社會問題體系裡に納められる可き性質のものである。大都市々民であると同時に或ひはその以前に世界國民經濟的制約裡に特定の規制を受けた一人格なのである。故に市民的問題は同時に國民經濟的編制上の問題に外ならない。此の意味で本書は先づ都市を外的に規定する條件を重要視してゐる。本書の前半はそれに當る。

全體的に規定されたものとしての大都市の内的構成や特質を眺める事は別の研究分野であり本書の後半が之れを擔當する。茲では大都市そのものゝ社會的構成と特質とを問題にしてゐる。殊に第三章は大都市の地域的構成を詳

細に論じた。土地殊に地域と人間と社會との三者關係に就いては本書全篇に通じて之れを可なり重く觀てゐる事は本書の一つの特徴と云つて差支ないかも知れない。第五章で都市計畫を論ずるのも此の趣旨の表現に外ならない。都市計畫の如き土地政策又は形態的手法も社會關係を無視する事を得ないと云ふ制約は當然、茲で云ふ土地・人間・社會の三者關係から結論せらる可き性質のものである。同時に一定の社會關係を確保する爲めには一定の地域的形態的條件が必要だと云ふ事も强調される。

本書の構成は以上の如くであるが、研究の年次が稍長期に亙つてゐる爲め若干の混亂があるかも知れぬ。併かし全體としては一貫した體系で纏めたつもりである。果して現代大都市の性格を充分理解し得たるや否や、各位の御敎示を得れば幸甚である。

最後に本書の内容となつた諸研究や調査に就いては誠に多方面の方々の御援助によつてゐる。關係の官廳・會社は勿論個々の人々から實に限りない好意を受けてゐる。殊に調査の如きは、一般の人々の好意と理解とが無ければ全く

不可能である。それ故、茲で一々其の御名前を擧げないけれども研究調査者として常に其の御援助を忘れるもので無い旨を記して感謝の意を表したい。

又慶應義塾内の先輩や同僚諸氏が常に欣んで協力的であつた事も感謝の念に耐えない。茲では小島榮次教授が永らく協同して研究や調査の衝に當られた事を特に感謝せねばならぬ。同氏の御盡力が無かりせば成果を見るに到らずして止むだものも決して尠くなかつたであらう。研究會學生諸氏の援助も決して尠くなかつた。調査や其の集計整理の如く實に無味乾燥で然かも煩雑な仕事に當つて吳れた方々に對しても滿腔の謝意を表する。

結びに本書の出版に際して斡旋の勞をとられた武村忠雄教授に感謝すると共に、此の厖大な書の出版の直接の衝に當られた有斐閣の西田勝三氏に御禮を申述べたい。

昭和十五年八月廿七日

湘南葉山

奥井復太郎

目次

一、緒論　都市の本質……一—一五

第一節　都市とは何ぞや……一—一一

複雑な都市觀（一）—都市原體（二）—其の外的特徴（人口集團、數量、地域、密度）（六）

第二節　都市の特質……一一—一九

複雑なる都市生活（一三）—都市の特質（職業、環境、人口、組織及び制度、社會構成）（一三）

第三節　都市の成立……一九—二五

都市成立と過去・現在・未來（一九）—都市現象の前提（大きい社會、都市と農村）（二〇）—中央的支配地點（二三）—資本主義的中心（二三）

第一章　都市理論・都市社會學……二六—一四一

第一節　都市研究……二七—三二

實際問題に發した都市理論と其の全體性（三七）―關係の諸科學（經濟學、社會學、政治學、其の他）（三八）―我國の都市研究（三一）

第二節　都市社會學……三一―六八

都市社會學の發生（三三）―農村研究（三五）―批判より理論へ（三八）―都市社會の觀念（三九）―都市社會學の構成（四五）―空間的・精神的秩序としての都市社會（五三）―生態現象（五七）―變化と動き（五九）―都市社會學の本質（六一）

第三節　米國都市と都市社會學……六八―八四

シカゴ大學と其の研究（六八）―米國社會の特色（其の歷史）（七二）―（急激なる發展と變化）（七五）―（移民的構成）（七八）―アメリカニズムと資本制典型（八二）

第四節　人口學と社會生態學……八四―一一八

人口學的要因（八四）―數量的に觀た大都市（八七）―社會過程の人口學的說明（九〇）―人口學的解明への批判（九八）―質的構成としての生態現象（一〇四）―生態學及び生態理論（一一三）―都市生態（一一四）

第五節　現代都市の經濟理論……一一八―一四二

經濟的に規定せらるゝ現代大都市（一一八）―人口集團と生活機會（一二七）―市民の經濟的呪縛（一三二）―都市の經濟力及び其の法則（一三五）

第二章　現代の典型的大都市……一四三―二四九

第一節　都市の發展……一四三―一五八

現代の巨大都市（一四三）―都市發展の諸傾向（一四五）―我國の都市發達（一五四）

第二節　大都市生活圈―東京都市生活圈の調査―……一五八―二〇四

行政都市と實體都市（一五八）―大都市地域（一六二）―自動車交通の影響（一六三）―近郊交通機關（一六七）―都市生活圈と諸因子（一七一）―交通因子（定期券利用者）（一七四）―（交通時間距離）（一八〇）―社會的因子（百貨店無料配達）（一八七）―（新聞市內版通達）（一九〇）―郵便因子（電話加入區域、速達便配達區域）（一九二）―法律・行政的因子（市街地建築物取締法、都市計畫法、借地借家法）（一九四）―生活圈の構成（東京）（一九八）

第三節　大都市と郊外―現代鎌倉町の研究―……二〇四―二三八

生活圈と郊外（二〇五）―鎌倉町調査と其の分析（二〇六）―世帶構成（二〇九）―人口構成（二一四）―在住年限と前住地（二一七）―通勤者分析（二三五）―通學者分析（二三二）

第四節　巨大都市が現代都市の典型たる所以……二三八―二四九

大都市地方（二三八）―都市・農村の關係（二四〇）―大都市と小都市の場合（二四三）―大都市發達の阻止運動（二四七）

第三章　大都市の地域的構成 ……〔二五〇―四六六〕

第一節　緒論 ……二五〇―二五六

大都市の地域性（二五〇）―地域と生活（二五三）

第二節　地域・景觀・社會 ……二五六―二九九

地域性と其の標識（二五六）―景觀と其の種類（二六二）―景觀と生活（二六四）―大都市の景觀（二六六）―道路景觀（二六七）―盛り場景觀（二七〇）―景觀の意義（二七二）―「三田」の社會調査（二七五）―學生街の社會學的考察（二八八）

第三節　都心地區の形成―ビルディング街の發展― ……三〇〇―三一九

都市發展の形態的過程（三〇〇）―都心地の構成（三〇二）―丸の內ビルディング街調査（三〇四）

第四節　「盛り場」及び商店街―都市に於ける中心地域の構成― ……三一九―三五三

中心地區（三一九）―商業的中心地區（ボルティモア市の調査）（三二二）―盛り場の成立（三三五）―盛り場の構成（三三九）―盛り場の社會學的觀察（三四三）―盛り場の變遷（三四九）―コムミュニティー・オーガニゼイションとしての盛り場（三五二）

第五節　郊外地（一）―郊外社會の性質 ……三五四―三八七

郊外とは何か（三五四）―都市膨脹と郊外（東京）（三五七）―大都市現象としての郊外（三六三）―郊外の歷史的變遷（三六六）―交通機關と郊外（三七〇）―郊外生活（三七四）―通勤者的郊外（三七九）―住宅地の特色（三八二）

第六節　郊外地（二）―郊外社會の變質―（鎌倉町調査）― ……三八七―四三四

郊外發達と新舊兩生活の混交（三八八）―東京の郊外としての鎌倉（三八九）―其の調査（在住年限による分析）（三九一）―其の地區的分布（三九五）―新舊居住者の諸特徵（四〇二）―（家族世帶人數）（四〇四）―（職業々態別）（四〇七）―（產業別）（四一四）―（勤人職業別）（四一七）―（職場別）（四二五）―（前住地分析）（四三〇）―郊外生活と其の變質化（四三一）

補遺　地域的社會調査の方法 ……四三五―四六六

地域的社會調査の方法（四三五）―地域の選定（四三七）―調査事項（地理、人口）（四四二）―（產業及び經濟）（四四八）―（社會）（四五一）―調査の標識（四五五）―調査技術上の注意（四六二）―地域調査の意義（四六四）

第四章　大都市社會・其の構成と特質 ……〔四六七―五九五〕

第一節　大都市の社會的構成 ……四六七―四八六

大都市の社會的編成（四六七）―市民意識と共同生活（四六八）―單一性構成と複合性構成（四七二）

―異質的集合體としての都市社會（四七六）―都市社會の統制力（四七八）―都市社會の本質としての「動き」（四七九）―共同利益と其の組織（四八二）

第二節　都市生活の社會的基礎……四八七―五一四

分業と專門化（四八七）―複雜と選擇性（四八九）―購買力の大小（四九二）―貨幣主義（四九五）―認識の表面性（四九七）―服裝と道德（五〇〇）―機能主義と獨善的態度（五〇一）―制度と規律の社會（五〇五）―高い道德律（五〇八）―地理的接近と社會的距離（五一二）

第三節　都會的人格・典型と市民……五一五―五六六

自我の映像（五一五）―自我感の喪失（五一九）―廣告の本質（五二〇）―廣告の世界としての大都市（五二五）―外型の社會的意義（五二七）―都會人的氣質と其の諸特徵（市民と農民）（五二九）―都會人の所謂「科學性」（五三一）―迷信としての科學萬能（五三七）―都市社會と精神主義運動（五三九）―愛市精神の薄弱化（五四三）―都會人としての學生（五四七）―都會人としての知識階級（五五四）

第四節　都市生活の反社會性……五五六―五八一

都會の反社會性（五六六）―個人的道義感の稀薄（五六七）―都市社會の寬大性（五六八）―機能的生活と自己僞瞞性（五六九）―變化と動き（五七〇）―ギャングと其の社會的意義（五七二）

第五節　大都市文化と農村文化……五八一―五九五

カルチュアとシヴィリゼイション（五八一）―小社會の特徵（五八三）―都會的技術（五八五）―都市體制と民俗體制（五八八）―兩者の接觸（五九〇）

第五章　都市計畫……〔五九六―七三五〕

第一節　都市計畫の社會・精神的意義……五九六―六一二

都市計畫の理想（五九六）―技術論と社會論（五九七）―計畫・生活・景觀（六〇一）―道路設計の社會性（六〇六）

第二節　全體と部分（二種の都市計畫）……六一二―六五七

二種の都市計畫（六一二）―道路の本質と種類及び其の設計（六一四）―都市計畫と社會關心（六三三）―道路の機能と交通統制（六三五）―都市計畫の發展（地方計畫と地區計畫）（六三三）―綜合藝術としての都市計畫（六三七）―集中主義と分散主義（六四三）―地方計畫（六四四）―大都市密集の疏開（六四七）―東京地方計畫（六五五）

第三節　理想都市論と地域社會の單位集團……六五七―七〇八

田園都市論（六五七）―農村景觀と都市景觀（六六二）―近隣社會と地域性（六六七）―社會性の空

目次

問的形態（六六八）―町内會組織の意義（六八〇）―其の社會性と地域的設計（六八九）―地域社會の單位集團（六九三）―其の設計（六九七）―間隙地帶の發生（七〇二）

第四節　計畫性と其の社會・政治的性格……七〇八―七一五

計畫性の本質（七〇八）―專門家の管理（七一三）―集約化と專門技術家の擡頭（七一七）―計畫化の政治的性格（七二〇）

結論　現代大都市の文化と問題……七二六―七四三

現代文明の典型としての大都市（七二六）―其の文化（七二九）―其の動搖と破綻（七三三）―都市生活の時局的修正（七三五）―大都市生活への反省と理解（七三九）

緒論　都市の本質

第一節　都市とは何ぞや

日常知識としては充分に知つてゐる事で、扨學問的に理論的に問題を嚴密に取扱ふとなると、其の本體が判らなくなつて了ふものが決して少くない。都市の如きもそれである。吾々の日常知識として都市とか町とか云ふ言葉及び現象は具體的に然かる可き存在を充分に憶はせて呉れる。東京、大阪は云ふに及ばず、仙臺とか金澤とか、熊本とかは何人も是等いづれも都市であると思つてゐるし、此の點には皆異議なく一致してゐる。併かし學問的に考察すると、どうか。東京、大阪の都市たるのと同列に仙臺や靜岡が都市であらうか。かゝる場合、解釋や觀方が一方の極端から他方の極端まで餘り幅が廣いと、結局理論的に嚴正を失ひ、實際的には無益に近い結果を生み出す恐がある。現に、同じ都市にしても人口の點丈けに見ても一方には五、六百萬の人口集團には、二、三十萬の人口集團に起らない樣な現象や特殊性や問題が生ずるのは當然ひ過ぎる。五、六百萬の人口集團には、二、三十萬人。他方は二、三十萬人。之れでは大變違である。一例を擧げればラッシュ・アワアの現象の如き、大都市では一般的現象であるが、凡べての都市に共通な

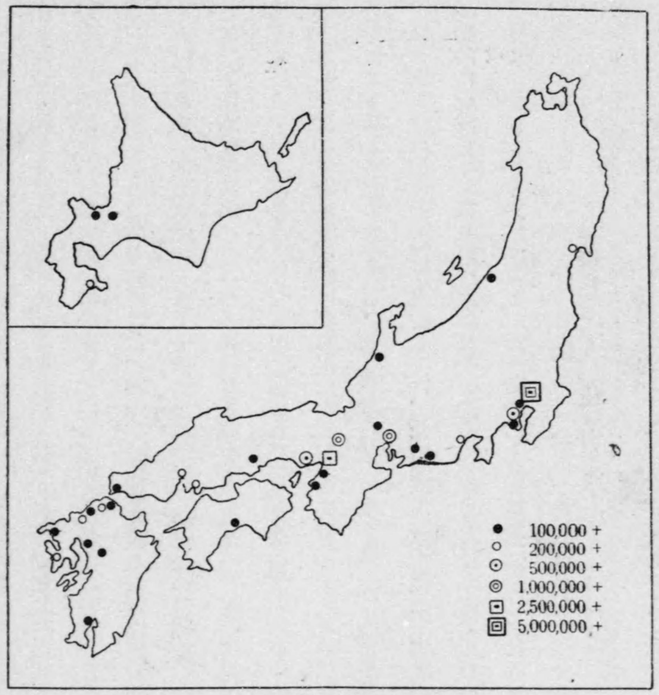
現象だとは云へない。此の現象を發生せしむるには、自ら一定の約束があり、條件が在る。かゝる性質上の相違がある故に、無差別に都市と觀念せらるゝものを全部集め來て、それを研究の對象とすると、前述の理論上の不都合を生ずる事となる。從つて何處かで問題的なものと然からざるものとの限界を定めねばならぬ。かう云ふ點からして理論的學問的には都市の本質を決定する事が頗る困難になつて來るのである。

更に普通、都市と云ふ場合に歴史的の關係を無差別に都市と云つてゐる。バビロンやアレキサンドリア、古代アテネ、スパルタ、羅馬も都市ならば、ニューヨークも同じく都市である。是等を同列に取扱ふとなると、電車も自動車も地下鐵も無い昔の都市と、其れ等を持つた現代の都市との共通點丈けを抽象して出來た理論に、何れ程の效力があらうか。江戸、浪花の古い都會を知つてゐる丈けでは、新しい社會的經濟的規約の下に成立した現代の東京、大阪は判り樣が無い。此の點でも前項と同樣に吾々は當面の問題とする都市現象について何等かの限界を判然と定めておかねばならぬ。

元來、都市の定義や本質が判然とし難い一理由としては、人々が勝手に色々の標準で銘々自分々々の都市なるものを考へてゐる事が指摘されていゝ。或人は人口の多い事を、又或人は商工業の賑な事を、他の人は市制が布かれてゐる事を、別の人は、教育、文藝の中心を、等々多種多樣に都市と云ふものを思つてゐる。從つて混亂が出て來る。所謂群盲象を論ずるの類である。當然、都市も複雜多岐廣汎な社會生活の所產であるから、色々の生活や關係が其の內に含まれてゐる。故に之れを全部綜合して觀察しないで、一局面的に觀る、例へば經濟的に、行政的に、文化的に、觀察する事が許される。しかし、各分科的に觀察するに就いては其の以前に「都市」なるものが存在し、漠然乍らも把握されてゐなければなるまい。卽ち一定の現象（存在）がある。之れを豫め「都市」と名づける、此の都市を經濟上から觀て其の特殊性を抽出して來る、玆で「都市」とは經濟上では、例へば非農業的職業集團であると云ふ事になる。其の爲めには、非農業的職業集團と云ふ性質が抽出せられた原體、こゝでは豫め「都市」と名づけられた、其の原體をどうして觀念するか、之れが先決問題でなければならぬ。經濟的觀點から都市現象を見る者は丁度象の鼻に觸れてゐる一盲人であるかも知れない。故に、「經濟上都市とは……」と云ふ者は、「鼻に就いて見れば象と云ふ動物は……」と云ふに等しい、卽ち象全體と其の一部分たる鼻とに就いて豫め認識が先行する必要がある。要するに各分科的に都市觀念を把握しようとする人々も、之れに先行する都市原體に就いて「都市」觀念を旣に豫斷してゐるのである。

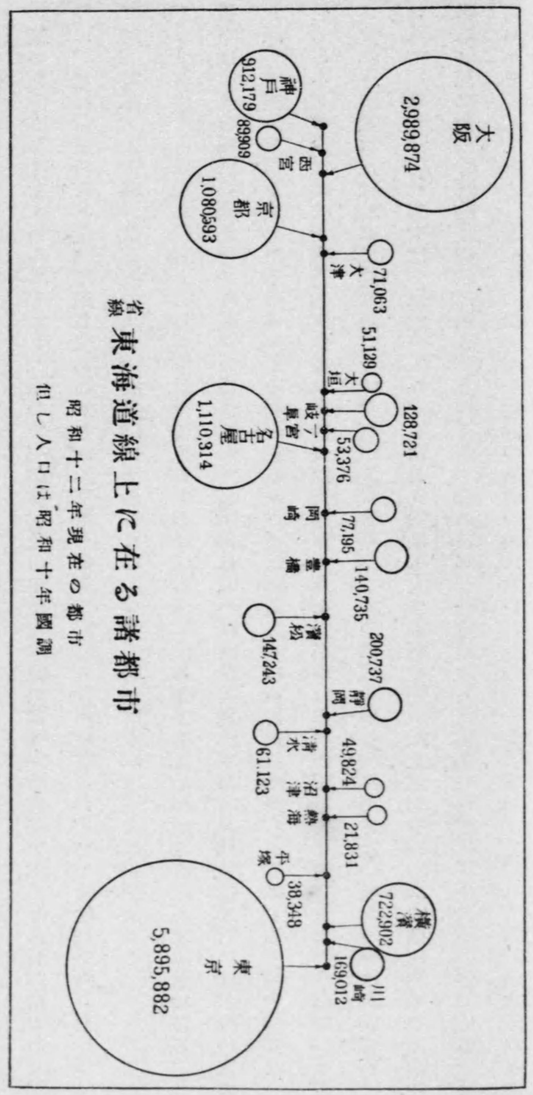
故に都市とは何ぞやの課題に對しては、此の豫斷的都市觀念を構成せしめた都市原體は如何なるものとして吾々の眼前に展開されてゐるか、之れを今一度吟味して見なければならぬのである。

先づ一國に就いて展望すると、第一圖に示す樣な姿が浮ぶ。之れは日本內地の人口集團分布狀況であるが人口十萬以上の都市が斯くの如く分布されてゐる（昭和十年國勢調査の數字による）。人口十萬以下で行政上「市」と呼ばれるもの、卽ち市制を施行してゐる都市は、此の外非常に多く、同年次に於ける其の數一二七に上つてゐた。最近では一五五市を算する。扨、此の日本內地の都市分布に照應する內地人口はどうかと見るに昭和十年國勢調査では六



第一圖　本邦都市分布圖

九、二五四、一四八人である。此の內地總人口は、市部人口と市外人口とに分けると二二、六六六、三〇七人の市部人口に對して四六、五八七、八四一人の市外人口、卽ち三二・七對六七・三の割合になつてゐる。市部人口中、十萬以上の都市人口は、一七、五四二、九〇〇人を占めてゐる。之れが行政區劃による、行政上の都市を基準として作つたものではあるが、一應我國に於ける都市の原體と認められる可きものである。或ひは內地交通の大動脈とも云ふ可き東海道線に沿うて人口分布を調べて見よう（第二圖參照）。玆に列擧した諸々の土地が、いづれも單獨又は聯合して、例



第二圖　省線　東海道線上に在る諸都市

昭和十二年現在の都市
但し人口は昭和十年國調

へば東京・川崎・横濱又は京都・大阪・尼ヶ崎・西宮・神戸の如くに一つの密集的人口集團である事は何人の眼にも映ずる事實である。人家稠密及び其の廣狹は各都市によつて異るが、いづれも田園、森林、丘陵、海濱と異つた土地である。之れが吾々をして都市と觀ぜしむる原體である。

第一節　都市とは何ぞや

少くとも吾々は、かうした現象を都市と考へてゐる。從つてかゝる現象の如何にして發生し、如何なる特色を持つてゐるかを檢討する事によつて都市の本質を把握し得る筈である。以下之れを詳細に論述してみよう。

(一) 人口集團　先づ第一に是等の都市原體は人口の密集々團である事を擧げねばならぬ。集團である以上人口の或る定量が何等かの形式で凝集して存在する必要がある。第一圖第二圖に示したのは、一國又は一地方にかゝる人口の或る定量が凝集してゐる事を示したもので、勿論、此の定量が具體的に幾許の數字を示すかは別問題であり、何故に、又は何を紐帶として凝集してゐるかと云ふ事も、後段で詳しく說明をするが、こゝでは別問題としておく。玆では、數萬、數十萬、數百萬の人口が凝集的に集合してゐる事實が明かになれば差支ない。

(二) 人口數量　第二に注目せらるべきは其の人口集團の人口量に或る定量を認めねばならぬと云ふ事である。此の數量は時及び場所の關係で一樣には取扱へない。結論的に云へば文化の遲れてゐる時代又は場所では、少い人口量を以つて然かも都會的な土地を形成する場合があり、文化が進んでゐると人口は多くても必ずしも都會的でない場合もある。中世なれば十萬二十萬の人口を持つた土地は大都市であつたらうが現在では地方的な都會にしか過ぎぬ。之れと同樣に比較的に邊鄙な地方では數萬の人口集團が、其の地方の中心的都市となつてゐるのに、數百萬の人口を持つた大都市地方では、同量の人口、又はより大なる人口集團を持つた土地が中心的には都會的でない場合がある。兎に角、時間的空間的に制約されるものではあるが、一定量の人口集團の存在は不可缺の要件である。單に人口が密集してゐると云へば、田舍町や村落の一部一角に數戶乃至數十戶が密集して生成してゐる土地もある。

十軒の家屋、十戶の生活が相寄つても或る程度の密集である。之れと區別する爲めに、どうしても一定量の人口量を條件として揭げる必要がある。現在我國で市制を布いてゐる都市の人口定量は、特別の場合を除くと、大體三萬人を以つて限界としてゐる。勿論三萬人の人口を持つ都市と、東京や大阪の如く數百萬の人口を持つ大都市とが同一に論ぜられないと云ふ事は前に述べた通りである。併かし特に行政上の位置から見ても「市制」なるものを許してゐる點に一つの土地もその人口が三萬位に達して來ると社會生活の組織上、特別な性質や資格が發生して來ると見て差支ない。人口定量が必要條件となる所以である。

面積（方粁）	500+	250+	100+	50+	25+	10+	5+	5−
都市數	1	1	6	19	30	56	12	4
百分率%	6.2			14.7	23.3	43.4	12.4	

(三) 地域　都市なるものが其の原體として一定人口量の密集々團だとすると、當然此の定量人口が占居してゐる地域の事を考へねばならぬ。密集なる事實は一定地域の上に凝集してゐる事實に外ならぬ。此の地域は都市地域と云ふ可きものであるが、此の地域は矢張何等かの方法で限界づけられてゐなければならぬ。普通「都市とは……」と云ふけれど、比較的狹い地域とは、幾許の面積の土地を指すか。之れが問題である。此の問題も人口量の場合と同樣に、一概に指定する事は出來ない。現在我國の諸都市の場合を參考にすると、百數十の諸都市の各地域面積は、五五〇方粁の東京を筆頭にして首里市の二・四五方粁を除けば尾道市の三・七五方粁を最小とする。從つて此の市域面積も非常に大小の差が甚し過ぎる。昭和十一年三月現在の市域面積を表にして示すと上揭の通りである。

右の表によれば二十五方粁未滿十方粁以上の市域面積が一番多く、次いで五十方粁未滿二十五方粁が之れに次ぎ、兩者を合すれば全體の三分の二に當る。此の階級の都市は人口いづれも二十萬臺に終るものであつて五十方粁以上の諸階級に人口數の少い都市も加つてゐるが、六大都市は神戸の八十二方粁を最低とし、人口と併せて比較的に市域も廣くなつてゐる。其の爲め、「比較的狹い面積に……」と云ふ言葉は當らなくなつて來てゐる。例へば東京市の五五〇・八五方粁は、東京府面積の四分の一に當つてゐるに對し、大阪市でも大阪府面積の十分の一に該當する。中國地方の都邑、例へば廣島・岡山市等を例にとつて見ると、前者は縣面積の約一二〇分の一、後者は同じく一五〇分の一に當る。故に東京、大阪等の大都市になると、人口量も非常に多いだけに、其の市域面積も決して狹少でなくなつて來る。舊東京市域は現市域の約七分の一に過ぎず、——八一・二一九方粁——從つて東京府面積に對しては、二十六分の一の割合を示してゐる。但し、五百萬からの人口を容れる爲

3,000人+	2,000人+	1,000人+	750人+	500人+	500人−
京都、福岡 仙臺、佐世保 岡山、川崎 小倉、久留米 西宮、松本 山形、長岡 大分、四日市 千葉、今治 沼津、大垣 弘前、平塚 米子、高田	鹿兒島、小樽 岐阜、門司 高知、姫路 長野、高崎 清水、高岡 郡山、川口 米澤、市川 浦和、飯塚 鶴岡、松阪 川越、三條 酒田、海南 丸龜	靜岡、豐橋 岡崎、宇部 若松(福岡)、大津 盛岡、宮崎 八戸、福山 延岡、釧路 奈良、銚子 瀨戸、鳥取 熊谷、都城 上田、倉敷 石卷、新宮 唐津、中津	室蘭 宇治山田 直方 津山 八幡濱 宇和島	別府 秋田 帶廣 山口	萩
22	23	24	6	4	1

15,000人+	10,000人+	9,000人+	8,000人+	7,000人+	6,000人+	5,000人+	4,000人+
大阪 福井	東京 神戸 函館 那覇	濱松 青森 甲府 尼ケ崎 岸和田 尾道	札幌 堺 八王子 若松(福島)	名古屋 金澤 前橋 高松 戸畑 首里	新潟 一宮	横濱 長崎 八幡 横須賀 和歌山 大牟田 德島 宇都宮 佐賀 足利 福島 明石	廣島 吳 熊本 下關 旭川 富山 松山 桐生 津 水戸 松江
計 2	4	6	4	6	2	12	11

各都市の人口密度（一方粁ニツキ）

めには之れだけの面積が必要になつて來る事は、卽ち、唯徒らに面積のみが廣いのでない事は其の人口密度によつて判る。

(四) 人口密度　人口密度は面積に對する人口の比であるが、人口密集々團の事實を明示する爲めには、人口の定量、地域面積の外に人口密度を明かにしなければならぬ。換言すれば、全然無人境でない限り、地域面積が擴大すれば人口數も增加する理であり、唯人口數の絕對量が增加しても相對量、卽ち玆では一定面積の上に居住する人口量が同じ割合で增加するか否かは頗る疑問である。其處で密集々團の事實は人口密度によつて示す事が必要となる。昭和十年國勢調査による都市の人口密度と云ふと、市面積一方粁に對して、東京市一〇、六六七人、大阪市一六、一五一人、名古屋市七、二二一人、京都市三、七四四人、神戸市一一、一一九人、更に廣島市（四、四三八人）福岡市（三、二三三人）吳市（四、七五五人）仙臺市（三、一四三人）長崎市（五、一五一人）八幡市（五、四六七人）函館市（一一、〇三六人）靜岡市（一、三五九人）等の割合を示してゐる。六大都

市の內では大阪市が筆頭で、全國都市密度に於いて最高位でもある。東京、神戸は一〇、〇〇〇人級の密度を持つてゐる。名古屋、横濱は之れに追從はするが七、〇〇〇人、五、〇〇〇人級で大分差がある。更に京都となると僅かに三、七〇〇人の密度で大都市として頗る低位である。之れは市域面積の厖大を物語つてゐる。昭和十年當時の「市」一二七市に就いて其の人口密度を分類すると前表の通りである。我國都市の密度として一、〇〇〇以上四、〇〇〇未滿が壓倒的に多く其の合計六九市に及んでゐる。次いでは四、〇〇〇—五、〇〇〇人級（六、〇〇〇未滿）で合計二三市を算ふ。最低は萩市の四一一人であつて、同じ都市と稱し乍ら大阪の一六、一五一人との間には頗る大きな隔がある。

1方粁人口密度	2000+		750+	500+	250+	100+	100-
府縣數	2		1	2	9	30	3
%	4		2	4	19	64	6

比較的に人口の少い都市で人口密度の高位にあるものは、福井、那覇、函館、札幌、青森、濱松、甲府、八王子、若松（福島）、岸和田、堺、尾道、首里等の諸都市がある。いづれも密度では八、〇〇〇人內外であるが人口量の必ずしも多くないのに此の密度を有してゐるのは、いづれも市域面積が頗る狹いからで、卽ち是等の都市は面積では前揭表に於ける一〇方粁未滿の階級である。反之、密度低位にあるものは、別府、萩、秋田等の如く人口數に比較して面積が頗る廣大なる都市である（是等の諸都市の面積は約一〇〇—八〇方粁で上位に近く位してゐる）。

斯くの如く人口密度に就いて見ても一樣には標準を決定し難い。併かし全國府縣の人口密度に比較すると、確かに都市的人口密度の現象が判然とする。府縣人口の密度で最高は東京府の二、

九七〇人、大阪府の二、三六九人であり、第三位は非常に隔つて神奈川縣の七八二人となる。最低は北海道の三五人であるが、之れは特別とするも岩手縣の六九人、秋田縣の八九人等である（共に一方粁に對する密度）。總じて二〇〇人前後の密度が最も多い。

人口密度と經濟活動の關係

1方粁當の人口密度	經濟活動の種類
0—— 3	狩獵漁撈
3——10	牧草林業
10——25	農耕の創まり
25——74	農　耕
74——99	工業の創まり
99— 147	農　工
147— 197	工業優位となる
197— 988	工業都市又は郊外
988—1977	小都市の中心地
1977—4942	中都市の中心地
4942—9884	大都市の中心地

Gist and Halbert: Urban Society p. 5 ヨリ引用

之れによつてほゞ都市人口の密度に就いての觀念を得た事と思ふ。唯其の密度に於いて餘りにも著しい相違がある。

密度計算の問題として密度を飽く迄も標準にせんとすると一平方哩に就き一萬人を以つて都市とする、或ひは一千人以上とする學者がある。方粁に換算すると三八六人乃至三、八六一人となる。密度と產業又は經濟的活動との關聯のあることは否定出來ぬ。唯問題は標準が正確な「數」であるからして、「數」によつて精密に表はし得るか否かに在る。

以上列擧した四項目、人口集團、人口數量、地域、人口密度はいづれも人口と土地との關係丈けに立脚したものであつて都市に關する其の他の特色は全然無視してゐる。換言すればこゝでは都市原體として形態的な存在を呈示したに止まる。之れが直ちに都市の本質とは云へない。其の特色及び本質に就いては次節で說明する。

第二節　都市の特質

扨、以上述べた都市の原體に就いて、更に其の特質を求める事になると問題が漸く複雑して來る事に氣が付く。何故かと云へば、さうした都市原體の有する特質は多方面に亙つて頗る多岐であるから。元來、都市に於ける生活は生活の全方面が營まれてゐると云つて差支ない。政治もあり、經濟もある、文學藝術もあれば治安、司法、衞生もある、宗教もあれば娯樂もある、人間生活のありとあらゆる方面が其處で營まれてゐるのである。從つて都市の特質と云へば、此の全生活方面に亙つて都市と都市ならざるものとの異つてゐる點を凡べて擧げて來なければならぬ筈である。例へば政治的には主腦官署が所在してゐる、政治思想的には急進主義的である、行政的には市制施行によつて農村其の他から區別されてゐる。經濟的には非農業的産業活動が優勢である、經濟機構及び支配の中樞である、分業專門化の程度が著しい。文學藝術的には、文化の中心である最高又は高級教育機關が存在してゐる。美術工藝其の他藝術に對する愛好、趣味及び刺戟竝びに利用機會が非常に多い。都市的な犯罪及び警察、衞生、規則等が存在すると共に、宗教的活動及び組織も複雜である。娯樂に至つては種類が複雜なると共に享樂の機會及び機關が簡單に備つてゐる。更に電車、地下鐵道がある、高層建築がある、公設市場がある、公園があり、競技場がある……等々、各種の特質を揭げて來たらば際限があるまい。其處で、都市の特質を論ずる爲めには、かゝる特殊的個別的な特質を一々問題にするのではなくてかゝる生活體が何故出來たか、出來たとすると、その一般的共通的特質はどうあるか、之れを問題にしなければならぬのである。前者は都市成立の問題であり、後者は都市特質の問題である。此の兩者を併せて、都市の本質が理解される理である。都市成立の問題は次節に讓り、こゝでは前に述べた

意味の特質に就いて論ずる。

元來、一定の地域に巨大な人口群が聚合すると其處に色々の特徵が生れて來る。併かし先づ最初に、かゝる巨大な人口群が何故聚合するかに就いて一應考察して見なければならぬ。假りに百萬の大軍を一地點に糾合すると云つたものに類する場合もあらう。オリムピックの樣な競技場に數萬の大衆が參集する場合もあらう。併かし是等の人口群は玆で問題にすべき性質のものでない。玆で云ふ人口群は、國民社會・經濟の生活上、自ら規定されて成立した人口群に就いて云ふのであつて、其の意味では、一時的でない常住的人口集團である。吾々が普通、生活を營むに當つて、少くとも現在の社會では前節に述べた樣な形態で巨大な人口集團を成立せしめてゐる。かう云ふ意味の——判つきり云へば國民・世界經濟的に規定された——人口群が玆で問題となるので、かゝる集團には、自ら根本的な特色が生れて來るのである。之れを列擧すると、

一、職業的特質　比較的に狹少の土地に多數人口が生活するには、彼等の生活々動に廣大な面積の土地を必要とする職業の營み難いのは當然である。此の理由に基いて、都市の職業的活動は主として非農業的産業其の他に限られる。現代の生産技術を以つてしても農業では廣大な土地面積を必要とするが、勞働人口は其れ程、卽ち密集的になる程必要がない。從つて、農業地にあつては、人口が全く散在的であるか、或ひは一部、村落又は漁村等に於けるが如き場合には密集的であつても其の周圍に廣大な農耕地を包有してゐるからして人口集團としては勢ひ低位に置かれる。反之、都市の産業・職業活動は各人に就いて廣大な土地面積を必要としない。商工業殊に商業はさう

第二節　都市の特質

である。從つて商業は最も都會的性質の職業であると云へる。反之、工業にあつては相當廣大な土地面積を必要とするものがある。故に是等の工業は廣大な面積が容易に手に入る地域、卽ち郊外又は大都市附近の田舍に推移する傾向があり、都會でも殊に最も都會的な中心部（都心地）には工業の營まれるものが少くなつて來てゐる。

職業別	有業人口			有業種別各比率	
	總數	都市	郡部	都市	郡部
農業	14,140,107	262,474	13,877,633	1.8	98.2
水產業	546,624	44,835	501,789	8.2	91.8
鑛業	251,220	18,623	232,597	7.4	92.6
工業	5,699,581	2,228,842	3,470,739	39.1	60.9
商業	4,478,098	2,045,723	2,432,375	45.7	54.3
交通業	1,107,574	481,612	625,962	43.5	56.5
公務自由業	2,044,151	894,045	1,150,106	43.7	56.3
家事使用人	781,319	337,112	444,207	43.1	56.9
其他有業者	570,966	253,484	317,482	44.4	55.6
計	29,619,640	6,566,750	23,052,890	22.1	77.9

此の理由に基いて農業でも比較的に巨大な土地面積を必要としない經營例へば蔬菜殊に花卉、就中其れ等の促成栽培に至つては、必ずしも米穀農業又は林業の樣に廣大な土地を必要としない故、而して他に積極的な理由として、市場に搬出の急速を要する爲めに、大都市の近傍に所在する場合が在る。同じ農業と云はれる種類の內にも色々の差別があり、それに從つて職業的活動及び其の生活が違つて來る理で、通例都市と農村、市民と農民とを一概に對立させて了ふが、所謂農業中には、其の經營が寧ろ工業的に近いものがあり、從つて職業活動及び生活としても農民よりは市民的なる場合が少くない事に留意せねばならぬ。

要するに職業的活動では、都市は非農業的活動によつて生活してゐる所と云つて差支ない。統計によつて示せば上の通りである。

	內地全國	都市	郡部
總人口（總人口：郡部人口）	64,450,005	15,444,300	49,005,705 76%
有業人口（有業人口の百分比）	29,619,640 (46)	6,566,750 (43)	23,052,890 (46)
無業人口（內地無業人口：郡部無業人口）	34,830,365	8,877,550	25,952,815 73%
有業者1000中の各職業別比率	內地總數	都市	郡部
農業	477.4	40.0	602.0
水產業	18.5	6.8	21.8
鑛業	8.5	2.8	10.1
工業	192.4	339.4	150.6
商業	151.2	311.5	105.5
交通業	37.4	73.3	27.2
公務自由業	69.0	136.1	49.9
家事使用人	26.4	51.3	19.3
其他有業者	19.3	38.5	13.8

之れによつて見るといづれの產業に於いても郡部有業者が優勢であるが、其の尤なるものは、農・水產・鑛業の三種目で、工業を除けば他の種目は殆ど同率に近い。加之、都市及び郡部內に於ける有業人口の比率を求めると、上表の如くになる。

兎に角、職業的に觀察すれば都市が非農業的產業及び活動を以つて特徵としてゐる事が明かであらう。其れ故、都市とは、其の必要とする農生產物を他の土地から輸入する地域團體であるとも云へる理である。（『日本都市年鑑』による、數字は昭和五年國勢調査）

二、自然的物的環境による特質　都會的人口集團と非都會的人口集團及び其の土地

都會的人口集團と非都會的人口集團とは人工的であるに對し他方は天然的である。一方が鐵・煉瓦・コンクリート・舖裝街路・庭園・綠地であるに對して他方は森林・草原・細流・耕地・丘陵の環境である。一方では晝間も夜間も人工光線で作業を行ふに對して他方は日出づると共に働いて日沒するに熄む生活である。風水氷雪、酷暑嚴寒は前者には影響する所比較的輕微であるが後者には頗る重大な關係を持つ。かゝる物的自然的環境を異にする二種の生活集團は、當然、全生活の態樣又は

テムポが之れに順應する。一方では晴雨寒暑に關係なく極めてスピーディーな生活が行はれるに對し他方では自然力に影響された悠久な生活が營まれる。商業的工業的活動は分秒を爭ふ。農生產の過程は天地と共に悠長である。之れが市民及び農民の肉體及び精神上に影響を與へる所頗る大なるは論を俟たぬ。要するに都市に於いては吾々生活の對象は人間であり、社會である。反之、農村ではそのより多くが自然力であり自然的過程である。

三、人口量及び人口密度による特質　人口量及び人口密度に就いては既に述べた故に玆で說く必要がない、唯一般的命題としては、人口量及び人口密度が大なれば大なる程、より都會的となり、反對に是等が小なれば小なる程、非都會的、農村的となると云ふ事を述べておく。

四、組織及び制度による特質　社會は集團的生活體である故に、常に何等かの組織と制度とを持つ。多勢の人が一緒に生活してゐる爲めに、(イ)全體の爲めに個人を規律する組織や制度が必要となると共に、(ロ)個々の人々が處理するよりも、全體を包含して特定の機關に處理せしむる方が便利の場合があり、其處に再び組織が生れて來る。例を以つて云へば交通統制の如きは巨大なる人口集團の社會に最も必要な事であつて、人口集團が小さい場合には其の必要を見ない。之れと同樣な取締規則が田舍に比して都會には多い。更に田舍では各自が銘々井戸を掘つて飮用水を用意するが都會では水道經營者に委せて飮用水の供給を得る。宴會の如きも田舍では自宅で自家の手で行ふに對して都會では料理屋でやる。又は自宅で行ふにしても料理屋を出張せしめてやる。斯樣にして多勢の人々が一緒に生活してゐると、色々の組織や制度が出來て來る。それ丈け各人は自分の專門の仕事に沒頭すればいい理で、斯くの如き組織や制度の反面は、分業と云ふ事實に外ならない。教育は學校で、醫療衞生は病院で、治安は警察で、食事も食堂で……等々である。之れが昔や田舍では、一應自家で全部やらねばならぬ事共であつたし、又現在でも其の或る部分は自家でやつてゐる所がある。

五、社會構成による特質　人口集團の大小によつて生ずる特質として、當該社會そのものゝ性質に就いての特徵がある。假りに、家族も一つの社會であるが、之れは他の社會とは頗る違つてゐる。遊び仲間、學級等いづれも一つの社會であるが之れも性質が違つてゐる。然らば集團の大小によつて社會構成上如何なる相違があるか。次に是等の諸點を列擧してみよう。

(イ)大社會にあつては、社會的結合が單純でなく複雜になつて來る。親近、同類、近隣等による結合も無いではないが、むしろ其等は稀薄になるか或ひは潛在的になつて、主として利害關心による結合の方が强力となり表面に現はれるやうになる。例を以つて云へば、家族では家族意識が最も强力で、家庭生活上個々の利害關心はむしろ第二次的である。同村同鄕の人々は鄕土感が强く、直接的な利害關心に動かされてゐるものではない。反之、大都市なぞになると、最早、鄕土心なぞは稀薄になつて來てゐる。同市の人だからより深く結ぶと云ふよりは、何か直接的な利害關心を以つて結合する方が强力となつてゐる。市政を行ふ、市營事業を行ふ、是等はいづれも前に述べた樣に同一地域に生活する大勢の人々の生活福祉を增進する爲めのものであるが、個々の市民に對する結合感は、是等の施設及び組織によつて何れ程の利益が與へらるゝかと云ふ點に懸つて來る。勿論、移動自由の現代に於いて

も、完全に移動の自由を持つてゐない。多くの人々は、何等かの理由によつて一定の土地に定住する、又は居所を轉々する事を餘儀なくされてゐる。從つて自分の住む都市の施設、組織が悪いからと云つて直ちにその都市を去つて他に移動すると云ふ性質のものではない。善かれ悪かれ、一定の命令がある限り、其の都市に留まつてゐる。故に、其の都市に留まつてゐる事が、市民意識に基くものでないと共に、若し幾分なりとも其の土地に執著を強からしめんとするならば、其の土地を住み良い町であらしめる、即ち施設、組織に於いて萬全を期する態のものであらしめねばならぬ。要するに利害關心に訴へるの外はない理である。これ大社會の特質である。

（ロ）大きな社會を構成する場合にも、直接、個々別々の一個人がその大きな社會を構成するのではなく、間に無數の中間的な中・小の社會がある。從つて此の小さい社會では別であるが、大きな社會では個人と云ふものは、一つの抽象化され範疇化され定型化された存在となる。即ち何の誰がしで無くて一個の老人・成年・少年・子供であり學生・會社員・軍人・官吏・勞働者であり、金持・貧乏人であるに過ぎない。反之、小さい社會では何の誰がしと云ふ事が判つきり分つてゐる。田舍では他人の家の事を自分の家の事よりもよく知つてゐる。大都市では隣家の人々を知らぬ許りでなく、間借人や下宿人についても何等詳しい事、本當の事を知らない。成程、新聞やラヂオ雜誌等で大都會でも著名な有力者に就いては皆が相當詳しく知つてゐる様に見える。併かし此の場合と雖も、其の知識は皮相的なものであつて、例へば金融資本家としてのA、政治家としてのB、軍人としてのC等について、その人々の名前を吾々が口にする場合でも、金融資本家、政治家、軍人の一般的な抽象的な典型的な傾向に就いて語つてゐるに過ぎないのである。之れが大きな社會に於ける對社會的、對人的關係の特色である。狹い社會ならば其の本格的資質が充分認められるに對して廣い社會では、之れが全く認められないで、外形的にのみ觀察されるのである。其の結果、如何なる心理的、道德的特質が生ずるかは別の項で詳しく說明しよう。

第三節　都市の成立

都市はどうして出來たか。今日の都市が人類の永い歷史的發展の結果である事は論ずる迄もない。そして現在あるが儘の形態のものは過去と現在と將來との混成的產物である事も疑問ではない。何故かと云へば、凡べて現存するものは、在るが儘の人間及び社會、其の資質及び手段（富）並びに將來に對する努力（理想）等によつて規定されるからである。在るが儘の人間及び社會とは過去の所產であり、其の資質及び富は、過去の文化を傳統し、自己の勞働を加へて得たものであり、其の勞働に當つて、將來への渴仰即ち理想心の高低が著しく影響を及ぼしてゐる。此の意味で現存するものは過去・現在・未來の三者一體の姿である。都市にしても同じである。現在の大都市を建設する爲めには多大な技術的進步を前提とせねばならぬ。例へば幾十階層の高層建築は、鋼鐵とコンクリートと電氣の技術を前提として出來てゐる。又、今日の都市の形態は土地私有權の基礎に立つてゐる。貧乏人が低濕地、日蔭地に密集し金持が高燥明朗閑靜な高臺に邸宅を構へる、いづれも私有制の規定する所である。從つて現在の都市形態は、かうした制度・組織・技術等の前提・條件の下に規定されてゐるのであつて、是等の條件及び前提を異に

すれば自から都市形態も變化するであらう。

故に現代の都市の成立は、現社會組織の基本的條件によつて規定されてゐると云ふ事が出來る。

既に述べた樣に都市と云ふ言葉丈けの問題ならば、古代都市、中世都市、近代都市と云ふ樣に色々性質の異つたものを都市と呼んでゐる。併かし各〻成立の條件が異つてゐるが故に、又別個のものとも考へられねばならぬ。そこで、一般に都市の成立する過程を考察した上で、更に現代都市の成立を檢討してみよう。

或る定量の人口集團が一定地域に密集生活體を爲す前提條件としては、一つのより廣い社會とその地域とが先在する必要がある。換言すれば都市又は都市類似の現象が發生する爲めには、社會生活が或る程度まで廣大でなければならぬ。具體的な例を以つて云へば、我國に就いて見ても日本と云ふ大きな國及び國土の廣い生活があつて都市現象が生じて來るのであつて、若し之れが、山間海邊に未開野蠻の土人が小部落で生活してゐる形式ならば、都市現象と云ふものは生れて來ない。從つて都市成立の前提としては、廣い地域に互るより大なる社會生活の存在を必要とする。かゝる廣い地域（領域）と大なる社會生活が、都市的なものと然らざるものとに分けられてゐるのである。普通、都市の分布と云ふ言葉を用ひるが、都市が一つにせよ多數あるにせよ、分布と云ふ意味は、玆で述べた廣い領域、大きな社會の內部的一部分と云ふ意味に外ならない。

かゝる關係で都市と對稱の地位にあるものは、卽ち普通には農村である。從つて此の廣い領域、大きな社會は都市と農村、町と村とに分類される理である。然からば、何故斯樣に分れて來るか。若し都市が前述した樣に農業活動に依存しない生活體とするならば、都市生活者の要する農生產物の量丈けは當然、都市外部の者によつて補給されねばならぬ。換言すれば農村生活者の活動によつて補給される理であり、此の補給は國外からであつても差支ない。其處で都市と云ふ生活體が成立する爲めには、先づ第一に、其の社會の一部分が農耕に從事しないでも、差支ない丈けの、農業力が存在しなければならぬ。卽ち農業生產力が比較的に大であつて、一部の人々は農業に從事しないでも、農產物の補給に事缺かぬ狀態に置かれねばならぬ。故に都市成立の第一要件は、農業生產力の發展と云ふ事に在る。卽ち、此の生產力の發展によつて人間が土地から解放されるのである。

次に此の非農業的都市的生活體が農產物の供給を得る手續は何か、玆に色々の都市の型が現はれて來る。例へば經濟的交易による場合がある。非經濟的な力、卽ち租稅貢租の如きによる場合がある。單なる暴力、略奪に依る場合がある。卽ち何等かの形式で、農村の餘剩產物を都市に收納する方法が備つてゐなければならぬ。假りに農村と都市との連絡が切斷して了つたとすれば、都市は食糧の供給を斷たれるので、其の存立が危殆に瀕する理である。從來の都市と農村との此の關係を觀察すると、一種の支配關係がある樣に思はれる。元來、都市的形態の生活集團の最初に成立した時代には、決して都市農村間に經濟的交易によるものではなかつた。むしろ政治的支配の形式による農產物補給であつた。兩來、農村は都市に對する働蜂の役を務める丈けであつて、都市は此の榮養の補給を受けて、獨自に文明を進步せしめ文化を上昇せしめて來た。都市・農村の關係に經濟的交易が結びつく樣になつても、農村の働蜂的狀態は依然として繼續してゐる。從來の關係が政治的武力的支配であつたとするならば現在の形式は

經濟的支配の關係と云へよう。

かゝる都市・農村の支配關係は、同時に既に述べた廣い大きな社會の基本的關係でもある。されば都市とは全社會の支配力の所在地とも云へる。支配關係の中樞と云ふ事が出來る。政治都市――首都に就いて見ると之れは最もよく現はれてゐる。東京・伯林・ロンドン・巴里・羅馬・ワシントン等いづれも政治的支配的中樞である。そこで此の支配中樞の觀念を擴大して行くと、都市とは社會生活の中心地、中樞だと云ふ結論に到達する事が出來る。

元來、組織とは個々の部分を整備して全一體となし、一定の機能を發揮せしむるものであるからして、個々を律して全體に協和せしめる力が其の內部に藏されねばならぬ。假りに經濟上の活動を例にとつてみる。農民が自己の必要とするもの丈けでなく、同じ社會に屬する他の人々の必要に對しても農產物の生產に從事しなければならぬ樣な經濟組織の下に於いては、前述して樣に、政治的支配によるか、經濟的交易によるか、或ひは宗教的義務によるか、いづれにもせよ農業に自ら從事しない人々の爲めにも農民は生產しなければならぬ强制、又は刺戟が存してゐる。かゝる强制となり刺戟となる力は具體化されて現實に現はれる。政治的權力としては君主・王侯・貴族・領主等が其れであり、經濟的關係としては市場が其れである。宗教的義務の關係としては寺院・教會等がそれに當る。從つて是等の具體的な支配權力が存在する所は、一般の土地とは、此の意味に於いて異つた土地となつて來る。

其の結果中央となる所には、甲・乙・丙・丁……等の各地方に連絡を有する組織を持つ事となり、其の點に於いては、甲その他の地方と全く性質を異にする。假りに市場に就いて云へば、市場町には、附近の甲・乙・丙・丁等の部落から人や貨物が運ばれて來る事に對する設備を持たねばならぬ。其處で農產物を容れる倉庫や物置、店舖があり、車や馬の置場、旅籠屋・飮食店等が用意されてゐる。是等のものは交易の中心である市場町なればこそ存在するのである。

斯くの如く、社會生活が行はれると、其の生活組織の諸方面に關聯して、中心的機能を司る土地が發生して來る。中心的機能を司る土地は他の土地と其の形態及び活動を異にする。之れが從來の都市を一般的に成立せしめる過程なのである。しかも社會生活上の便宜から一生活組織に於ける中心地は他の生活組織の中心地をも吸收合體する傾向がある。政治の中心に、經濟、教育、文藝の中心が合體するが如きが、此の現象である。

かゝる都市の成立が具體的には歷史的に規定されて來るのは當然である。既に述べた樣に都市成立の前提として大きい社會の存在を指摘しておいた。現在に就いて云へば、此の大社會とは一國社會であり、世界社會である。經濟的觀點から見れば、國民・世界經濟の社會を大社會として其の內に規定された都市現象なのである。之れが封建社會や古代社會と性質を異にするは當然である。

故に現代の都市は、國民・世界經濟社會を大きな社會として其の機構に基いて出來た、支配的中心的機能及び活動の所在である。現代の經濟社會が資本主義的であるが故に、現代都市は、資本主義的に制約された都市である。此處に現代都市の特色と本質とがある。

現代の都市が、一國民經濟、乃至は世界經濟の支配的中心的組織を含むものだとすれば、現代の都市の成立は、

其の代表的都市に求む可きであつて、決して個々別々の都市に求む可きでない。現代の代表的都市は、我國に就いて云へば東京・大阪・名古屋等を擧げる事が出來る。いづれも百萬以上の人口量を持つてをり、我國經濟の中心的活動地であると共に世界經濟にも働きかけてゐる。殊に東京・大阪の如きは、六百萬、三百萬の人口群を擁して正に現代都市の典型的なものである。ロンドン・巴里・伯林・紐育・羅馬等いづれも現代の代表的都市である、共に各國民經濟の中樞たると共に、世界經濟に參加する有力な地域である。從つて是等を稱して普通に世界都市と呼ぶが、正鵠を得た名稱である。

*東京	6,065	マドリッド	1,015
*大阪	3,012	ワルシャワ	1,179
名古屋	1,129	ウィーン	1,875
京都	1,107	ブタペスト	1,061
*上海	3,491	*モスクワ	3,614
北京	1,487	*レニングラード	2,711
天津	1,389	カイロ	1,196
カルカッタ	1,197	*ニューヨーク	6,930
ボンベイ	1,161	*シカゴ	3,376
*ロンドン	4,230	フィラデルフィア	1,951
バーミンガム	1,033	デトロイト	1,569
グラスゴウ	1,128	ロスアンゼルス	1,238
*パリ	2,891	リオデジャネイロ	1,701
*ベルリン	4,221	サンパウロ	1,151
ハンブルク	1,101	ブエノスアイレス	2,215
ローマ	1,008	シドニー	1,235
バルセロナ	1,061		

最近世界大都市の人口　1,000,000 以上
日本都市年鑑第七卷による　*は 2,500,000 以上

東京を例として說明して見よう。東京は我國の首都で畏多くも皇城の地、當然我國の中心ならざるを得ない。更に首府として中央政府を持つ政治的中心であり、經濟上では、大阪と共に我國及び世界經濟をも動かす支配力の中樞である。教育文藝に於いても高級教育機關をはじめ其の他文藝の諸設備が完備してをり、其の點指導的の地位に在る。從つて日本經濟の興隆に併せて、東京が世界都市として躍進的に勃興して來たのは當然であつて人口六百萬は正に其の證左である。從つて玆に六百萬の人口が密集するに到つたのは、かうした國民・世界經濟の發展に照應するものであつて、此の意味で六百萬の人口は、單に一人の人間の六百萬倍ではないのである。一人々々が現代社會・經濟的制約裡に置かれて出來た六百萬なのである。

以上說いた如く、都市又は都市的なるものは廣い社會生活の中心機能の所在として成立した。從つて、各時代各土地に於ける組織發達の程度に對應して、中心型態も色々と變化して來る。一國にあつて一、二しか算へ得ない樣な巨大な都市、人口數百萬に及ぶ大都市は現代社會・經濟組織の中心機能乃至は支配中樞として其の成立を見たのである。最近に於ける世界大都市人口百萬以上のものは三三市、二百五十萬以上のものは、一〇市に過ぎず、然かもかゝる巨大都市が一國內に二を超えるものは全くない事實は右表に示す通りである。

第一章　都市理論・都市社會學

上記の如き都市、殊に大都市が多岐多様の問題を含んでゐる事は改めて說くまでもない。玆に所謂、都市問題なるものが存在する。從つて之れを解決する爲めの理論體系が必要となり其の研究方法が論究される。以前より、都市學又は都市科學の研究又は確立の必要が屢〻提唱されてゐた。併かし獨自な立場や領域又は方法を持つた都市學なるものが果して成立するかどうか。都市を綜合的に觀察すると云ふ見解は承認する事が出來る。後段にも述べてある様にたゞ一つの現象も決して全體的なものから分離又は遊離して發生したものでは無い。併かしあらゆる科學の分野を綜合したものが都市學又は都市科學だと云ふのは幾分無理な解釋である。

「大都市を出來る丈け抑制する爲めには、其の一方的支配の時代を過去のものたらしめるには、又大都市に殘る所のものを出來得る限り無害のものたらしめんが爲めには、人間を大都市に赴かせるものが何であり、又大都市に於ける人間からは何が生ずるかに就いて眞理を探究しなければならぬ。確實なる知識、つまり大都市の科學（ウサセンシヤフト）、大都市研究が必要である」（Willy Hellpach: Mensch und Volk der Großstadt. 1939）

此の立場からは決して一つの學問丈けが出て來るわけには行かぬ。色々な科學がいづれも「都市」に對して自己の領域を主張するであらう。

第一節　都市研究

都市を中心としての問題が複雜であるを以つて都市研究の分野は當然複雜ならざるを得ない。或る都市研究者は左の諸項目を列擧した。（一）自然的環境、（二）人口情勢、（三）經濟狀態、（四）地方政府、（五）社會的組織、（六）社會的分裂、（七）社會的支配力、（八）鄉土史。此の項目は、或を都市を特定して研究せんとするに際して採用される方法であつて、都市一般に就いての研究方法とは聊か趣を異にする。

前に指摘した様に都市理論は實際問題の刺戟を受けて發達してゐる傾向がある。市區改正や都市計畫の必要に迫られて都市社會學や都市景觀論及び社會生態學の發展が刺戟された様なものである。米國都市學者の云ふ様に貧民窟事業が都市研究の發端と云ふ事も敢て過言ではない。理論的體系としての發展過程を眺めると貧民窟、市區改正、街路事業等々の問題を嘗ては分離別個に切り離して取扱つたものであつたが、最近に於いては都市の些細な一現象と雖も、都市全體の情勢、態様に關聯せしめてのみ理解し得ると云ふ認識に到達した事である。卽ち貧民窟現象の如き、單に細民が不潔な陋屋に生活してゐると云ふ事實、從つて不良住宅を破毀し貧民を追ひ出して了へば問題は解決すると云ふ性質のものでなくて現代の大都市の生成には必然的に附隨して來る現象である。從つて單なる清掃事業だけではなく大都市の構成の過程を充分に研究してからでないと效果的な對策を採る事が出來ない事となつた。

かゝる意味で實踐的な都市問題にどうしても都市理論の體系が必要となり、惹いて都市研究への拍車となつた。

若し都市問題の一特殊事項を問題とするに際して都市全般に就いての理解が必要だと云ふならば、既に述べた様に、現代都市の一般現象を知る爲めには、是非とも大きな社會全體の動靜を知らねばならぬ。其處で、社會の基本的な關係としての經濟關係に就いての理解が基礎的知識となつて來る。都市現象は一般の文化的現象ではあるが、之れを分析して行くと、根本的には經濟現象であると云ふ事は間違なく主張する事が出來るから。從つて經濟學及び經濟發展の現象を主題とする經濟史が、一般都市研究者の出發點である事は云ふ迄もない。既に述べた様に、現在の都市現象を、此の基本的な經濟現象から游離して觀察し研究する事も出來る。又其の必要も可なりあると思ふ。併かし實踐性を具有した都市研究としては、問題の性質、其の據つて生ずる機緣が理解出來なければ凡そ實際的指導理論とは隔つて了ふ。都市問題は地域性と職能性の現實的混成である。人口五百萬の集團は、唯漠然たる人口の集團でない。各〻職能に基いた——經濟的活動を以て組成された社會機構上の實在なのである。例へば、遊學の爲め滯留中の學生や所謂不在地主の如きも、いづれも、直接都市の經濟的活動に參加するものではないが、他所に於いて得られた經濟的收益の大小によつて規定された存在で、收益の大小が彼等をして都市に生活せしむる可否を決定すると共に、彼等の購買力は都市活動に對する一種の資源となる。故に單に文化的生活の享樂の爲めに都市に在る人口層に就いても、其の經濟的基本關係が判然としてゐる。

斯くして、若し都市研究の第一歩を云ふならば經濟學及び經濟史に指を屈しなければならぬ。更に、單に經濟機能の分析で終つてならぬものであるが故に、卽ち「都市」なる地域性の問題にまで發展しなければならぬ故に、經濟學及び經濟史を此の「地域」と云ふ觀點から分離させてはならぬ。玆に於いて都市及び農村の「地域性」構成に關係する經濟的史的經過が問題となる。從つて土地に關する研究、地理學が充分前提的な役目を果す事になる、殊に經濟活動の地的分布を問題にし、資源を問題にする經濟地理學及び土地と社會との關係を取扱ふ人文地理學は共に都市研究の上に於いて無視する事の出來ぬ領域である。晩近の趨勢として地理學者の都市研究領域への進出は注目に値する。

人間の社會的關係、社會作用を主題とする社會學が、都市人口集團に關聯して重要な事項である事は云ふ迄もない。現に「都市社會學」なる學問は社會學領域に於いて如何に都市が豐澤なる研究領域であるかを物語つてゐる。都市社會學に就いては第二節で說明する豫定であるから玆では細論を省く。經濟的約束に基いた巨大な人口集團内に於ける社會的接觸や社會作用に就いての理論としては、誠に興味深きものがある。

社會を政治的又は行政的に組織立てるに當つて政治學又は行政學の問題となる。玆で「都市」に對する政治・行政學的課題が發生し、惹いては自治・市政論又は地方行政論への理論的發展となる。又、組織體の問題ともなれば經營學は重要な助言者となる。蓋し都市行政又は經營に於いて、事業遂行が合理化される必要があり、其の合理的主體として都市政府が好適なりや否やの問題が重要となるから。米國の市政研究に於いて市政府の行ふ職能を三つに分け先づ政治（ガヴァメント）、次に事業（ビジネス）、最後に慈善（チャリティー）とし、いづれの市政府も此の三位一體の職能を行ふものであるとした。事

業とは事業本來の精神で行はる可きもので、其の指導原則は經營理論でなければならぬ。或る事業の遂行に當つて市政府が經營するか否かの斷定は、經營原則からも判斷されねばならぬ。

社會心理・社會倫理・社會病理學等が都市研究に關係する點は頗る多い。流行の問題や、制度の道義性や犯罪、精神病等の現象が都會的現象である限り上記の諸科學が、都市研究に及ぼす關係は決して僅少でない。

社會・人文科學的領域を離れて自然科學の方面に入つても頗る問題がある。先づ土木建築學に就いて云へば、建築及び土木學の今日の如き發達がなければ、現在の如き都市を、少くとも其の特有の形態を見る事が出來なかつたであらう。實際上に利用性がある高層建築は鐵と混凝土建築の技術的進歩のお蔭である。人口密集の根本條件は交通機關の發展であるが、玆には機械工學の恩澤があり、動力に照明に電氣工學の及ぼした貢獻を見落してはならぬ。社會醫學・衞生學は吾々の集團生活に對して環境改善の指導原理を與へる。騷音防止、煤煙驅除、汚水淨化等自然科學が吾々に關係する所、頗る大である。尙ほそれ、映畫、ラヂオ、テレヴィジョン、印刷等の技術に至れば吾々の全生活はあらゆる方面に於いて、深遠な學理研究の成果に包まれてゐると云つて差支ない。

扨、かう列擧して來ると何人も、都市研究の多方面なるに就いて寧ろ困惑せられるであらう。若し都市を研究し市政を執る場合に、かゝる多方面に互つての知識及び研究を用意しなければならぬとすれば、それこそ最難事である。吾々の研究がかゝる多方面に分裂してゐたとすれば恐らく研究の進歩を見なかつたであらう。玆に於いて吾々は都市研究の基本的な理論として、第一に經濟學及び經濟史に據る經濟理論、第二に社會學による社會理論、而して第三に政治・行政學による行政理論の三者を以つて指導理論とする。しかも經濟理論を首位に置く事については前に說明した通りである。若し其の他の諸科學との關係に至つては、成程重要ではあるが、第二次的と稱して差支あるまい。交通機關の改良は都市形態を修正するかも知れぬ。建築樣式の變化も同樣である。併かし常に理想に向つての努力を實現するに缺く可からざる要件は技術的完成と資力である。此の意味で現實は常に理想の方位へ向つて、技術的完成と資力との妥協線上にある。架空的理想を描くのは容易であらうが、現實に立脚しなければならぬとすれば、經濟的基本關係の如何に重要であるかが明白にならう。

扨、飜つて我國に於ける都市研究の發達を見ると、文明批評的な都市批判を別にすると、先づ第一は市政論に創まる。之れは昭和十三年四月に五十周年を記念した自治制發布（明治二十一年）以來、最も早くより研究されたものであつて水野錬太郎氏は此の方面に於ける現存せる大きな存在である。之れを以つて我國都市研究の第一期とする事が出來る。我國都市の發達が兩來著しかつた事は前に述べた通りであるが現代都市の體制を調へるに至つたのは大正年間で、此の頃より研究の第二期に入つたと云つて差支ない。卽ち故後藤新平氏が東京市政に乘り出すや（大正九年）米國都市學者C・ベアード博士を招聘して市政並びに都市經營に盡力せられた。先きに述べた、經營としての、或ひはビジネスとしての都市問題は此の時期に於いて檢討せらるゝ樣になつたのである。この傾向の遺鉢を繼ぐものが東京市政調査會であつて、我國最大の都市問題研究の機關である。之れと前後して米國社會學界には都市社會學研究の風潮が興り（一九二五年頃）急速な發展を見せた。社會學的研究の動機は既に述べた樣に、具體的な一問題

の解決が、都市全體に關聯ある點を認識させるに基いてゐたので、實際的努力が强力となればなる程、全體に對する理論的把握が肝要になつた。我國都市研究に於いて此の傾向が流入したのは、極く最近の事であつていづれに於いても理論體系としては未完成のまゝ殘されてゐる。一方、大都市及び大都市地方の發達と共に從來の市區街路の改正が「都市計畫」となるや、益〻全體的理解の必要に迫られて來て、現在に於いては、都市成立及び發展の基本的關係への檢討が漸く盛んとなつて來た。我國都市計畫法は大正八年の制定にかゝる。其の事業としては區劃整理、道路網完成、地域指定等であるが、漸次、都市及び附近隣接地帶の綜合的計畫に及ばんとする傾向を示してゐる。かくして、都市そのものに對する全體的把握の傾向を以つて我國都市研究の第三期と云つて差支ないと思ふ。此の傾向の發展は寧ろ之れから將來にあるので、現在はその出發點にあるに過ぎない。

第二節　都市社會學

近來益〻都市評論の著しくなつて行く傾向がある、之れは一方社會評論上に於いて都市批判の反對觀點となる農村が先頃の世界經濟恐慌に於いて未曾有の窮迫に瀕した情勢が生み出したものであると共に大都會文化の中に社會的矛盾が潛む形勢にも因るものである。支那事變以後に於いては殊に兩者の生活對照が著しく刺戟的である爲め、大都市は縱橫に論難を蒙つてゐる。雜誌の論說又は中間讀物に於いて、新聞紙上に於いて、大都市生活は常に論評されてゐる。他方都市內部の問題に就いても殘された問題が少くない。近來の例としては近接町村を合併して所謂大都市を建設せんとする計畫の如き單なる行政的合併の以上に施設、事業、經營、其の方針及び整理等多方面に亙り大なる問題を殘してゐる。此の大都市の內在的問題は、大都市に對する外的批判を基準にして考察されねばならぬ。換言すれば現在の社會的情勢の內にあつて大都市の占むる地位、特質、職能及び其の變遷等を充分に了解した上でなければ、如何に此の大都市を整理し完備さす可きかゞ理解出來ぬ理である。此の基準なき都市政策は常に矛盾撞著、從つて不合理不徹底たるを免れない。此の意味に於いて都市の內面的外面的に綜合研究としての社會學的考察を重要視する。

一

都市社會學は目下の所、米國學界の研究として知られてゐる、然かも未だ新奇且つ未完成な學問と云はれてゐる。從つて都市に關する諸方面の學問及び研究の寄せ集めの觀を呈してゐる(註一)、併かしかゝる寄せ集め的研究も決して都市社會學の發達にとつて無駄なものではなく、將來の體系建てに對して可なり貢獻するであらう(註二)。要するに其の現狀は特定の方法、特定の範圍と他の研究及び學問に就いての交涉等の諸點に關して必ずしも判然としてゐないのである。例へば此の方面の纏つた參考書的文獻と云へば

Scott E. W. Bedford (edited); Readings in Urban Sociology (1927)

Nels Anderson & Eduard C. Lindeman; Urban Sociology (1928)

Sorokin and Zimmerman: Principles of Rural-Urban Sociology (1929)

Niles Carpenter: The Sociology of City Life (1931)

W. R. Davie: Problems of City Life: A Study in Urban Sociology (1932)

Noel P. Gist and L. A. Halbert: Urban Society (1933)

E. E. Muntz: Urban Sociology (1938)

等であるが此の內ベッドフォードの選集の如きは實に複雜多岐なる內容を示してゐる。歷史、地理學、經濟學、教育學、心理學、土木工學、建築學、病理衞生學、美學、交通論、社會事業論、趣味娛樂、庭園術等々が掲げられてゐる。カァベンタァの著書又殿沢に亙る（後段に出づ）之れに對してアンダァスン・リンドマン、ソロキン・ヂンマァマン竝びにジスト・ホルバァト等の著書は題目の配分、研究の方法其の他に就いて比較的統一を示してゐる。

（註一）The Trend of Urban Sociology, by Nels Anderson in "Trends in American Sociology" 1929.

（註二）The Trend of Rural Sociology, by C. C. Zimmerman in "Trends in American Sociology."

都市社會學が米國學界に於いて問題となつて來たのは一九二五年以降と云つて差支あるまい。

R. E. Park and E. W. Burgess (edited): The City (1925) E. W. Burgess (edited): The Urban Community. Selected Papers from the Proceedings of the American Sociological Society 1925 (1926) 及び前記の諸書の示す如く、一九二五年の頃を以つて大體其の出發期とする事が出來る。勿論その以前に於いて「都市社會學」なる名稱たくとも、社會學的研究のあつた事は疑ふ可きでない。アンダァスンにしても、米國に於ける都市社會學の出發點は十九世紀末の貧民窟研究にあると見てゐる、之れは米國許りでなく何處に於いても廣義に云ふ都市問題の先づ最初の出發點と見て差支あるまい。貧民窟清掃と市街地區劃整理とは可なり古くから問題であつた。

前にも述べた樣に都市社會學の反面は農村社會學である、農村と都市とは社會形態、文明形態として對照的なものである、故にいづれか一つの社會學的研究は當然他のものゝ同じ研究を必要とするのである。上記Sorokin—Zimmerman の著書表題は此の間の理由を明かにする。都會化と農村化（Urbanization and ruralization）は單に一つの裏の兩面である。從つて都市社會學の發生及び成長は農村社會學の夫れに負ふ所があり、又同時に其の逆も云へる理である。米國に於ける農村社會學的研究の嚆矢は一八九四—五年シカゴ大學の教授R・ヘンダァスンによる「亞米利加農村生活の社會的事情」と題する講義とせられてゐるが、農村社會學としての教材は主として一九二五年を中心とした前後に發してゐる。

A. W. Hayes: Rural Community Organization (1921)

J. M. Gillette: Rural Sociology (1922)

C. J. Galpin: Rural Social Problems (1924)

H. B. Hawthorne: The Sociology of Rural Life (1926)

C. C. Taylor: Rural Sociology (1926)

N. L. Sims: Elements of Rural Sociology (1928)

Sorokin and Zimmerman: Principles of Rural-Urban Sociology (1929)

等である(註三)が更に其の先驅を爲すものには、

J. M. Williams: An American Town; a Sociological Study (1906)

C. J. Galpin: Social Anatomy of an Agricultural Community (1915)

〃　　: Rural Life (1918)

N. L. Sims: Rural Community, Ancient and Modern (1920)

D. Sanderson: The Farmer and his Community (1922)

E. de S. Brunner: Churches of Distinction in Town and Country (1923)

(註三)　アメリカ社會學々會の研究報告に「農村生活の社會學」がある Papers and Proceedings of the American Sociological Society, Vol. XI. Sociology of Rural Life. (1917) 一九二八年には同第二十三冊に The Rural Community を出してゐる。

從つて農村社會學と都市社會學とは殆ど同時に出發したと見て差支ないが、其れにも拘らず農村社會學の方がやや早くスタートしてゐる(註四)。此の事情は我國に於いても同樣で既に幾多の「農村社會學」「農村社會研究」を出してゐるにも拘らず、未だ纏まつた「都市社會學」を聞かないのである(註五)。

(註四)　アメリカの社會學々會の分科には農村社會學分科がある。都市に關するものは Section on the Community. Section on Sociology and Social Work で一九二一年以來である。

(註五)　我國に於いては文明評論的なものとしては古くに米田庄太郎氏の『現代人の心理と現代文明』がある。然るに、我國に於ける都市研究の關心は從來、第一期市政論、第二期都市經營論に向けられてゐた。此の發達の第二期を劃するものは故後藤伯爵の東京市長時代に於いて成立した東京市政調査會である。方今漸く人々の研究關心が社會學的な方面に轉じて來た、之れは既に述べた樣に大都市そのものに對する外部よりする批判に基くものが多い。農村問題との關係に於ける『農村社會研究』經濟經救育濟、土田杏村氏の『農村問題の社會學的基礎』伊福部隆輝氏の都市の農村搾取に關する論攷文、柳田國男氏の『都市と農村』井上吉次郎氏の『村と町と』現代時代相に就いての大宅壯一氏の『モダン層とモダン相』『サラリーマン恐怖時代』に於ける青野季吉氏等を擧げる事が出來る。更に小川市太郎氏『大都市』倉橋藤治氏『大東京物語・經濟生活篇』等がある。鄕土科學の研究は社會思想の方向決定に關して幾分道德的色彩を以つて盛んに論ぜられてゐる。雜誌『社會學』第一號に於ける米村竹男氏の「アメリカの都市社會學」はシカゴ學派の理論を紹介するものにして漸く都市社會學研究の機運の熟せるをみる事が出來る。例へば『日本社會學會年報』の社會學第四輯は「都市と農村」を主題に編輯されてをり、併せて同誌所載の齋藤晃一氏「都市社會學邦文文獻」中にこれを窺ふ事が出來る。

是等の事情は先般日本に於ける農村情勢と同じく、農村問題を焦眉の急として發達したものと思はれる。今日より餘程以前に於いて、都會對農村の關係で農村の急迫が唱へられてゐた。農民離村、人口の都市集中、自作農の相對的減少等、所謂農村資本主義化の傾向に伴つて農村問題は既に喧しかつた。歸農運動、農村文化運動、自作農設定運動、其の他の農村救濟運動が早くから叫ばれてゐた。此の情勢は過般來の日本に最もよく當て嵌るもので、我

國の農村研究の熾烈なのは此の形勢の當然の成行である。

反面、都市文化に對しては、間斷なく其の弊害を摘發する批判が行はれた。工業都市の醜惡、混亂、喧騷、狂暴、道德の廢頽等や非自然的な機械化、貧民窟等に對してインダストリアリズムの風潮に抗する田園主義が叫ばれた。此の種の批判は農村及び其の風俗に批判の基準を求め樣とするのであつて、主として都市に於ける農村讃美論者の一群に發した。從つて彼等は農村社會の風俗習慣、生活健康等を觀察した。飜つて大産業主義の主流に泳ぐ者は都市をあるが儘に承認するのみならず、其處に現はれた人間の創造力に驚嘆した、人間の偉力に敬服した。誠に資本主義的勢力の支配する限り、巨大なる都市を持たない指導的國家は在り得なかつた。故にあらゆる弊害醜惡は、其の大部分が、一應は「止むを得ざる害惡」の名の下に默許された。保守的反動主義的田園論者は、現實の勢力に抑へられてしまつた。從つて都市内部に於ける改良運動は、綠地運動とか田園都市運動とか住宅改良とかの妥協的な計畫に墮してゐた。

此の樣な事情で農村研究は一方には農村救濟の爲め、他方には農村讃美の爲めに、此の大都市文化の渦中に於いて發生して來た。チンマァマンが指摘してゐる樣に、初期の社會學的研究はいづれも、改良主義的觀念を擔ふたものであつた。

然かるに世界大戰を期として、資本主義經濟の機構に重大なフリクションが生じて來た、此の摩擦によつて發生せしめられた現象は世界恐慌である。此の世界恐慌は、嘗て資本主義文化の精華と云はれてゐた大都市を其の渦中に、當然にも捲き込んだのである。玆に於いて大都會の世紀末的な風潮が生じ出した。漸く人々は大都會なるものの存在に無限の驚嘆や無條件の承認を與へなくなり、反對に之れを疑ふに到つた。之れより以前、世界經濟に於ける資本主義經濟の活動が敏活となるや、玆に完全なる「ウルバニズムス」の傾向が現はれて來た。之れは勿論、時代的に見れば二十世紀に於いても十年代以降の所産である。ウルバニズムスは資本主義の完成に則いて同じく完成したと云つていゝ。此の時に於いて嚴密な意味での「都市」と「農村」とが對立した（第四章第五節參照）。社會機構に於いても富に於いても、又風俗習慣に於いても、兩者はその多面に於いて對照的となつて來た。此の社會的對照が、當時發達して來た社會學者にとらへられ、一團の社會學者は世界大戰の前後に於いて「都市社會學者」となつて現はれて來たのである。而して其の成長を助けたものは前述の如く、第二十年代に於ける世界經濟上の行詰りと大都市の混亂とであつた。(註六)

（註六）前記アメリカ社會學々會の研究報告第二十册は「都市」を研究題目にしてゐる（一九二五年）、第十八册は Trend of Population (1924) を取扱つてゐる。R・E・パァク編纂の The City (1925) E・W・バァジス編纂の The Urban Community (1926) は此の學會の大會に於ける研究報告を轉載してゐる（殊に後者）。右兩書に於ける序文によつて參照すべし。

二

以上簡單ながら「都市社會學」の發生の事情に就いての推察を下した。次に都市社會學の構成に就いて眺めよう。

都市社會學とは、嚴密に云へば都市社會に就いての社會學である、從つて其の研究の對象及び領域となるものは「都市社會」である。通例、人口の區分に從つて都市と田舍との二つの一般的差別を設ける。故に都市社會を分析し理解し以つて其の概念を得る事に努力する。第一の問題は定義の作成である。

元來、都市の定義の通常行はれるものとしては、統計學的定義、經濟學的定義がある。社會學的の定義の一つとしては社會體制の特色に基かしめる定義がある(註一)、或ひは農村社會と都市社會との各自の對照的特色を列擧する方法もある(註二)、個人又は團體の行動及び精神的型式即ち社會的過程によつて區別せんとするものがある(註三)、著者は都市社會の發生的生成過程を眺めて社會生活の中心機能を藏するものと考へた。併かし、之れは全社會內に於ける都市の關係であつて、都市そのものゝ內容に直接觸れてゐない、即ち都市の社會機能を問題とはするが、地域社會としての都市そのものゝ特質を直接表明してゐるものとは云へない。此の點から見れば、特定の生活風習、反應、制度等を以つて其の標識とする定義法に長所あるを否定する事が出來ぬ。例へば

「都市とは一都市が爲す所のものである、都市とは一つの心の狀態、行動の一態樣である。村落、小都市生活を特徵づける第一次的群關係がもう一層複雜なる何物かに移つた時、近隣的關係が分裂し、各種の關心に應じて分離した一層小さな、一層孤立した單位となつた時、其の共同體を都市と呼び得る。或數の相似ざる諸の群が集つてゐるが彼等は最早古くからの鄕土的力で結合され統制せしめられなくなつた場合、吾々は大都市的生活の發端を見る。正式の統制が始められ、慣習に代つて法律となる。何等かの非人格的制度のものとしての都市の標識となるものは、統制が何等かの間接的機關を經て行はれる場合、諸規則の創始と云ふ事である。吾々が警察官を傭ひ彼をしてのみ他の者によつて作られた法律を一集團の上に勵行せしめる場合には、統制は非人格的となり、第二次的となる。一共同體が規則や傭はれたる機關を通じて度量衡を統制し始むる時、外來者、運輸、火災、疾病、燃料、水道、食料品等を統制しはじめたる時、其れは都市生成への路を進むものである。

村落、小都市、大都市は要するに多數なり少數なりの人々が共に生活せんとする努力に於いて適當なる生活風習を定めて行く典型共同體への名稱に外ならぬ。郊外も、其の住民の大部分が都會的條件で生活してゐるならば、中心的關係により接近して生活してゐる者の如く都會的であり得る。村落に其の生活の中心を置く者は其の時、村民となり、他の村民の隣人となる。田舍の生活は一層平靜で大都會生活に附きものゝ緊張に拘束さるゝ事少い。都市にあつては刺戟が多く、從つて一層流動的であり、其の關心も一層瞬時的であり農民や村民に比較して傳統慣例に縛らるゝ事が少い。斯くの如くして都市とは、政治的境界によつて區劃され統計學的に記述される、都會的行狀(Urban Conduct)の一地域である(註三)」

(註一)　井上吉次郎氏『村と町と』。

(註二)　Sorokin and Zimmerman: Principles of Rural-Urban Sociology. p. xxviii.

(註三)　N. Anderson and Lindeman: Urban Sociology.

唯、善かれ惡かれ、かゝる觀方は廣く一般的に市民の行動と云ふ事に重きを置き易い。從つて心理學的傾向を帶

びて來る。[註四] 其の結果、都市そのものを全一體として眺めると云ふ點で多少の不足がある樣に思はれる。例へば

「其の方法は……住民の正規的又は變則的諸關係に於いて、彼等の行動や環境を忠實に觀察する事」[註五]と云つてゐるが、そして其の環境の中には、家屋、道路、地理、隣接後背地方、賃料、地價、建築物の變化等の如き世間的事象も社會的意味を持つたものとして加へられて來るが、吾々はもう一層重要なものとして是等の、より其の方法が相關的關係に於いて考察するとは云へ、個別的對象の研究以上に全體としての共同體を觀察しなければならぬと思ふ。之れが爲めには、市民が神經質であるとか、變化が迅速であるとか、周圍が非自然的人工的であるとか云ふ點を重要視するによつては求められない。一つの時代に於ける「都市」の役目を社會史經濟史的に觀察する事によつて得られると思ふ。この點からして、著者は、都市を生成的關係から眺め定義する事も重要事であると信ずるのである。

（註四）"Community" in the Encyclopaedia of Social Sciences (Seligman) by E. C. Lindeman.
都市に於ける心理的因子の重要視に就いては Park: The City: Human Behavior in Urban Environment.

（註五）Anderson and Lindeman: ibid. p. xxi.

殊に定義は不變でないと云はれてゐる（アンダァスンーリンドマン序文三〇頁）都市は染料桶の如きものである。一度、他の色が混ずれば全體の色調に變化を來す。實際、都市社會學者は都市を以つて、不斷的可變の文化の中心にして、文明が不斷に再成され、新情勢が錯雜を加へつゝあるものと

して認める事からはじまる」（前揭書序文二一頁）と云はれてゐる。併かし、此の種の變化を以つて必ずしも都市そのものゝ動態觀察と云ふ事は出來ない。單に動いてゐるものを觀察するから其の研究を動態的と云ふを得ない。例へば一つの時期に於いて形成された都市、その內部の動きを觀る事は動態的ではない。動態的とは、此の時期に於いて形成せられた都市の特質の生成發展及び推移を觀察し研究する事を指すのである。此の全體的發展過程より切り離して一時的の一つの動きのみに留意するの誤りなる事は、彼等の主張する如く單一的事象の孤立的研究の然かると同じく誤りである。[註六]

（註六）Anderson: The Trend of Urban Sociology (Trends in American Sociology)

農村及び都市社會學をふくめて、地域社會學者の或者は、社會學的研究を以つて單なる記述的なるものに非ずして、法則及び原理を探究するものと主張してゐる。[註七] 都市生活の社會學的原理を見出す事は、古代、中世、現代の諸都市形態に互る原理を見出す事ではあるまい。多くの都市社會學者は此の點に於いて甚しき錯誤を犯してゐる。例へば屢〻引用した『都市社會學』の共著者の如き、古代羅馬のコロニエ、ムニシピア等に既に都市的なるものを見「都市なる觀念は、特殊なる特權、新しき自由、文化的特殊性等の相關物を伴ふ事に變りがない」[註八]と述べてゐる。併かしニューヨークやロンドン、パリ、シカゴ等を理解する爲めに、埃及の王都やバビロン等の研究を以つてするは迂愚なるのみならず、現代の實相を理解する上の妨げとなる。成程、「新しき自由、何等かの特權、文化的特殊性」を持つた地域社會は古代社會にも中世社會にも存在したであらう、併かし問題はかゝる抽象的な結論でなくして、

「如何なる自由、特權、特殊文化」を持つてゐたかといふ事を理解する、しないの點に係つて來るのである。成程、單に多人數が密集的生活をして居れば、それ丈けで特殊の社會的關係が發生するであらう。併かし、此の多數人は如何なる社會的約束によつて集められたか、之れが重要問題なのである。又、幾許の多數人が集められたかも、此の問題によつて決定されて來る。中世及び古代に於いて、四百萬七百萬の人口を以つて算ふる都市を構成し得たりや否や。されば石器時代に遡つて都市存在の有無を穿鑿し、ドルメンを構成する巨大な岩石を動かすのに多數の人力を要したであらう事から推測して、「是等の建築物の附近には、相當の大さを持つた組織ある社會に生活してゐた人々があつたに相違ない、彼等はいくつかの村落の集合で生活をしてゐたものらしい、其の社會がどんな形をとつたにしても、是等の人々は都會生活へ進んで行つたものに違ひない、何となれば彼等は比較的に稠密に居住し共同の爲めに團結的作業が可能であつたから」と云ひ、又は湖上居住者に都會的生活を認めるが如きに對しては、何人も之れに「都市社會學」の立場からでは、其の努力に相當し得る敬意を表し得ぬであらう。(註九)

(註七) Zimmerman: Trend of Rural Sociology. (Trends in American Sociology)
Sorokin and Zimmerman: Principles.
(註八) Urban Sociology. p. xvii.
(註九) N. Carpenter: The Sociology of City Life (Beginnings of City Life)

要するに、斯かる方法によつて導き出された結論は實際の說明に役立つものではない。之れを實際に役立たしめるには、改めて、現代社會の機構を見なほす必要がある。玆に於いてか、「都市社會學」なるものは、少くとも現代都市に關する限り、今日の大都市の構成、發展、推移を今日の社會的約束の中に求めねばならぬ。故に都市の定義に於いても、現在の現實の大都市を忠實に眺め、其の特色を列擧し、而して、此の特質が因つて來たりし社會的約束に關聯せしむるに如くはないのである。此の意味に於いての列擧的定義法は許さる可きものである。

普遍的な都市論を作らんが爲めに、歷史的に亙り、或ひは大中小を取り混ぜた都市にあてはまる樣な定義を穿鑿する爲めに、かゝる過誤を生ずるのである、今日云ふ都市とは資本主義社會の中樞を形成する地域社會であると對象を限定しなければならぬ。斯くの如くして、都市社會學は、資本主義社會についての社會學と云ふ意味で資本主義社會學の一部として成立する。資本主義社會の成立及び機構を研究する樣に、資本主義社會の都市の其れ等を研究するものである。

後段に於いて再び動態論、市民性の特徵等について論ずる所があらう。定義法に關する穿鑿は以上を以つて一先づ之れを措く、次に所謂「都市社會學」の內容を窺つてみよう。

三

都市問題研究の諸點としてA・E・ウッドは次の數箇條を揭げる (A. E. Wood: Community Problems)

(一)　自然的環境　(二)　人口情勢　(三)　經濟狀態　(四)　地方政治　(五)　社會的組織　(六)　社會的分裂

（七）社會的支配力　（八）鄉土史

都市社會學を構成する内容が全部之れを含むものでないのは明かである、アンダァスン―リンドマンによれば都市社會學は、

（一）其の位置、形體、構造等に於いて都市とは如何なるものか

（二）都市は如何に作用するか、又は其の過程は如何に

（三）都市は人間の性質に何を爲すか、或ひは都市によつて生み出される人間の態度及び社會の形態は如何なるものか

（四）都市生活より生ずる問題は何か

等の四點を檢討するにある。之れによつて、其の共著たる『都市社會學』は第一編都市の構造、第二編都市の機能、第三編都會的人格と集團、第四編社會的變化と都市環境の壓力等より構成されてゐる。

此の構成は當を得たものと云へよう。S・E・W・ベットフォードの『都市社會學教本跋萃』(前揭)の如きは、之れに反してあらゆる問題を含んでゐる。都市の文明史的意義、都市史、都市の定義、都市の位置及び膨脹、都市計畫、道路と運輸、都市美術及び建築、保健及び保安、住宅問題、共同社會體、近隣關係及び娯樂、教育宗教、社會的適應、社會事業等々を含んでゐる。從つて公園、道路、交通を論ずる一方、上水、下水、汚物處分も論じなければならず、隣保事業兒童保護を論ずる一方街頭裝飾を云々し政治的腐敗にも注視しなければならぬ。N・カァペンタァの『都市生活の社會學』(一九三一年)に於いてみると

（一）都市生活の發端　（二）都市の位置　（三）都市生活の形態的(フィジカル)背景（都市の構造、都市と都市地方）（四）都市の膨脹と其の統制　（五）都市住民　（六）都會的生活態様―個性に及ぼす都市の壓力　（七）同上―勤勞、家庭、信仰、娯樂　（八）都市生活の弊害面―貧困　（九）同―犯罪道德　（十）同―精神的缺陷及び疾病自殺　（一一）―（一二）都市生活の經濟―都市の供給力、汚物廢物處分、公共事業、政治、經營等　（一三）都市の展望　（一四）都市の成行―歷史的跋文

に分たれてゐる。

「都市社會學」が市民に就いての凡べてを描寫しなければならぬと云ふならば、之れでも差支ないであらう。各市民が汚物廢物をどう處分するか、塵埃は如何に處理されるか、等の問題は技術問題で社會學上の問題ではない。社會學上では幾百萬人かの人口の密集した土地に於いては、是等の處理の上にも一つの制度が發生し、一つの專門的機關が必要となると云ふ事を知る以上に及ぶ必要がない。故に都市研究が多方面に岐ると云ふ事は多方面の枝葉に關聯せよと云ふ事ではない。

比較的新しい文獻である、二三の著書に就いて見ても科學の名の下にその應用卽ち政策なり施設なりが多く說かれてゐる。デイヴィーの『都市生活の諸問題』は「都市社會學的研究」の副題を有するにも拘らず第一編（緒論）に於ける若干の理論的部分を除くと他の四編は住宅・保健・教育・娯樂の諸問題に宛がはれてゐる。更にマンツの

『都市社會學』に至つては其の標題が立派であるのに對して內容は前者と同じで第一編に「現代都市の進化」を論ずるに留まつて第二編より第五編に至る四編は前記の四問題を取扱ふに過ぎない。反之、ジスト・ホバァト共著の『都市社會』は其の標題にも似ず內容は理論的に整然としてゐる。卽ち第一編（緒論）は都市の興隆を、第二編は都市の分布的・選擇的過程（社會生態學）を、第三編は都市に於ける社會關係を、第四編は都市生活の組織を、第五編（結論）は都市社會の計畫と統制とを論じてゐる。

前に述べた樣に都市研究の發端は貧民窟の淸掃にあつた。貧民窟改良と云ふ改良主義的方針によつて都市觀察が行はれた。同樣に交通、土木、衞生、風俗、政治、教育、商業等の諸方面もそれぞれ、各自の立場のみから觀察され、從つて各自の都市觀察を持つてゐた。

然かるに都市社會學的研究の漸く興るや、是等の個別的現象は、無關聯な孤立現象と見るを許さなくなつた。全一體としての都市そのものゝ性質及び構成、變化、發展、推移等にいづれも有機的關係を持つたものであると解せらるゝに到つた。されば從來の、地理學者、生物學者、統計學者、土木技師、建築家、美術家、教育家、經濟學者、人類學者、宗教家等が各〻個別的に觀察してゐた一面的都市研究は綜合され統一的觀點に於いて考察せられて來る傾向となつたものである。個々の現象及び變化は他のものとの相關的關係に於いて始めて存在するものなる事を知つたのである。(註二)

（註一）N. Anderson: The Trend of Urban Sociology. Zimmerman: The Trend of Rural Sociology.

此の點に關しては貧民窟研究の發展がよく這般の事情を物語つてゐる。最初の貧民窟研究は體驗的感激に陶醉した所謂スラムミングの時代を經て、漸くかゝる特殊の現象及び問題も都市全體との相關的觀念に於いて理解しはじめる樣になつた。「貧民窟は孤立的現象ではない、之れを研究せんとするには、勞働能率、所得、人口動態、生活標準、人種、國籍等及び更に比較的資料、地價、近接地の豫定利用法等々の事柄をも考量しなければならぬ。……變化しつゝある都市に於いては貧民窟は一般に一地域の暫時的默許的占居であつて、其の土地の將來は、附近の土地が利用せらる可き用途によつて決定して來る。故に貧民窟問題とも云ふ可き諸問題は相互關係上の問題である」。貧民窟は幾多の、他の因子及び勢力との交涉に於いて成立する。都市にあつては、之れを容るゝ地域的機能的型式（Spacial and functinal pattern）が存在する、而して之れを作り繼續せしむる所の諸勢力は常に交錯してゐる。

現在都市社會學の研究部門を構成する所のものは次の諸點を中心とするものである（Anderson: The Trend of Urban Sociology）

（一）都市の諸地域と空間的型式
（二）都會地と其の後背地
（三）地理學、生態學
（四）人口と空間の關係
（五）人口の淘汰及び制限

（六）　移動性とメカニズム
（七）　都會的諸典型と諸集團
（八）　都市病理學
（九）　社會科學と社會統制

是等の中に於いて都市社會學の本源たるシカゴ大學中心の諸權威が主として重點を置くのは、第一の都會的地域と空間型式である、之れは同時に所謂ヒューマン・エコロジー、社會生態學（第三項）となり、同時に第四項の人口と空間の關係となり、又第五項の人口の淘汰となるのであつて、最も中心的な題目と云へよう。第七項目の都會的諸典型と諸集團も之れに相關聯せしめられる事が出來る。從つて都市社會學の重心は、都市の社會生態學（Urban Ecology）に存すると云つても過言ではない。同時に移動性の諸問題は、之れが直ちに都市社會及び其の生活殊にその社會的過程の特色となるを以つて、重要なる研究範圍である。殊に急激及び異質的な發展と變化とを受け、又は受けつゝある米國都市に於いては、當然百パーセントの學問的注視を要求するに値するものであらう。（註二）

（註二）　R. E. Park: The Urban Community as a Spacial Pattern and a Moral Order.

以上の諸項目は未完成時代にある現代都市社會學が大略統一し得可きものとして要求し得る素材的研究である。現在の狀態に於いては其の材料たる可きものが餘りに散漫であり其の結末たるや餘りに逸亂してゐて、之れを包括的に纏めるべくもない。故に都市社會學の風潮を展望せんとするものは、勢ひ、都市社會學の範圍内に入る可き事

分明なる是等の諸題目の幾許かを注意するに留まる（Anderson: The Trend of Urban Sociology）

併かし是等の内容の諸項目について檢討する以前にシカゴ學派の方法とは多少異つた行方をするソロキン・ヂンマァマン共著の『農村・都市社會學原論』の内容を一應視つてみよう。

本書に於いて都市の定義は所謂列擧主義によつてゐる、農村社會及び都市社會の基本的特徴を數箇條に亙つて掲げ、此の特徴に就いて極めて精密なる研究を下してゐるのが本書の骨子である。原著者が此の列擧主義的方法に出づる理由は、社會學に就いて彼等の有する見解に基くものである。即ち、社會學は、時間及び空間を通じての普遍化の科學ではあるが、特殊的社會諸科學の如く抽象的でなく極めて現實的なる學問である。經濟學に於ける「經濟人」宗教科學に於ける「宗教人」政治學に於ける「政治人」はいづれも現實の人間と實際とより離れた方法論的の抽象化的存在である。しかるに社會學の對象とする「社會人」は現實の人間でなければならぬ、故に此の現實の「社會人」には上記の諸種の「特殊人」が這り込んで來てゐるものである。

斯くの如き立場から一般社會學の特殊部門として農村又は都市社會を觀察すれば、當然農村及び都會に於ける「經濟上」「政治上」「宗教上」「教育上」の諸特徴がいづれも、其の間に都會的、田舍的の差別の有無多少に從つて列擧的に論ぜられて來る理である。此の故に次の諸項目が揭げられるのである。

（一）　職業的特徴
（二）　自然的非自然的環境の特質

（三）　共同體の大さ
（四）　人口の密度
（五）　構成人口の質の異同
（六）　社會的分化と階層
（七）　移動性
（八）　社會的接觸の組織（System of Interaction）

是等八項目に於けるそれぞれの特徴はいづれも相互に因果的に關係してゐる。作用、反作用の關係に立つものである。

此の構成に於いて特に目立つものは、シカゴ學派の如く、特にエコロジー又は都市の空間的型式等に就いて拘泥してゐない。是等の項目は普通人々が都鄙それぞれの特徴として略ゝ周知する事項である。唯彼等の企ては、都市又は農村社會に就いての一知半解な解釋又は見解の弊害を科學的檢討によつて除去せんとするを目的としてゐる。故に其の豐富なる典據材料に就いては、Source Book in Rural Sociology に其の大半を讓つたとは云へ、實に驚異すべきものである。從つて是等材料研究及び取扱ひに就いての科學的檢討以外に、其して其の結論としての所謂科學的なる農村及び都市觀の以外に、都市社會學そのものゝ構成に就いては重要な意義及び新奇なる貢獻ありとは思はれない。

原著者等の云ふ、空間的時間的普遍性と現實性とを具へたる社會學が、殊に都市社會學が成立したりや否やに就いては、敢て抗論する必要がない。都市對農村の比較に於いて對象となれる典型的都市は、現代の大都市そのものに注意が集中されてゐるからである。

四

玆に於いて、元に戻つて、再びシカゴ學派の都市社會學の檢討に轉じ、其の學說の重心を爲す「都市地域と空間的型式」「人口の自然的淘汰と集團」「社會的移動性」等に就いて考察してみよう。

"都市社會は一個の空間的型式であると共に又一個の精神的秩序でもある。(註一)　此の空間的型式とは全市民が各ゝ其の運命及び自己意識の命ずる所に從つて都市の內外に定居する事より生じた、其の形態的特徴より構成される。精神的秩序とは、斯くして出來た諸種の都市地域の內に行はれる主として心理學的特徴である。此の兩者が相結合して都市の形態的精神的組織が成立する。

（註一）　R. E. Park: The Urban Community as a Spacial Pattern and a Moral Order. (in "Urban Community")

都市の形態的組織から云へば市街地利用の方法によつて區別されて來る、商業用地、工場地帶、娛樂地域、住宅地域、公園、道路等々に分れる。是等の用途は現在に於ける都市生活の必要によつて規定されてゐるものであつて、かく在る以外にはなり得ない。玆に於いて分散的なり集中的なりに、市街地は是等の用途の爲めに占有される、而

して如何なる地點が如何なる用途に定められるゝやは地理的條件が第一に支配するが經濟的社會的原因も參加する。例へば商業地域は通常、都市の中心にある、之れは地理的に交通の最便宜の地點である、此の地域の地價の騰貴は工場や住宅の建設を許さぬ、卽ち經濟的原因によるものである。この附近に於いては往々にして貧民窟が見られる、卽ち中心附近の空地は、將來に於ける價値大なる用途を見込して現在は其の儘に放置され、其の結果、貧民窟の物理的條件を構成する、所謂 Investment area としての貧民窟がある、又は社會的にみて此の地域は一種の間隙組織である(Interstitial area)。或る地帶と他の地帶との相接する間隙に發生する組織であり、之れを充塡する細胞でもある。更に又、都市の周邊に於ける別莊風住宅地域と勞働者住宅地帶との間には地價、日用品配給等の經濟的原因に基く障壁があると共に社會的階級的對立がある。

かゝる用途による地域的分布は主として經濟、便宜、嗜好、傳統等によつて決定するものであつて、都市計畫上に於ける地帶制度は、此の間の動向に科學的研究を捧げるものである。併かし乍ら、是等の用途による地域分布には、いづれも或る運動、分離、集合の勢力が働いてゐる。外面的形態的に見て、一目にして其の特徴を發揮せしめる丈けに、排異求同の諸力が作用してゐる。是等の地域の有する形態的特色に就いて云へば、郊外に於ける別莊風の宏大なる高級住宅、幽邃なる大公園、都心に通ずる大規模な自動車路等々、工場町に於ける倭雜な勞働者住宅、狹隘醜穢なる街路、遊び場としての空地又は殺風景な小公園等々、巨大なる中心商業區と中間地域にある小商業區域及び中產階級的住宅の集合等々……。此の方面に於ける研究に就いては、シカゴ大學に於いて行はれたシカゴ市の形態學的研究を參照せられたい。(註二)

(註二)　E. W. Burgess: The Growth of the City: An Introduction to a Research Project (in "The City" edited by Park)

都市內部に於いて斯くの如くして地域的な形態的型式は、更に其の精神的特徴と密接な關係を示してゐる。元來かゝる典型的集合又は分離は市民の運命及び自己又は同類意識の決定に基くものである。故に異つた運命に在る者が從つて同類意識のない他の世界に入つて生活する事は出來得る限り避けられる。玆に於いて山の手、下町の對照は外見上より進んで、內部的心理的特徴の對照を構成して來る。換言すれば是等諸種の自然的地域は自然的集團の居住地に外ならない。貧民窟、勞働者街、貸家地域、別莊地帶、それぞれ各〻の慣習とジッテとを有し、各〻特殊の作用、反應を示す。此の形態的精神的特徴は吸引、同化、排斥等の作用によつて其の特質を保持繼續せしめて行く。而して形態的、精神的の兩特徴は相互に作用、反作用を行つてゐる。

此の形態的精神的特徴の連絡は更に色々な現象への理解となる。一つの都市に於いても此の地域の相違による生活標準及び慣習、行動態度の差異の甚しきものがある「都市の內部に殆ど子供の居ない地域がある、例へば下宿旅館地帶の如き。比較的子供多き地域としては貧民窟及び、新婚後市內のアパートメントより漸次移り來れる中產階級的郊外住宅地域の如き。若い未婚男女によつて殆ど占められゝ地域があり、國會以外の選擧には投票に赴かぬ人達の集つてゐる地帶があり、離婚率の比較的大なる地域があると共に同じ都市內の他の地域では離婚が殆ど無いと

云ふ狀態もある。ギャングの横行する、竝びに彼等の出入する體育及び政治倶樂部の多い地域、自殺率の大なる地域もあれば、未成年者飲酒の風習は統計的にみて或る地域に甚しくして他の地域にはほとんど無い」（パァク、前揭書）かくの如き例はいくらでもあげる事が出來よう、併かし、其の興味に引きづられて、些々たる末節の吻合を本質的因子の關聯と誤つてはならぬ。右に引用文を揭げたるが如きも此の警戒を暗示せんに外ならぬ。反之、イースト・ロンドンに於ける研究の如きは興味がある。此の東部地區は二百萬の勞働者人口を持ち其れ自體が一都會內の一都市である。之れは同民族或ひは異民族にしても同一階級の住民によつて構成されてゐる。

「本來の東部ロンドンの住民は溢出してしまつた……而して是等の新しい人口を加へて略〻總計二百萬の住民がある。ベルリン、ヴヰエンナ又はセント・ピータァスブルク又はフィラデルフィアの人口よりも大人口である。

この都市には教會や禮拜所は澤山ある、併かしアングリカン派ローマン派のいづれにもせよキャセドラルは一つもない。小學校は充分にある、併かし公立學校や中等學校は一つもない。高等教育の專門學校や大學校等もない。住民はみんな新聞を讀む、併かしケチな局部的なものを除いては東部ロンドンの新聞と云ふものはない。……街路で自動車などにはお眼にかゝれぬ、……大通りで淑女に逢ふ事もない。住民、商店、住宅、乘物、凡べて全部が勞働階級の、間違へ樣のない刻印をつけてゐる。

是等のうち最も奇妙なのは二百萬からの住民のある都市にホテルが一つもない事だ。當然、誰れの訪問者もない事を物語る理だ」（Walter Besant ; East London. Park : The City. 中の引用による）

故に右の記述によつても明かなる通り、唯に人口の夥多から凡べての法則や原理を引出して、全部を說明せしむる事は出來ない。その夥多なる人口はどんな人口であるかを知らねばならぬ。

都市が斯くの如く特殊なる形態的精神的型式の集合である事からして、所謂生態學研究への連絡がある。生態學は地表に於ける生物分布の研究であり、是等の群生態の研究である。都市內部に於ける是等の地域及びその內の群はいづれも各〻特定種の群生態である。此の群生態を地域に結びつけて研究するのが社會生態學である。此の方面の研究の權威マッケンジーの云ふ所によれば社會生態學とは「人間と人間の制度（インスティチューション）との可變的空間的關係の科學」である。人口の變化、技術の變化又は社會的組織の變化と共に人間の空間的關係も變化する。反對に空間的關係の變化は社會的習慣や組織を修正する。人間の社會は生活均衡を維持せんとする傾向があり、之れは占居者又はその種の移動或ひは他の侵入によつて攪亂されぬ限り平衡を持續せんとする傾向である。此の運動の勢力は集中、分離、侵入、繼承の諸作用である。

米國に於いて此の諸作用の實例として上げられるものは移民群の動向である。米國大都市內に於ける移住各國民の各〻が有する「植民地（コロニー）」は先づ是等移民が最初に落付く區域である、人種、國籍、國語、文化の點に於いて共通なる、又移民勞働者として社會的經濟的に共通なる一群が生活してゐる「チャイナ・タウン」「リットル・シシリー」、又は歷史的な猶太人の「ゲットー」の如き之れである。此の形成は、集中と分離の作用に基いてゐる。此の部落の中に於いて職業、智力、志望による分離作用が行はれ、明敏、慧智、向上的な分子は之れを去つて、第二の

移民群地帶卽ち比較的コスモポリタンな、各人種各國民の雜居する地域へと進出する。而して人種、國籍、國語、文化の紐帶が弱まるに連れて成功せる分子は此の第二の地域を出で、商賣又は職業上に於ける成功と共に、國語、人種的集團と關係のない領域へ出て、古い市民に混同してしまふ。故に職業の變化、其の成敗、經濟的社會的身分の變化は地域の變化に銘記される。卽ち社會の形態的群生態的な組織は職業的文化的組織に對應し、反映する。自然的集團を結著する淘汰、分離の作用は同時に都市の自然的地域を決定する(R. E. Park)。此の種の研究實例に就いては尙ほ Louis Wirth の "The Ghetto" を參照せられたい。

斯くの如く集合、分離、繼承、侵入等の作用を持つ群生態的社會構成は都市社會の特色である事には異議なからう、共同社會の大なる事、人口數の夥多なる事、職業的社會的分化差別の著しき事、而して是等を結合する交通の組織等は、此の群生態成立の根本條件である。都市は地域的型式に表現せられた諸種の文化的生態群の組成する社會である。

是等の群生態の發生、發展、移動、推移、消滅等は都市全體の動態に相俟つて生ずるものである、例へば貧民窟と稱する一群生態は、都市そのものゝ成立、發展、推移等の變化の中に織込まれて發生したものであり、此の意味に於いて全體を構成する是等の群生態は相互作用の過程中に在ると云へる。

所で以上の現象は凡べて運動過程として生ずる、玆に於いてか、都市社會研究は都市の人口と其の動態に注意を向けるのである。

「社會生態學は地理に對するよりも寧ろ空間と云ふ事に重きを置かんとする。社會に於いて吾々は唯に一緒に生活するのみでなく、同時に離れて生活してゐる。故に人間の諸關係は、其の正確さに於いて相違こそあれ、常に距離の觀念に於いて計る事が出來る。社會的構造が位置の觀念に於いて定義され得る限り、社會的變化は運動の名辭に於いて記述されて差支ない。社會はその局相の一つに於いて數學式によつて測り且つ記述し得られる性質を示す」(Park: The Urban Community as a Spacial Pattern and a Moral Order)

都市人口の增加は、それが市內の如何なる地點に生じたものであつても、同じ都市の凡べての他の部分に反映し感ぜしめられる。此の作用の程度は主として其の地方交通組織の性質によるものであつて、現在の交通機關及び組織の發展を以つてしては、都心と周邊との連絡が充分になり、中心商業區域に赴く人々の數益〻多く且つ頻繁なるを加へた。其の結果は高層建築、地價の騰貴を招來する。都心に於ける地價騰貴の影響は此處を中心に、全都市の各部分に及ぶ。中心地の膨脹が急激なる場合、此の中心地の外側に附屬する、投機的目的の地域の直徑が增加する、投機によつて將來を見込しての爲めに所有されてゐる所有財產は荒廢に委される、之れが貧民窟の物的條件となる。米國の都市に於いては此の區劃が外國勞働者移民の第一定居地となつて、特殊な世界を展開する。

故に都市膨脹は單に數の增加のみでなく、各個人が此の複雜な市內に自分の土地を定めんとする努力に伴つた、あらゆる變化と運動とが生ずる。新地方の發展、職業の增加、地價の向上等いづれも都市發展の過程中に含まれるものであつて、「いづれも個人が、彼の個人及び社會全體との關聯に於いて、行ふ其の位置の變化と云ふ言葉で以

つて計る事が出來る、例へば地價は人口の移動性と云ふ言葉で計り得る、最高の地價は、二十四時の經過中に最大・量の人々が通る地點に存在する。」

人口動靜に於ける增加市民の性質の如何も都市全體に重要な作用を及ぼす、此の增加が移民の來住による時は社會的變化が急激となり且つ深刻となる。地價の騰貴の急速率、建物、機械の代替、人口の運動、職業上の變化、富の增加、社會的位置の變轉等、いづれも急テンポを以つて行はれる。元來、變化が大且つ急なる場合には社會生活の整調が亂れて、所謂文化の遲滯を生じ不秩序が發生する。從來の傳統、常識、慣習の統制力が失はれ、之れを補ふ爲めに法律上の規定は倍增されるにも拘らず、統制の實は擧らない。法律施行の效力が空しきが故に、一層徹底的なる行動に對する要求が起り、暴徒、大衆運動が統制力を振ふ樣になる。故に斯くの如き現象も亦、人口動靜に關聯せしめられる。

都市の核心部商業區域を中心として、其の外方に諸種の地域、所謂群生態が發生し配置せられる事に就いては既に述べた。是等の諸地域は中心よりそれぞれ違つた距離に位し、人口の移動性に就いてはいづれも亦、異つた割合を示してゐる。故に各地域に於ける群生態の心理的精神的社會的特徵を示す關係より見ても、位置、地位及び移動性は社會現象を測量し記述し說明する指數として重要である。「移動性は社會的變化や分裂を測る、何となれば社會的變化は殆ど常に空間に於ける地位の附帶的變化を意味し、吾人の進步と稱するが如き、社會的變化と雖も、凡べて變化はいづれも何等かの社會的分裂を伴ふ」故に社會的混亂は都市生活上の變化に對應し、此の變化は移動性の名辭で表はされる。

「要するに吾人が社會的と觀念するところのものは凡べて空間なる名辭及び自然的一地域の限界內に於ける個人の位置の變化なる名辭に歸し、之れによつて敍述して差支ない。……かくしてあらゆる社會現象は測定が可能となり、社會學は或る人々が然かく努力してゐる所の如く統計學の一分科に實際なるかも知れない。」

併かし如何に人間の行動、社會現象が、空間、距離に於ける數に還元されても、物理科學に於いて有效なる基本論理の適用は不可能である。玆に於いて、かゝる研究はその步を心理學的方面に進めるのである。パァクは物的空間的距離を、心理學的に取扱つて社會的距離に相關せしめんとする。(Park: The Urban Community as a Spacial Pattern and a Moral Order)

「統計學が社會學に對して何等かの意義を有すると云ふ所以は、社會的關係が非常に頻々と、又全く不可避的に空間的關係に相關する爲めであり、空間的距離が殆ど常に社會的距離の指數であり、又はある樣に思はれる爲めである。而して最後に唯社會的心理的事實は空間的事實に還元し又は相關せられるの故を以つて是等の社會的心理的事實は兎に角測定が可能であると云ふ事は間違ない。」

五

以上大略ながらシカゴ學派の都市社會學の中樞を考察した。都市社會學が未だ完成の社會學でない事は既に述べ

た。たとへば都市社會學は農村社會學との對立にしても此の對立は方法論的な對立であるか、或ひは同一の方法を許容する、單なる量的相違に過ぎないか。量的對立としては人口數、面積、密度、乃至は移動性等がいづれも量的範疇である。反之、社會機構、文化等の點に於いては必ずしも量的對照と云へなくなる。例へば、都市が制度的契約的な社會であり、乃至は機械的社會であると云ふ點は農村社會との質的相違を思はせる。故に或ひは農村では Culture と云ひ、都市では Civilization と云ふ。前者は單一的、後者は複雜的、一つは神聖で他は世俗的と云ふ點で對照せしめる。科學的研究に於いて、若し兩者の相違が量の範疇內に於けるものであるならば一つの標準が妥當する。前述した樣に人口、地域、密度等に就いて之れが云へる。故にソロキンは『都市・農村社會學原理』を書いた。反之、兩者の相違が質的のものであるならば同じ標準では計る事が出來ない。若し農村社會が有機的（オルガニック）であるに對して、都市社會が機械的（メカニック）であるとすると同一の尺度で兩者の相違を對立せしめる事が出來ない。更に假りに法則又は理論を樹立する場合に、前者には生物學的法則乃至は理論が、後者には工學的物理學的法則乃至は理論が成立する。此の點なほ頗る問題的であらう。

兎に角都市社會學が一つの纏まりを目あてに進んでゐる事は認められる。併かし形式的又は形態的な觀方の外に大都市現象をよりよく理解する爲めには都市社會はどう云ふ社會的發展過程の內に成立したかを研究する事も亦、重大な點である。何故ならば都市はもう一層大きい共同社會の社會過程の所產であるから。數百萬の人口を持つた大都市、其の內部に於ける職業的人格的分化、之れが織り出す社會的運動的過程もある。併かし、此の分業、此の

人口、其の個性はどう云ふ社會的約束で出來たか、玆に於いては「都市」全體と云ふものを發展理論的に考察して來なければならぬ、此の方向に於ける社會學的研究が必要になつて來る。

此の方向よりする都市社會學は其の傾向が經濟學的になつて來る。都市に集る、あらゆる因子は悉く、資本主義經濟社會の機構の中に都市現象を把握して來る。都市に集る、あらゆる因子は悉く、資本主義經濟社會の約束と規定の下に條件づけられてゐるのである。例へば人口五百萬と號しても、地理學統計學に於ける樣に、單なる數五百萬と見る事は出來ない、此の五百萬は諸般の規定の下に率せられた異質的な種の合成する所のものである。イーストロンドンの二百萬は勞働者と云ふ種の二百萬であつた。從つてエコロジストが論ずる樣に人口の分布は此の社會的約束に基いての諸集群の分布となるのである。都市に於ける社會的諸現象を說明するには、此の社會的約束の本質を確かめるに如くはない。ゾムバルトが都市現象に就いての經濟的契機を重要視するのは當然である。(Handwörterbuch der Soziologie. Städtische Siedlung, Stadt.) 成程個人格は、パァクの主張するやうに、獨自な經驗の所有と意識の上に構成される。併かし如何なる獨自の經驗を所有し意識するかは、其の社會に於ける主として彼の經濟的社會的約束が定める。此の規定の內にあつて、彼の個人格の保持は他の者のそれと相俟ち、社會的身分を構成する、此の社會的身分は同類意識による共同意識の社會たると共に他に對しては社會的距離となる。パァクの主張は斯くして空間的距離もあはせて社會的距離に表明しようとするにある。此の所說は依然、形式社會學的なるを免れぬ。かゝる群生態構成の背後の勢力には及ばないのである。

第二節　都市社會學

之れに反して發展理論は、此の背後の勢力に及ぶのである。諸種の群生態、社會的身分の如何なる機緣に於いて生じたか、其の社會的約束を探るのである。此の約束を觀察して都市現象の本質を理解せんと企てるものである。社會的移動性は社會の過程理論の中に於いて凡べてを說明するものゝ如くであつた。併かし吾々は此の移動性の中にあつて二個のものを區別しなければならぬ、卽ち正規的移動と破調的移動である。前者は平衡を保つた社會の常態的運動であり、後者は均衡を破つた社會の均衡復歸的運動である。之れを例へて云ふならば、都會生活內に於ける、日常交通の流は正規的移動である。大都市の急激なる發展、新開地の開發、郊外地の急速なる發達等は破調的移動である。前者は都市そのものに對して何等著しき外形的精神的影響を及ぼさないが、後者は都市そのものゝ發展、推移に伴ふ現象であるが故に、極めて著しい作用を持つてゐる。移動性が社會的變化を物語り、社會的分裂を示すと云ふ命題中に於ける移動性とは此の第二の意義に於ける、卽ち破調的移動性の意味に解釋すべきである。上記の都市社會學の理論の中にあつては運動過程を重要視し乍ら、此の間の相違を識別しないのは遺憾である。

社會動態學を此の破調的移動に關しての社會の運動過程と解するならば、社會全體の構成に變化を及ぼさゞる移動、例へばサラリーマンの朝夕の通勤運動の如きを動態現象と云ふ事は出來ぬ。之れは恰も時計の振子運動であつて時計全體の構成上の變化を伴はぬから、活潑に動いてゐても、時計構成の分裂を來す事はない。水が動いてゐても、それは川の動態ではない。同樣に社會的移動性中に一項目として述べられてゐる所謂垂直的移動も水平的移動も共に上記の意味に於いての動態學ではない。階級上の昇降運動は都市社會に見られる現象である。工場勞働者がミリオネアにならうと、大學敎授がルンペンにならうと其れは個人の問題であつて、社會動態とは云へない、同樣に職業が代つても、住居地が變つても、それは個人の問題である。移民窟から出て、商業中心地區に動いても、富豪の別莊地域に移つても、之れはいづれも個人の問題ではない。從つてかゝる現象で都市の動態理論を悉し得るものではない。まして此の種の正規的移動によつて、社會的變化及び分裂は生じないのである。

故に何らかの移動が斯くの如きものとして現はれるには都市社會の空間的型式構成を破調せしむるに足りねばならぬ。之れは直ちに都市そのものゝ變化であり進展であり推移である。郊外より都市中心に向つての朝夕の定期流動が開始せられた事は、都市の發展を物語る變化であり、郊外地の新發展は其處に舊秩序の破壞修正を意味する。斯くの如くして都市そのものゝ變化に關係する限り、破調的移動性が發生し、此の變化が完了して、或る均衡を保つに至つて新しき正規的移動が成立する。此の意味に於いての現代都市——產業革命によつて生じた工業都市、資本主義社會機能の發展に基いて出來た大都市は、いづれも此の變化を受けて來たのである。移動性が、都市社會學の內部に於いて喧しく論ぜらるゝのは米國都市の短期間中に於ける急激なる發展と移民問題との特殊的事情によるものと云へよう。然らば尙更に移動性を以つて單なる都市の騷々しさに解す可きでなく、單なる移動と目すべきでなく、都市そのものゝ變化に關係せしめねばならぬ。

要するに、各歷史的時代によつて都市の典型は各〻異る、而して其の時代文化の保持される限り、其の時代の都

市は、有機的無機的組成に就いて或る典型を示す。此の典型に於いて都市を研究するのは靜態研究である。時代の推移に伴つて社會的情勢の變化は、此の典型の均衡を破る。玆に動態現象が生ずる。他の典型による均衡が求められる、新しき時代の都市が出來る。之れは再び次期のものへと推移して行く。古代都市と云ひ中世都市と云ひ、王朝都市と云ひ工業都市と云ひ現代大都市と云ひ、いづれも、此の都市諸典型中の一であつて特有の典型と均衡と現象とを有し、或ひは特有な法則を持つてゐるのである。

勿論、正規的移動が市民の精神、感情及び肉體に及ぼす影響は否定する事が出來ない。其の結果、此の移動の性質によつて特定な市民型が出來る、此の型は農村社會又は他の時代の都市社會では見られぬ型であらう。併かし、市民が此の移動過程に入る事は無臭無色の純然たる單位個としてなくして、社會的約束による特定の構成單位として入るのである。故に此の約束によつて定められ生じた所の移動が彼に影響して人格及び典型を構成すると共に、社會的約束も亦、彼の精神、感情、志望等を決定し、彼の社會的環境的反應を決定する。

移動性を精神的方面に於ける傳達と解する場合もある。此の意味の移動性も市民が概念化した思惟體系を有する都市に於いて著しいのは當然である。從つて市民の心理は豐富なる感受性を有する。珍奇斬新を求める、流行の目まぐるしき變轉を可能ならしめる。此の場合に於いても、之れは都市の正規的過程であつて、都市そのものゝ變化には交渉がない。現代都市の特色としての流行問題は、流行そのものに都市社會特有な社會的意義があり、從つて流行を追求する者と流行に供給する者との或る量が存在してゐればいゝのであつて、問題は此の意義・存在の有無如何の場合にのみ生ずる。流行の尖端を行く者が誰であつても差支ない。併かし流行の無い社會は現代の大都市とは質的に異つた別の社會なのだ。要するに精神的移動性は個人に變化、不安定、動搖の所感を與へる。個人は目まぐるしく流轉するであらう。併かし之れが都市社會の均衡を破り社會生活の秩序に混亂を與へるには他の原因が無ければならぬ。動機が存在しなければならぬ。運動の敏活なるもの、直ちに不安定ではない、寧ろ敏活なる運動は安定の條件とも云へる。然かるに運動體自體に於いての懷疑が存在する場合、敏活なる運動は始めて夥しき混亂を招く。旺盛なる企業精神を持つた實業家の活動は混亂的でない、株式取引所に於ける運動變化も混亂ではない、之れに反して希望と力を失へる者の生活は不安定なる焦燥的なものとなり、狂騷的となる。之れは單なる知的精神的移動性の緩急の問題でなくして、根本生活の基礎、所謂社會的約束に就いての動搖の有無によるものである。故に都市そのものゝ時代相に併せて、其の變遷を見なければならぬ。米國都市の流動的混亂が生み出した動搖が我國に傳つて來る事は何を意味するか。

我國の都市に於いて混亂として現はれるものは一方に舊來文化の壞滅であり、他方に社會的情勢に最も敏感な都市知識階級の社會的運命に於ける危惧に基くものである。この兩者は共に、平衡ある都市、卽ち靜態的典型內に於ける現象でなくして、均衡を破り、又は破らんとする都市動態の現象である。都市そのものに於ける變化の現象である。

故に都市社會の研究は、形式社會學的な市民の行動、心理等に於ける運動過程の研究もさる事ながら、更に進ん

で都市そのものゝ、全體的社會内に於ける成立の約束、其の變遷に就いて知らねばならぬ。發展理論的社會學の取扱ふ問題は之れである。之れによつて、現代の都市の構成分子の本質と傾向とを明かにするを得、此の本質と傾向とが大都市に於いて如何なる空間的型式となつて現はれるやを知り、更に最後に、構成分子の社會的運命の如何に變遷するやによつて、現代都市の諸現象を最もよく理解出來ると信ずるのである。

第三節　米國都市と都市社會學

一

近來米國社會學界の一部に有力となつた都市社會學が未だ未完成の學問であると云ふ事も其の關係者の自認してゐる所である。(註一)同時に部分的研究の以外に著々總括的著作も現はれつゝある——勿論未完成の現狀に於いて是等の著作が必ずしも悉く體系的であるとは云ひ難いが。(註二)此の都市社會學の方面に於いてはシカゴ大學の社會學者に負ふ所頗る大である事も認められる。シカゴ大學刊行書殊に社會學叢書及び關係書中に斯學の研究者は多大の便宜を與へられる研究を見出すであらう。(註三)

(註一) Trends in American Sociology: The Trend of Urban Sociology, by N. Anderson, 1929.

(註二) S. E. W. Bedford: Readings in Urban Sociology, 1927. Anderson & Lindeman: Urban Sociology, 1928. Sorokin & Zimmerman: Principles of Rural-Urban Sociology, 1929. N. Carpenter: Sociology of the City Life, 1931. M. R. Davie: Problems of the City Life—a Study in Urban Sociology, 1932.

(註三) 十三の書目をあげれば次の如し。

H. Zorbaugh: The Gold Coast and the Slum. L. Wirth: The Ghetto. R. S. Cavan: Suicide. E. R. Mowrer, Family Disorganization. F. M. Thrasher: The Gang. N. Anderson: The Hobo: The Sociology of the Homeless Man. R. E. Park and others: The City. E. W. Burges (ed.): The Urban Community. F. M. Thrasher: Map of Chicago's Gangland. The Social Base Map of Chicago. R. E. L. Faris and H. W. Dunham: Mental Disorders in Urban Areas. (An Ecological Study of Schizophrenia and other Psychoses) 1938.

併かし米國流の都市社會學の體系に就いて非難が無いでもない、此處で一例を擧ぐれば都市研究に就いては古くから一家を爲してゐるゾムバルトの批評である。彼に云はしむれば米國流の都市社會學は毫も社會學の態をなしてゐないのである。

「それは統計的集團の記述、卽ち今日の用語法によつて「都市」と名づけられた大聚落の居住者の記述、換言すれば此の集團に就いて觀察せしめられる最も複雜な種類の標識の並列に過ぎない、卽ちロバァト・イ・パァクの「都會環境内に於ける人間行動の研究」の如き、之れによつて與へられるものありとすれば其れは科學的研究の資材であらう。併かし役に立つ資材が提供されるのは、之れが一つの理論的に非議のない、卽ち效果的なる觀察の下に蒐

集せられた時にのみ限るものであるからして、亞米利加流の都市・農村「社會學」の精勵なる研究が社會的關係に對して非常に多くの啓示を與へるかどうか、余の疑問とする所である。誰かゞ「田舍に」或ひは「都會に」住んでゐると云ふ事は、彼の生存に係る他の自然的社會的條件、即ち經濟的國家的宗教的その他の羈絆、生物學的氣象學的その他の所與に對して比較されゝば遙かに其の重要性の無い因子に下げられてしまふ。一定の聚落形態の劃內に於ける種々の文化領域を注意するよりも、種々なる文化領域に於ける聚落形態に留意する方が一層合目的と思はれる。都市を或る事物的に定限された意義の關聯の劃內に於いて、例へば經濟的乃至は國家的文化領域の劃內に於いて考察する時にのみ、效果的な都市史と共に效果的な都市理論が作り上げられる。(註四)」

(註四) W. Sombart: Städtische Siedlung, Stadt (Handwörterbuch der Soziologie) 1931.

以上はゾムバルトの名著『モデルネ・カピタリズムス』以來の彼の態度である。彼の此の批評が果して「社會學論」的に當つてゐるか否かは、此處で問題にする性質のものでない。併かし彼が米國都市社會學の研究方法を以つて「效果的」でないと云つた所に多少の贊意を表する事が出來る。著者は違つた意味で米國都市社會學の「非效果的」なる事を前節に指摘した。併かし其れは別問題としてゾムバルトが米國都市社會學の研究者として指してゐた人々は文中にあるパァクは勿論之れに共働する人々並びに、アンダァスン、リンドマン、更にソロキン、ヂムマァマン等を含んでゐる樣に思はれる。「標識の竝列」に過ぎないとはソロキン・ヂムマァマン共著の『都市・農村社會學原理』に對する批評として誠に正鵠を得てゐる。

併かし上記の米國社會學者の功績は決してゾムバルト流に一概に貶さる可き性質のものでない、殊に米國都市の姿態を描き出し、其の內にひそむ社會的勢力を檢討する所に於いて吾々は多大の援助を受けてゐる。だが再び此の功績は米國都市「社會學」の學問的體系に與へられるよりも寧ろ、その對象たる米國都市そのものゝ情況の理論的觀察に就いて生じたものと云ひたい。玆で「米國都市社會學の特殊性」を論ずるのは此の意味に於いてゞある。

二

米國都市社會學者の都市理論を吾々が我國に就いて妥當せしめんとする時、その適用について多少の困難を感ずる。之れは單に東洋と西洋との歷史的文化的差異にのみよるものでなく、寧ろ米國の事情の特殊性より生ずるものと解してよからう。此の米國都市事情の特殊性が都市理論に反映してゐる事は當然で、此の爲めに米國都市社會學に特殊性を帶ばしめたものと云へる。然らば何が其の理論的特殊性であるか。其の第一は非傳統的なる點であり、從つて第二に著しき可變性運動性であり、第三に雜異性の理論的特殊性であるか。其の第一は非傳統的なる點であり、亞米利加は所謂「中世の無い國」である。從つてかゝる國が比較的短年月の間に今日の發展を遂げ得た裏面には、著しき變化があり「動き」がなければならなかつた。更に此の發展が亞米利加自身に孵化した分子によつて擔はれずに、所謂開拓者により外國移民によつて擔はれたと云ふ事は、第三の雜異性を示す原因である。以下此の三點に就いて米國都市社會學者の都市理論及び米國都市事情の双方に亙つて調べてみよう。

何時から亞米利加の都市史は始まるか、紐育市に就いて云へば一六二六年人口二〇〇人、一六五六年——一〇〇〇人、一七六〇年——一四、〇〇〇人、併かし其の頃にはフィラデルフィア（同年の人口一八、七五六人）ボストン（同年一五、六三一人）が人口數上に於いては遙かに紐育を凌いでゐた。併かし、此の數字を以つて見れば、今日の「都市」とは比較にならぬとしても十八世紀の中頃には植民都市の形體が先づ東部海岸地方にそなへられて來たと云つて差支ない。唯、之れは全く未開の土地に於ける創造であるに新しい故に古い歷史の都市に對しては斷然對照的になつてゐる。伯林の比較的新しさ、都市としての威容に於ける新しさは其の歷史の若さを物語る。古い傳統に支配され歷史に拘束される事なきが故に新しき都市は其の形體に自由と新規とを持つ。スモールの言葉を藉りれば「中部の都市は東部の都市が到達した段階から發足する」（註二）其れと同じく、新大陸の都市は舊大陸の都市が到達した段階から、然かも傳統に支配されずに、自由に發展する。此の結果、十八世紀中葉以降略ゝ二百年間に發展した社會及び時代の特色が最も典型的にかゝる新都市に表現される事となる。若し吾々が好んで「資本主義的」と云ふ言葉を用ふるならば「資本主義時代」の時代色社會相は最も明瞭に最も典型的にかゝる新社會の都市に表現される事となる。米國の都市に就いて此の事は全然適合すべきものではなからうか。傳統豐かなる國に於ける都市の形體が、或る場合に於いては新舊不調和になり、他の場合に於いては新形體が舊形式に拘束され、例へば舊來よりの歷史的建造物に對する美觀保護を目的とした建築制限の如き、又別の場合に於いては舊形式が新形體の猛烈なる侵略を蒙つて無殘なる最後を露はし懷古趣味者をして悲嘆せしむるが如き例に乏しくない。之れに反して米國の都市は、成程、封建的傳統的趣味性に乏しきにせよ、近代色の明朗なる形體を完全に一體として表現してゐるではないか。斯くの如くして歷史的に異時代の風物の介入を許さゞる米國の都市は、最も近代的なる思想の表現となり、此の實現に於いて最もティピカルなものとなつた。

（註一）A. W. Small & Vincent: An Introduction to the Study of Society.—Natural History of a Society, 1894.

以上の事情が、如何なる點に於いて、都市理論に含まれたか、初期の米國都市計畫が幾何學的で有機的でなかつた事は、各都市の地圖を見ても一目瞭然である。幾何學的計畫は合理主義のものとして、確かに歷史や傳統を無視してゐる。又は歷史の無い所、傳統を尙ばぬ精神の下にでなくては成立しない。同時に此の幾何學的な合理主義的傾向は、個人主義の思想を表明してゐる。初期の開拓者時代は兎に角、東部諸都市が漸く都市の體裁をとゝのへるに至り惹いては現代の大都市へと發展して來る頃には、最早社會的全體的觀念は全く失はれてしまつた。傳統にも歷史にも民族的にも特殊の羈絆を有せざる、全くの意味に於いての經濟人的關心が有力に支配した。斯くの如くして人間の思想に於けるが如く、都市の形態も、建築の態樣も有機的中心なき無統制なる個人主義を如實に示してゐた。近くシヴィック・センタァが論ぜられ、コムミュニティー・オーガニゼイションが唱導せられるのは、全く此の從來の傾向に對する自己批判に出でたものであり、有力なる其の修正でゝもある。

都市生態學研究は米國都市と都市社會學の有力なる理論的一方面である。併かし、此の場合に於いても其の研究者の考

へてゐる様な超時代的に此の理論が適用せらるゝ範圍は兎に角として、現代に就いて新しき都市と古き都市との間には、其の理論の實際的證明が、少くとも程度に於いての相違を示さずには置かない、換言すれば典型的なる性質に於いて、新しき都市がその代表たり、修正的なる點に於いての實例を古い都市が提出する。バァジスがシカゴ市に就いて試みたる「都市膨脹」の圖表的解剖は、細密に亙つては、どの都市にも當て嵌るとは云へない。(註二)例へばビジネス・センタァに密着する所謂「推移的地域」の形成に就いても、例へばシカゴ市に於けるが如き典型は東京なぞの場合それ程はつきり現はれてゐるとも思はれない。(註三)文明事情の異つた我國又は東洋の都市に其の儘應用する事の困難なるは勿論、歐洲舊大陸の古い都市にも之れを適用し得るや否や疑問である。此の場合に於いては都市構成の主要なる因子が何であるかによつて著しい差異を生ずるであらう。此の點に就いても米國の都市は商、工業の相違こそあれ、大體に於いてその全部が經濟的都市たるに例外なきに對して、政治的宗教的勢力を基として成立した都市にあつては、其の後の發展が主として經濟的關係のものなるにせよ、古い勢力の殘骸がなほ殘される必然性がある。東京市に就いては江戸時代の武家的要件が相當に强く後世迄影響を殘してゐると考へられないであらうか。

(註二) E. W. Burgess: The Growth of the City, An Introduction to a Research Project. (The City, edited by Park, 1925.)

(註三) H. W. Zorbaugh: The Gold Coast and the Slum. N. Carpenter: Sociology of City Life.

表シカゴ市人口增加

年次	人口
1533	200*
1835	3,300
1837	4,170**
1840	4,479
1850	28,000
1860	109,000
1870	299,000
1880	503,000
1890	1,100,000
1900	1,698,000
1910	2,185,000
1920	2,701,000
1930	3,376,000

* 推計人口。
** 第一回市勢調査 1831 Cook County の成立と共に裁判所々在地となり 1833年 Town と 1837年 City となる。

併かし何と云つても、米國都市理論の最大特色は、その運動理論にある。之れは、生態學理論の内に占居、移動、侵入、繼承等の運動現象を主として取扱つてゐる事は明かであるが、此の運動及び變化の理論の對象となるものは、米國都市の急激なる發展そのものである。先づ米國都市の急激なる發展について見よう。

東部の都市が十八世紀中葉、一、二萬の人口を有する植民都市を形成した事は前に述べた。最も急激なる發展を最もよく示すものは、中部、西部の都市ではなからうか。試みにシカゴを例にとつてみると其の人口發展は右の如くである。

之れを東京或は江戸に比較すると東京市政調査會編の『日本都市年鑑』に現はされた明治二十二年（一八八九年）以降の數字の趨勢に就いては一、三七五、九三七人より現在の六百萬人に達した點に於いてシカゴ市の增加率を特に

云ふ可きものもないけれど一八七八年（明治十一年）八一三、四三〇の東京に對して一八八〇年のシカゴは五〇三、〇〇〇を示し此の相違が時間を遡ると共に顯著となる事は注意していゝ。殊に東京が外國の大都市と異り「人口集中と云ふ方面から見て頗る注意すべき特殊の點をもつて」ゐるが、「それは東京の前身たる江戸が既に一度遙かに明治初年の東京を凌駕する人口を有した」。今井登志喜教授は「盛時の江戸の人口が百萬を超してゐた」と見る事は如何に内輪に見積つても、確かであるとされてゐる。[註一] 故に既に說明した第一の歷史の新しき事と相俟つて米國都市の急激な發展は、確かに動きの面白さを示した。換言すれば最も近代的な米國の都市は資本主義の驚く可き發展と共に動きつゞけてゐた、と云ふ事が出來る。其處には或る停滯靜止の狀態が無かつたと云へる、之れは現代都市の一般的特色ではあるが、かつて靜止の狀態を持つてゐた都市と全然之れを缺いてゐる都市との間には依然、新舊の差が多少なりとも示されて居る。シカゴ市に就いて或る佛蘭西人の下した批評こそはよく此の米國的特色を示してゐる。「シカゴ市！　之れに就いてのあらゆる統計はそれが諸君の手に屆く頃にはもう時代遲れになつてゐる。シカゴ市に關しては、あらゆる計算が改めてやりなほされねばならぬ、と云ふのは諸君が完了する以前に數字が常に變化してしまふから」。(George Duhamel: America, the Menace. 1931. Boston)

故に「アメリカ特にシカゴ學派の社會學に於ける社會生態學は、社會の基體的現象としての人口の分布乃至社會の占むる地域の廣袤を、動的、過程的見地から研究せんとするフランスのデュルケム學派の社會形態學と多くの點で一致する」と云はれる。[註二] 或は曰く「吾人が社會的と觀念する所のものは凡べて空間なる名辭及び自然的一地域の限界内に於ける個人の位置の變化になる名辭に歸し、之れによつて敍述して差支ない」。[註三] と。社會現象を測量し記述し說明する指數として位置・地位及び移動性が重要である。が、殊に此の移動性が重要視せられるのである。米國の犯罪社會學が此の方面に於いて犯罪及び其の他のディスオーダアを社會病理學的現象として觀察してゐる事は周知である。[註四] 而して此の病理學的な現象は個體又は制度の其の環境に對する順應力の不適合から生ずるものであるが故に急激なる發展及び變化を伴ひ歷史及び傳統による規制のない社會に於いては勢ひかゝる現象の盛んなるを招來せしめる。

（註一）『社會經濟史學』第二卷第七號、江戸の社會史的一考察、同教授は西歐諸都市の產業革命以前の人口數も其處で掲げられてゐる、就いて參照せられたし。

（註二）米林富男氏「アメリカの都市社會學」雜誌『社會學』第一號

（註三）Park: The Urban Community as a Spacial Pattern and a Moral Order.

（註四）N. Anderson: Trend of Urban Sociology.—The Social Pathology of the City.

急激なる發展と變化とを蒙る點に於いては米國都市のみならず、他の國々の舊都市に於いても甚しいものがある。換言すれば發展と變化の急激性及び徹底性は近代都市の一般特徵だとも云へる。逆に云へば、傳統ある都市に於いては殊に此の變化に非常な注意が拂はれるかも知れない。何となれば此の發展と其れに伴ふ變化とは、過去の風物に對して往々焦劇なる衝突となつて現はれるから。此の意味に於いて我國に於ける明治初年の歐化時代、現代のア

メリカ化の時代は正しく這般の事情を物語つてゐる。要するにモビリティーの研究は現代都市に對して看逃す可からざる本質を衝くと共に、最もよくアメリカ的の現象として取扱はるべきものでもあつた。

四

米國都市社會學の第三の特徴は、移民問題に關する其の考察である。移民が米國の全體的問題であるは云ふを俟たぬが、此の點は都市社會學に於いても現はれて來る。前に述べたスモールが其の著の『一社會の發展史』の內に、一村落の人口構成中に人種的民族的雜異を認めてゐるが、之れはアメリカ的特色である。元來ソロキン等の云ふ如く農村は同質的性質の構成になるものであつて之れが都會の雜異性に對する特色になつてゐる。(註一)新開の植民地的村落以外に於いては雜異性は殆ど無いと云つて差支ない、殊に農村勞働が解放され、或ひは農村衰微の事情にあつては、農村に雜異分子の入り込む餘地はない。併かし既に農村自體にかゝる人種的雜異性を示す米國に於いて、都市が最も其の甚しきを示すのは當然である。試みに一九二〇年（手元に新しい材料がないので甚だ不本意であるが）に於けるシカゴ市人口の移民的構成を見ると人口二、七〇一、七〇五の中

外國生れ移民	八〇五、四八三	黑　人　一〇九、五九四
先代移民の子	八八八、四九六	アメリカ印度人　九四
混成兩親の子	二五二、三二〇	支　那　人　二、三五三

土着兩親の土着白人　二三三

所謂土着兩親による土着白人數が全人口の二三・八%にしか及んでゐない。新來の移民が同じく二九・八%即ち約三割の數を示してゐる。米國全體を見ると外國生れの白人の增加率は勿論減少を示してゐる。即ち上の表の如くである。(註二)移民法其の他の制限を受け又、大體に於いて移民增加の趨勢に停止的狀態が來たとしても、土着白人の增加率には之れによる變化は起つてゐない。併かし此の方面の事實とアメリカニゼイションの問題は併せて考ふ可きものであり、アメリカ公民化運動には此の移民勢力も看過してはならぬ。(註三)紐育に就いても市部の人口密度の最も大なるアッパァ・イーストサイド、ローァ・イーストサイドの住民數に於いて外國移民が高率を占めてゐる。

年次	土着	外國生れ
1860	61.8	82.8
1870	23.1	34.1
1880	31.1	19.4
1890	14.5	39.1
1900	23.1	12.0
1910	20.8	30.7
1920	18.6	2.8
1930	17.7	2.5

（註一）Sorokin & Zimmerman: Principles of Rural-Urban Sociology.
（註二）The New Statesman's Yearbook, 1932.
（註三）A. E. Wood: Community Problems, Part V. Americanization, 1928.

然からば都市社會學では如何なる方面に之れが現はれるか。ギャングの外國種的傾向に就いては別に云ふ可き事は無い。(註四)又猶太人に就いても興味ある研究がある。(註五)併かしこゝでは主として貧民窟の問題に限る。米國都市の貧民

窟は主として移民的關係に依る所、頗る大である、試みにシカゴ貧民窟の情況を眺めると(註六)、かつて愛蘭人瑞典人を中心として Kilgubbin, Swede Town とよばれた土地は一九一〇年頃にはリットル・シシリーと呼ばれ、二十年代には初代及び二代目の伊太利人一五、〇〇〇人を有してゐる。一九一〇年國勢調査によれば此の區域（第二十二區）には六五、二三一の人口中、一八、六三九（伊太利）一四、七〇九（獨逸）の外國人がある。上記一五、〇〇〇の伊太利人の集中的分布を此の區域中心部の六個ブロックの研究にみると次表の如き勢力が出て來る。要するに是等區域（第二十一及び第二十二區）に於ける外國分子は第二十一區に於いては米國人三七・八五、獨逸人一一・一五、愛蘭人六・八八、伊太利人六・二〇、瑞典人六・九八、第二十二區に於いては米國人一一・九八、墺太利人七・四二、獨逸人一八・九五、匈牙利人一七・〇〇、伊太利人二五・七〇の百分率（一九二〇年國勢調査）を示してゐる。こゝに米國都市貧民窟の特殊性が示されて來る。

米國人	——	43
獨逸人（有色人）	——	100
愛蘭人	——	54
伊太利亞人（シシリー人）	——	5
波蘭人	——	40
瑞典人	——	2,300
瑞西人	——	10
露西亞人	——	95
（猶太人）	——	90
	——	4
	——	5

かゝる性質のものとしての貧民窟現象は少くとも我國にはあまり顯著には求められない。

（註四）H. Asbury: The Gang of New York, 1929. によつて興味ある記録を參照せられたし。

（註五）L. Wirth: The Ghetto, 1928. Jokol Lestschinsky: Die Umsiedlung und Umschichtung des jüdischen Volkes im Laufe des letzten Jahrhunderts. (Weltwirtschaftliches Archiv, 30 Bd. 1929. II.)

（註六）Zorbaugh: The Gold Coast and the Slum.

玆に於いて貧民窟の機能に變化が生じて來る。卽ち米國の都市にあつては貧民窟は外國移民の第一居住地としての機能を持つてゐる。此の地域は商業中心地、鐵道殊に貨物線の輻輳する所、工場地帶に近隣する地帶であり、勞働を求める外國移民にとつて好適なる居住地である。故に是等の地域は屢〻推移的地域と稱せられるが、其の地域が用途的にみて發展上の推移期に在る許りでなく、其處に抱擁される住民も亦、推移的である事を必要とする。卽ち前記のシカゴ市研究に於いて示される樣に、此の貧民窟住民としての性質上、必ずしも此の地域に永住的のものでない、又貸部屋地帶（ルーミング・ハウス・ディストリクト）と稱せらるゝ所が之れに隣接してゐるが、之れ又最も流動的過程の甚しき社會で其の居住移動は數週間の繼續的滯在を以つて最も永きものとする狀態にあり、短期なるものは一日以上に及ばぬとされてゐる。移民は其の職業上多少の安定を得るや、第二の居住地に轉じて行く。此の地域が推移的過程に於いて取殘さるゝ限り、其の空虛は依然、次の移民又は移住者の棲家となる、或ひは逆に、新來のより貧窮なる移民の爲めに從來の人人は此の地域から驅逐されて行く。

かゝる貧民窟現象は主として移民的關係の多い米國に於いて最も顯著たり又典型的となるものであつて、之れは我國の都市の如きに其のまゝ見出す事は聊か困難である。勿論東京市なぞに於いても地方上京者の落著く場所は比較的に一定してゐるかも知れないが（例へば城東乃至は下町方面）、之れは直ちに貧民窟とはなつて來ないし、又東京の貧民窟はさう云ふ外來者を受け入れる場所とはなつてゐない樣である。勿論建物の性質なぞも考慮に入れる可き

ものであらうが、兎に角米國貧民窟には特殊な關係が典型的となつてゐる事、明白である。

五

以上の諸點は先づ米國都市の特殊事情とみて差支ない。勿論、是等三者は相互に關聯してをり、乃至は同一の淵源に係る雜多な現象であるとも云へる。斯くの如き事情にあれば、米國都市社會學が此の特殊的事情に制約される事も極めて當然であり、從つて其の都市理論が他の國々の、米國と事情を異にした國々の都市に正鵠なる適合を見ないのも當然である。併かし、之れあるが故に、米國都市社會學の理論が全然駄目だと云ふのではない。

既に述べた樣に、米國の都市は古い歷史を缺き、從つて資本主義時代の純粹な典型的なものとして現はれてくる。所が他の國々に於いては歷史的傳統的勢力による障害の爲めに特有なる現象の表現が阻止される。併かし、世界全體が資本主義的社會の軌道に乘つてゐる限り、米國的都市現象は到る處に現はれざるを得なくなつて來る。又バァジスの說明する樣な都市發展の形態的法則も、決して無意味ではない。ビジネス・センタァを中心に同心圓的な發達を遂げて行き、其の各地帶に如何なる市民が居住するか、と云ふ點に就いての說明は、新舊の都市に就いて、多少の修正を以つて充分利用し得る。殊に現代の大都市にあつては我國の如き文明事情を異にしたものに就いても著著、此の法則の適合すべき部分が多くなつて來る傾がある。此の傾向は、必然的に我國都市殊に大都市の資本主義文化中に於ける發展形態に附隨してゐる。風俗に於いて趣味娛樂に於いて建築・交通・生產に於いて、その他制度

組織或ひは思想、感覺等に至る萬端に亙つて資本主義的な傾向は、アメリカニズムの風潮に現はれてゐる。之れに對する善惡可否の判斷にも拘らず、之れは日常に吾人の目擊する事實である。かくして鄕土色は漸次失はれて行く。東京の眞中を撮した寫眞が外國の何處かの樣に思へても不思議はなく、國粹的な傳統と共に地方色すら失はれて行く。之れは一般の大勢である。

故に米國都市社會學の都市理論は、成程ゾムバルトの云ふ樣に、都市社會學の學的體系に寄與する所なく、且つ又吾々の考へてゐる樣にその心理學的な或ひは形式主義的な說明は、現代の都市事情を最も根本的に解說し得る最便法ではないかも知れないが、米國都市社會學者の勞作に吾々が多大の共鳴を見出す事は否定し難い。米國都市の特殊事情、從つて其の都市理論は、特殊的ではあるが之れが資本主義時代の典型的なものとして特殊的である丈に、資本主義化して行く國々の都市に對して、無關係な理論とは思はれない。是等の國々にありては、米國的な現象が何程、徹底するか、或ひは過去の勢力、現在の障害に逢つて何程修正されるかを研究する必要がある、換言すれば米國都市社會學の理論の妥當性に就いて、例へば我國都市の實際に徵して考察してみる必要がある。もう一度言葉をかへて云へば、米國都市社會學の特殊性を見出す努力は、この方法に於いてのみ確實なる基礎を得るのである。故に米國都市社會學の近來我國に紹介せらるゝ事漸く多きに到りたるは最も慶すべき事である。併かし米國都市理論が資本主義的特殊性を有する事に注意する者は、又此の都市理論が形式的過ぎる事に思ひ及んで、更に都市社會學より其の一步を拔んず可きである。米國都市社會學は、純資本主義的都市を取扱ひ乍ら、其の取扱ひが表面

と形式とに終始してゐる恨がある。一歩を深くつき進むものは、此の都市現象が資本主義體制内の存在である事に氣がつく、從つて資本主義的機構の分析に於いてのみ、最もよき現代都市理論を得る事が出來る。ゾムバルトが、主として經濟的體制に於ける究明に基く都市理論がより合目的であると云つたのは至言である。

第四節　人口學と社會生態學

一

人口學的考察は都市構成に關する研究中最も古く且つ重要なものであつた。都市の形體中殊に其の大さは常に人口の多寡を以つて測定された。大都市現象は主として、人口の都市集中として觀られた、從つて都市の人口動態が注意された。併かし人口學的には、人口は單なる數として現はれて來る。統計上に現はれる何十萬人、何千何百人等の數字を構成する人口計算に於ける單位は、要するに單純平等、無臭無味の人間一匹である。唯、人口統計は之れに性別年齡別等の區別を與へる。更に人口動態、卽ち人口の增減、移動及び其等の原因、出生、死亡、その比率、出入移民等の關係又は比率等、更に死亡原因に關する統計等を揭げる。

是等の調査と研究とは、都市研究上に於いて資する所が少くなかつた、否、現在に於いても、後段に述べられるであらう樣に、都市現象に關して從來行はれた種々の所謂法則又は學說の有效性を吟味するに役立つてゐる事は疑ふ可くもない。併かし純然たる人口學的研究の貢獻も、或る限られたる範圍以上に出る事は出來ない。既に其の統計的調査に當つては政治上なり經濟上なり又は社會上の諸前提に依る所極めて大なのである。純粹數理的な考究を別にしては、人口學は常に經濟學、社會學、政治學、地理學なぞと相據つてのみ其の效果を上げてゐる。

玆に於いてか、都市現象を理解する便宜上、此の人口學的統計的方法がどれ丈け役立ち得るかの問題が生じて來る。著者は此の方法の有する大なる效果を疑ふものではないが、現在の都市研究にあつては、此の方法は次序的の性質のものではないかと思ふ。次序的と云ふのは、都市現象に關する、他の方法によつて定められた學說又は定理の有效性を是正するか、或ひは、此の人口學的統計的に得られた結論に對しては、他の方法によつて求めらる可き解說がなくしては、換言すれば此の方法獨自では左まで重要な意義を持ち得ないと云ふ事を意味する。

多數の人間が比較的に狹い地域に群居して生活してゐる。之れを人口學的に取扱ひ、之れを統計的に效果あらしめる。既に「地域」に於いては、政治的、經濟的、社會的前提の示す決定に基いてゐる。而して其の研究の結果所謂人口統計が成立した。此の際、例へば數百萬人の巨大な人口集團が數字的に表示された。性別、年齡別による關係が比率的に調査された、人口動態の關係が闡明された。成程、之れによつて、數個の結論が引き出される。曰く「數百萬の集中的人口集團は、何處にでも在ると云ふ存在ではない、世界的に極めて僅かな存在である」と。曰く「性別人口中男性人口に對する女性人口の比率は都市に於いて大である」と。曰く「都市人口の增加は市民の自然的增加よりも外部よりの移住的增加によるものである」と。是等の結論は數としての人口現象をそのまゝ觀察した

丈けで得られる結論である。併かし、此の密集的巨大集團は、其の結果何を生み出すか、と云ふ事に到ると、最早統計學、人口學の云々すべき所でなくして、社會學、社會心理學の領域に入つて來る。又、吾々は、大都會の人口の實數も知り度いには相違ないが、更に知りたいのは、この密集的巨大人口群から、「どんな現象がどう云ふ風に生ずるか」と云ふ事に就いてゞある。「數百萬を以つて其の人口を算ふるメトロポリスはどうして、世界的に僅かな存在なのであるか」を知り度いのである。假りに女性人口の比率が大である、中年々齡者が弱・老年々齡者よりも都市に於いて比率的に多いとするならば、其の原因の何たるやを、其の結果の何たるやを確めたいのである。同樣にして、市民の高死亡率、低出生率なぞも其の原因と結果とを探索したいのである。

されば、是等の希望を持つた人々には、どうしても、社會學的、心理學的、衞生學的、經濟學的、政治學的解說なり說明なりが必要となつて來る。反對に「純粹の都會人は三代以上に續かぬ」と云ふ、從來の諺の有效性を立證するが爲めには、其の原因理由の如何を云々するに先立つて、出來得る限り、科學的方法を用ひて、統計學的人口學的研究を試む可きである。故に統計學的人口學的調査及び研究は、或る明確に測量し得る現象の實在に關してのみ又科學的に嚴密に規定せられた場合にのみ有效である。それ以上に互つては、他の科學の領域に於いて註釋說明が行はれる。其の依つて來る可き原因が探究せらるゝ。是等の領域に於いては、人口は、最早單なる數としてのみ現はれない。或る特定の心理型式、或る特定の社會關係、或る特定の經濟關係、或る特定の政治關係に於けるものとして現はれて來る。卽ち都市現象に就いての限りに於いては、是等の人口は、或る特殊のものゝ綜合として現はれて來る。質的のものとして現はれて來るのである。

此の單なる數量としての現象より離れて特殊の質としての人口現象の考察を中心とするものが最近の都市社會學殊に社會生態學の研究である。都市社會學、社會生態學は、都市人口現象を或る社會學的に特殊な質的關係に於いて考察する。此の社會學的考察が、心理學的考察と、經濟學的考察とに分れてゐる事は、前節に於いて簡略に述べてゐる。其處では心理學的な形式社會學的な都市研究に對して經濟學的な發展理論的社會學的な都市研究を對立せしめておいた。本節に於いても、之れと同樣な立場をとつて、都市構成要素中其の人的要件について先づ人口學的な、數量的な考察に始まる。而して之れを批判する內に其の質的考察の重要なるを明かにし經濟學的發展理論的研究へ進む可き道を示さうとするのである。

二

人口學的に觀察して現代の代表的都市を求めるならば、吾人は其の例をニューヨークに採る可く躊躇しない。眞にニューヨークこそは、現代資本主義社會に於ける典型的都市中の最も典型的なるものである。今、人口學的に此の巨大都市が如何なる構成を持つてゐるかを示し、次いで、他の大都市、殊に我が東京に於ける數字を示してみたいと思ふ。

昭和七年東京市域擴張は東京市をして世界第二の大都市たらしめたとて大いに祝賀された。今當時の世界大都市

の人口を比較して見ると、

人口數に基く順位に於いては	人口	調査年次
ニューヨーク	六、九三〇、四四六	一九三〇
東京	四、九七〇、八三九	一九三〇
ロンドン	四、三九六、八二一	一九三一
ベルリン	四、三三三、〇〇〇	*一九三〇
シカゴ	三、三七六、四三八	一九三〇
上海	三、一五〇、七一六	*一九三〇
パリ	二、八九一、〇二〇	一九三一
大阪	二、四五三、五七三	一九三〇
モスクワ	二、四一二、三〇〇	一九三〇
ブェノスアイレス	二、一一六、〇〇〇	*一九三〇
ウィーン	一、八三六、〇〇〇	一九三〇

備考　本表は雜誌『都市問題』第十五卷第四號「大東京記念特輯」によった(「世界大都市の人口と面積」二六頁)但パリの人口丈け The Statesman's Yearbook 1932 によって修正した。前雜誌の數字は一九二六年人口で二、八七一、四二九であるから其れ程著しい相違はないけれど。尙ほ基礎調査は國勢調査で＊印丈けが推計人口である。

既に述べた様に都市の大さや規模は先づ第一に人口で計れる。故に大人口を持つと云ふ事は、其の都市の威容を示すものとして素朴な優越感を滿足せしめる。此の人口數に於ける筆頭はニューヨークである。併かしロンドンに就いては County of London 地域内の調査であつて、面積に於いて東京は其の約一・八倍、ニューヨークは其の約二・六倍である。故に最近の大都市發達の狀況から見れば、此の三都は必ずしも、都市測量に於いては、同一の水準を以つてしてゐるものと思へない。其れ故に、三都、殊にロンドンとニューヨーク及び東京との間には、人口計算に於いても修正を必要とするであらう、試みに人口密度に就いてみるならば、一萬坪當人口密度はロンドン一、四八〇、東京一二九七、ニューヨーク一二八六であつて、面積に於ける比率と逆になつて、ロンドンは東京の約一・六倍、ニューヨークの一・七倍弱となつてゐる。故にカァペンタァの云ふ如く、ニューヨークは世界最大の都市と云ふ事は、或ひは主張し難いかも知れない(Carpenter: Sociology of Cife Life p. 156) 殊に前表に於けるパリ市の人口の比較的少いのに就いても次の事情を考へておく必要がある、卽ち面積に於いてはロンドン市よりも更に少く、其の九一、六三〇、二七五坪に對して二六、〇八一、五五〇坪であるが故に(方粁に直すと七八・〇二方粁。本書七頁都市面積の項を參照せよ。)ロンドン市の約二割八分强に過ぎない、從つて其の密度も一番大で、一萬坪當り一、一〇二人の巨數を示し、ロンドン市の密度の約二・三倍にあたつてゐる。(註一)

(註一)　行政市區パリに對し大パリの地理的區域は先づセイヌ縣であらう、此の人口は一九三一年四、九三三、八五五で面積は一八五平方哩(約四八〇方粁)である。大ロンドンの人口は、上記の行政區ロンドン市に對して地理的ロンドン市は八、二〇二、八一八に達してゐる、面積はチャーリング・クロッスを中心にした十五哩半徑圓六九三方哩約一八〇〇方粁に及ぶ。從つて

此の數字を以つてすれば世界大都市の順位は(一)大ロンドン(二)ニューヨーク(三)東京(四)大パリとなる。(the Statesman's Year-book 1932. 今井登志喜氏「江戸の社會史學的一考察」―『社會經濟史學』昭和七年十月號)

三

以上に示すが如き巨大なる人口群は確かに驚異すべき現象である。百萬三百萬の人口に驚いてゐたのはそんなに遠い以前ではないのに今や既に五百萬七百萬更に一千萬の人口を一集團として持たんとしてゐる。近來喧傳された東京市人口の一千萬人と云ふのも決して架空又は遠い將來の出來事ではない。してみればかゝる數字は人口學的研究對象として眞に堂々たる存在である。然からば人口學的研究は此の數量から如何なる結論を導き出すか。先づ一般的場合に就いて考へてみよう。

人口學的因子となるものは、人口の大さ及び密度の大小である。人口の質的方面は民族學、人類學等の論ずる所として此の場合取扱はれない。而して此の人口學的因子を以つて重要なる社會過程の說明に役立つ基調たらしめんとする所に其の社會科學上の意義がある。例へば社會的事實の進歩的過程は主として人口の增加、密度の濃化によつて決定せらるゝものである。人口が增加し、一層集中化すると共に、社會的分化と組成とが增加し玆に進歩的な社會機能の分化、社會狀態の平等化が招來せられ、政治的には專制主義から權力分立へと發達し、經濟的發展は、神經筋力的努力から方法學的組織を有する機械的生産へとの移行に現はれ、信仰の進歩は多神論的宗教から合理的科學へと進む。

これを歷史的發展段階に分つて說明すれば人口集團及び集中の程度を基準として五期を分ける事が出來、其の各期につゐて社會的政治的經濟的特質が見受けられる。

人口量及び集中度を基準にした發展段階	社會的活動の分化及び進歩の程度及び特徵	社會的結合の形態と不平等滅滅への傾向
第一期　村落時代（非都市時代）	社會的活動の分化を缺く	家族的專制と出生に基礎を置く支配
第二期　諸村落上位の地方都市時代（地方都市時代）	機能的分化―(政治)軍事的政治―(宗教)社會的形態學的多神論的宗教―(經濟)家族生産	軍事的宗教的支配、種姓制度、單一の財産制即ち土地財産制
第三期　諸都市上位の中央都市時代（領域都市時代）	(政治)軍事的及び法治的の兩權力―(宗教)有神論的及び一元論的宗教、並びに數理科學が之れに加はる―(經濟)家內工業、製造工業及び商業	君侯及び其の官僚に具體化されたる國家支配、階級及び特權、財産制度は土地及び資本に現はれる。
第四期　諸中央都市上位の國都時代（國都時代）	(政治)三權分立、卽ち軍事、行政、立法―(宗教)半合理的宗教、數理科學及び自然科學―(經濟)家內工業、製造工業、機械工業及び改善せられたる運輸交通	個人主義に基礎を置く富の支配竝びに相續及び教育の不平等、財産制は土地、資本、動的有價物、

第五期	諸國都上位の聯盟中心時代（國際都市時代）	（政治）四權分立卽ち、軍事、行政、立法、司法―（宗教）合理的科學卽ち數理、物理及び生理の諸科學―（經濟）前時代の其れに加ふるに生命力利用による生産、自由結社の支配、智識支配への傾向及び個人に對する平等的保護、財產制は前時代の諸形式に更に發明及びその分前に對する特許權を加ふ

以上の段階は一定の繼續序列を有するものであつて常に社會的機能の進步的分化、自由なる協働の增加、不平等に於ける漸進的減退等の歷史的傾向を辿る。而して其の基調となるものは人口の增加と密度の增大であつて、人間社會は其の大さ及び密度が不斷に增加しつゝあるが故に進步的である。此の現象は接觸の增加及び其の强化、經驗の交換及び其の近代的累積と傳統とを生ぜしめる。

故に一社會の成員の數的增加は其の全體的進化の主要原因である。結合せられたる人口の增加は社會的分化の增進を導き、勞働及び社會的才能の分業を生じ、社會の各部分の交通を促進し、個人的活動のより良く且つ一層有力なる組成を可能ならしめ、自然法則の統一の表現をより一層正確ならしむるものである。土壤、氣候、人種等によつて人間の集合が促進又は妨止せらるゝ事もあるが、それ等は社會的進化の主要原因ではない。

斯くの如く社會發展と其の人口學的因子との關係を開明する以外に部分的に社會の諸現象を人口學的に說明しようとするものも少くない。例へば出生死亡の關係、移民・戰爭の關係、經濟・社會・政治上の關係、風俗習慣及び觀念形態上の關係等が理論づけられる。

人口の大さ及び密度と死亡率の關係――兩者間に積極的相關々係ありとの說、又は少くとも他の條件にして不變なれば、人口的因子の變化は死亡率の增減を正比的に惹起す傾向ありとの說

人口の大さ及び密度と出生率との關係は、反之、逆比例的なる事、卽ち人口の大にして密度大なる場合には、然らざる場合に比して、出生率の減少を生ず、卽ち兩者の關係は逆比例なりとの說

從つて人口增加と人口の大さ及び密度との關係に就いての法則は、上記の兩命題の立證の如何によつて決定される、卽ち出生、死亡兩率に對する人口學的因子の關係を上述の如くに解釋すれば、所謂人口增加に關する竝行說が成立する。人口の大さ及び密度の增加、卽ち人口增加は相反する二作用を竝行的に發生せしめる。稀少人口は出生率を大にして人口增加を伴ひ、之れによつて生ぜる夥大人口は出生率減少、死亡率の增大を促して人口增加を抑止する。

人口の大さ及び密度と移民との關係――（一）同一社會の歷史中にあつては、人口密度の急激なる膨脹期は、其の後に此の社會より出る移出民の增加、之れによる他國領域に對する强度の植民化を伴ふ。密度に於ける停滯又は減少の期に後續して此の國よりの移出者は減少し時としては他地方より移入民を招來する期間が發生する。（二）一般的規則として移住の潮流は、急激に增加する人口領域、又はより大なる效果的多產力を有する人口領域より增加力の劣弱なる領域へと流れる。

人口學的因子と戰爭との關係――一領土に於ける人口增加は其の人口が過剩となつた場合、植民によつて其の作

用を輕減緩和せしむるが、時としては、此の作用は戰爭を生み出す原因となる。戰爭は人口增加の效果的防止作用の一つである。人口學的要因は、經濟的擴張を要望して戰爭の必然的原因となる。

人口學的因子と革命――人口學的過程に於ける强度の動態期は同時に著しき心理的變動、革命、內的危機の時期である。

人口學的因子と經濟現象――

（一）生產技術との關係。人口の增加、密度の稠密は生產技術の改良進步、生產形式の集約化の原因となる、即ち社會的進步、文明は人口の數量的增加の所產である、或ひは密度大なる人口は技術を一層發達せしめ、人口密度小なる社會は技術的發明に乏しい。

（二）人口學的因子と所有權財產權との關係。人口稠密なる社會に於ける經濟上の所有權關係は私有制度が發達し、其の反對の場合には共有制が支配してゐる。

（三）人口學的因子と經濟的繁榮との關係。商工業の發達、生活標準の向上、經濟的福祉の增進は、人口の密度の增減に關係せしめられてゐる。一般に云ふ經濟學上の人口學說又は法則。

人口の大さ及び密度と社會的組織の形態との關係――

（一）人口學的因子と社會的分化、階層、分離。人口の增加又は密度の增加は、社會的分化を伴ひ、更に社會的階級或ひは身分等の階層を構成せしめ、社會的分離を發生又は增大する。即ち一方には地理的聚落的分業、他方には機能的分業の發達が人口學的因子に關係づけられて說明さる。

（二）家族制度との關係。婚姻形式又は家族形態の變化を人口的基數に於いて說明する。例へば、族外結婚、一夫多妻制、入夫制婚姻形態等は一社會群の數量的弱さを示す、蓋し是等はいづれも其の社會の人口增加策に外ならぬから。

政治的社會的制度と人口學的因子との關係――專制、民主制、王制、共和制等の政治的形態、及び奴隸、農奴、自由階級、封建制、平等社會等の社會的制度を主として、人口の大小、密度の粗密によつて說明せんとするもの。

人口學的因子と發明及び慧智との關係――人口及び密度の大さは發明を促し天才を生む原因であるとなす說

風俗習慣と人口學的因子との關係――風俗習慣は社會的に制約せらるゝものとして、性交、姙娠、出生、死亡等に關する其れ等は人口學的因子に基くものと考へられる。嬰兒殺し、墮胎、一妻多夫、結婚延期、姙娠豫防等に關する諸風習は人口夥多又は過剩の社會に於ける存在である。即ち人口學的因子は如上の現象に關しては或る程度迄、道德、法律、宗教、其の他の行爲の性質を決定する。

人口學的因子と觀念現象及び形態との關係――

（一）言語の發達は人口的現象に關聯せしめられる、即ち人口稠密、集團の大さ、個性の雜異性等益〻增大するに連れて社會的經驗の量に富み、知的生活のより充實する事となり、言語の發達進化に關聯せしめられる。（二）宗教、神祕主義拜物教との關係。人口粗小なる社會の心理はより宗教的にして神祕的、拜物的であり雜異性が少い。

人口の密大となるにつれて非宗教的、實證的、異端、個人主義、雜異性が現はれる。(三)　平等論的觀念及び運動は、人口の大さ、密度、雜異性、流動性に其の發生及び成長の因子を有する。

人口學的因子と社會盛衰との關係――社會の興隆又は滅亡、或ひは其の時代的反覆を人口現象に據つて說明する、例へば人口稀薄にして密度の粗小な時代に於いては國內の社會的差異著しく無く其の增殖力も大であるが、かくして人口增大し密度漸く大となるや社會的階級的差異を生じ上下の階層に從つて增殖力に相違を生ぜしむるに至る。同時に人口過剩を告げ、人口の其の部分は戰爭又は平和的手段を以つて國外移住を行ふに至る。故に此の期の社會的發展には强度の植民現象と領土擴張の戰爭が特徵となる。而して國外的發展及び軍事に從事する分子は主として進取的强壯的多產的分子であつて、此の擴張的經過の內に社會はかゝる分子を失ふ事となる。心理的に云へば、愛國心、國民主義の旺盛な時代であつて、母國の爲めにする植民及び戰爭の榮光讚美、著しき共同一致の精神に其の特徵を見出し、國民的感激及び興奮の前に個人的考慮の進んで犧牲にされる愛國的時代である。

此の時代に次いで衰退期に入る以前の文化爛熟期とも云ふ可きものが來る。卽ち戰爭又は植民によつて進取果敢而して多產的な分子を失つた社會は人口の增加又は增加率に減少を來す事となり、更に確然と差別せられた上流階級の增殖力の莫大なる減少は、此の人口減少の趨勢を助ける。此處に於いて下層階級の增殖力は以前よりも低くはなつたが、それでも上流階級のそれよりも大である增殖力が、上流階級の生產力不足によつて生じた間隙を補ふ事となる。卽ち人口增加の勢、止まると共に下層より上層に向く上昇運動は漸く盛んとなり、此の運動を妨げてゐた以前の障害は悉く除去されるに至る。社會は「民主的」になり、同時に人口增加の停止又は減少及び植民地搾取の結果、本國の經濟的福祉は增進し生活標準の向上を促し逸樂奢侈の風を生ず。文藝の興隆を生ずると共に、工業も幾多の奢侈逸樂の用途を助ける。斯くして工業化、都市膨脹、商業發展、人口の都市集中が其の特色となり、商工業的都會文化の時代を現出せしめる。

政治的には民主的となり、心理的には、以前の愛國的果敢勇猛、軍事的の氣風は「小市民的」となり世界主義的平和論的風潮を生み出す。富及び貨幣に對する追求が能事となり、かくして經濟的文化の繁榮は社會をして「女性化」せしめるのである。

併かし其の社會は此の時に於いて第三期の衰退期に入る。第一の徵候は農村人口の衰微であり、農業の衰亡である。農業人口の減少、從つて增殖力の減退、農業經濟の破綻は、都會工業の製品に對する需要を減少せしめ、都會に於ける商工業及び一般經濟的狀況を惡化し所謂生產過剩を招來する。玆に於いて此の經濟界の惡化によつて最も痛切に影響される者は都市勞働者である。他方かゝる社會には不生產的な年金其の他定收入寄食者が夥しい數に增加してゐる。政府は擴大した領土、植民地を維持する爲めに巨額の國費を必要とし、課稅重壓によらざるを得なくなる。社會的危機、秩序紊亂、騷擾は此の期の所產である。階級鬪爭は熾烈となり益〻社會情勢の惡化を募る。此の形勢に處して政府の干涉は增加し、經濟生活に干涉統制を加ふる事多大となるに拘らず、情勢の恢復を求め得ず其の社會は遂に沒落の淵へと迫る。

四

以上に亙つて社會現象に對する人口學的說明の概略を紹介した。人口學的社會學は、本來人口學的或ひは生物學的問題も說明すれば（出生死亡、人口增加率）社會體制も論じ（都市農村社會）政治現象も說明すれば（專制民主制體）經濟現象を解說し（分業論所有權論）心理的精神的現象も宗教的文藝的問題にも充分なる說明を與へんとする（風俗論、宗教論、思想觀念の分析等々）。是等の大規模なる意圖に對して敬意を表はし得るも、其の所說必ずしも全部が肯綮を得たりとは云ひ難い。成程、是等の社會的諸關係、諸現象は人口學的數量又は構成に何等か關係がある樣に見へる。例へば都市即ち人口密度の最高の土地は社會的には分業が盛んで心理的には非愛國的非鄕土的で且つ世界主義的であり、政治上では表面的には民主的で、社會の決定的因子は主として經濟的で、其の上層構成としての一般文化の諸機能も豐富である。死亡率は、動物による生物試驗を行はなくても、密集地域に大である事は、充分なる根據を以つて考へられる。併かし諸事情斯くの如しと云ふを以つて、一定時に一定所に於いて竝存してゐる諸現象はいづれも、其の一つに他の全部を連絡せしめて解說し得るや否や。其の特定的社會の綜合的諸現象はA・B・C・D・E……Nに及んでゐるとする。此等の綜合的諸現象は何かの根本的一元的乃至は多元的或ひは主要な因子又は諸因子を源として發生して來たものであらう。所で此の諸關係が同時、同所に、或ひは偶然かも知れないが兎に角、竝存すると云ふ事丈けで、A或ひはB或ひはその他のものゝ一つ、卽ちNは、他の凡べてに綜合的に或ひは部分的に相關々係に立つと觀察されるかも知れない。「同時に存在してゐるのだから、何等かの關係はあらう」と推察する事は勝手だが、かゝる素朴な社會觀察を以つて、或る一因子を捉へ來り、其れによつて他の全部を說明せんとするは極めて無謀である。殊に人口學的な統計的取扱ひは、或る結論を有效ならしむる爲めには、其の前提に於いて充分なる社會分析が必要である。人口の大さ及び密度に於いての比較を行ふ場合に、吾々は正規的な社會を標準に求めなければならぬ、例へば軍師團の駐屯地は其の人口及び密度が他の都會又は町と同一であつたとしても、全部の現象や諸制度施設を相似として見る事が不可能となる。從つて此の場合典型的な聚落形態は何であるかを充分に把握しなければならぬ。又人口密度は大體、行政區劃を基礎として行はれるが、之れが社會的經濟的の全一體の區域を示すものでない事は明かである、其れ故、行政區劃に基礎を置く統計法は、社會學的經濟學的知識に基く修正を必要とする。

斯くの如くして統計學的結論を有效に使用する事に當つては、當該社會の充分なる經濟學的社會學的分析を必要とする。此の分析に從つて、一社會に、實際竝列竝存する諸現象の中、何が重要なる因子であり、何が偶然的因子であり、何が因果的原因であり、何が單なる竝行的分子であるかゞ理解せられる。之れは統計によつて助けらるゝ事大であるが、此の前提的な分析なくしては、現實社會の理解に統計の役立たぬ事、又分明である。故に、單に人口の夥大なる所、人口の稠密なる所に現はれた諸現象を、全部、人口學的因子によつて說明するのは不可である。竝行的關係にあるものは、人口學的因子によつてその現象が數字的に表現されると云ふ事はある。併かし竝行的關

係は直ちに因果的關係ではない。人口學的因子のDと當該現象Xとは共に他のFなる因子によつて決定されて來るものであるかも知れない。更に又、逆な關係があるかも知れない、上述のX卽ち或る現象が直接Dを決定してゐるかも知れない。玆に於いて三樣の關係が成立する、卽ち

DがXを決定する、卽ち人口學的因子、當該現象共に第三の因子によつて決定さる。

XがDを決定する、卽ち當該現象が人口學的因子を決定してゐる。

D、X共に他の因子Fによつて決定されてゐる、卽ち人口學的因子の決定的關係を相互的として複合的關係を採用する。

かゝる複雜な事情を綜合して賢明なる研究者は、各因子の決定的關係を相互的として複合的關係を採用する。

屢〻述べた所のソロキンの著書の如きは其の好適例である。

更に人口學的、統計學的說明は、多くの現象を決定すべく、其れ自體としては、卽ち數量的觀念としては、數の局限に於いて不明確なるものがある。普通人口二千人以上何千以下、二萬人以上何萬以下、三十萬人以上何十萬以下と云ふ等級別を行ふ。數字は其の表現があまりに明確過ぎる。故に吾々は現代大都市を人口百萬を以つて單位とすると考へるが、九十何萬の都市を以つて一大都市と考へるに躊躇しない。併かし統計的に見れば九十九萬九千九百九十九人の人口を有する都市は人口百萬以上の都市等級には入れない。從つて此の弊を除く實際の用途に當つては概數を用ふるの外はない。吾々の考へ且つ觀察する大都會現象なるものが人口百萬前後の都市に發生し流行してゐるが故に、吾々は百萬の近似數を以つて大都市の數的標準とするのである。

270376

同じ事は、人口學的因子と其れによつて決定せらる可き社會現象との關係に就いても云ひ得る。數量に於ける一の增加又は減少は、一つの變化である。併かし此の變化は直ちに社會現象の變化に影響を及ぼすものとは云へない。從つて數に於ける變化にも或る標準階程を求めて來なければならぬ、又其の標準階程に於いての凡べての變化が常に社會現象に於ける變化を伴ふとも思へぬ。此の變化の中の或るもの丈けが社會現象に變化を生ぜしむる場合が多い。同じ比率であつても、一萬の都市の人口倍加と百萬の都市人口が二百萬になつたのでは、其處に現はれる社會現象の變化は同一ではない。故に此の際「人口が多くなれば……となる」と云ふ常識に近い命題は成立するかも知れない。併かし「何程丈け多くなると……」に就いては概數丈けしか示し得ぬ場合が多い、例へば、一社會に於ける人口過多と人口過少との關係に於いて、過度の增加率は社會的不幸の原因となると共に過度の減少率も亦、同樣に社會的不幸を招來せしめる。從つて、其の社會に就いての人口適度の標準を設ける事となり、一定の條件に於いて、人口の增減が此の標準を中心として動く場合に、其の社會の禍福を云々し得るに止まる。

更に宗教、倫理等の觀念的なるものを人口學的數字に於いて物語るは困難であると共に危險が多い。平等主義的傾向は必ずしも人口數の大小、密度の密粗によつて直接又は間接にも決定せられるものでもなからうし、よし又其の間に連絡がありとするも、以前に述べたるが如く、如何なる數量が平等主義的傾向を生むかは、直ちに回答せらるゝものでもなく、又二つの國を比較する場合、人口の多い方の國が必ずしも平等主義的な國であるとも云ひ難い。

要するに、人口學的因子は、社會の綜合的現象の一相であるに過ぎない。其の數量的變化は純然たる自己決定的

ではない。人口增加のみが技術の發達を促すとは云ひ難く、逆に技術の進步が人口の膨脹を許してゐる事もある。從つて人口現象は或る他の現象を決定するかも知れないが其の關係が間接的なる場合もあり、又直接的なる場合にも、人口現象自體が上位の因子によつて決定されてゐる場合もある、卽ちD（人口學的因子）はf（他の因子）を決定するが、D自身がF（上位の因子）によつて決定せられた結果としてfが生ずる場合もある。此の際DとfとF の間には、直接にして他のものゝ交涉を容るゝ餘地なき純粹關係が證明せられぬ限りDによるfの說明は第一義的のものたり得ぬ。例へば都會人口の年齡構成を見れば中年期に屬する人口が比較的に多いと云はれてゐる、而して此の事は出產力の旺盛を示すものであるからして都會の人口の出產力及び人口增加力に充分影響するものでなければならぬ。故に、他に此の出產力に影響を及ぼすものゝない限り、都會人口の出產力が、其の多產的年齡構成にも拘らず、充分實現しないとするならば、其の豫想出生力不實現は、或ひは人口學的因子、卽ち密集的狀態が出產力を減少せしむるの作用によつて、說明せらるゝかも知れない。併かし、之れが爲めには、年齡構成と出產力不實現との間に他の障害例へば經濟的必要による獨身生活、結婚忌避、產兒制限等——是等は人口學的要素によつてのみ說明せられるものでない——の存在及び作用を排除せねばならぬ。併かし、實際に於いては、かゝる排除は全然不可能であり、又寧ろ無意義である。鳥類獸類の實驗的密集試驗より得たる其の生產力の生物學的結論は生物としての人間に當て嵌るかも知れないが、都市人口の生產力狀況を說明する方法としては、餘りに單純過ぎてゐる。若し都市人口の出產力が豫想せらる可きものより低率なるを經濟的、社會的原因によつて說明するとして、更に之れを人口學的に妥當せしめんとするならば、出產力減少を伴ふが如き經濟的社會的原因は、必然に人口學的因子によつて優先的に決定せられたるものであると主張しなければならぬ。卽ちfはFによつて決定されるが其のFはDによつてのみ決定される、卽ちD→F→fの關係が成立すればfは間接的ではあるがD→F　F→fの決定方法が必然的であるが故にD—fの決定も必然的である。例をとつて云へば「人口增加して經濟的生活に危殆を生じ、從つて消極的積極的に人口の增加力減少する」と云ふ事となり、所謂マルサスの人口論に該當する事になる。然かるに同じ人口學的命題は人口增加と技術の發展との關係を許してゐる、故に人口增加は技術の進步を伴ひ經濟的不安を必ずしも不可避的に導くものでないと云ふ事になつて、D→Fの關係が決定的ならざるが故にD→fの關係も亦必然的ではなくなつて來る。更に密集が出產力減衰の原因となると云ふ說に對しては、勞働者階級の豐富なる出產力及び其の實現が反對の例を提出してゐるものとされてゐる。

以上社會現象に對する人口學的說明の不備に就いて說いて來た。此の不備の原因を吾々は、人口學的取扱が數量に就いてのみ終始する爲めであると解する。故に社會現象、今此處に問題となつてゐる都市社會の現象を理解するに當つても人口學的な數量的解釋にのみよる事の出來ないものが多い。既に人口學的に、人口の大、密度の大なる社會は、社會的分業、分化の大なるものと教へられて來た。分業、分化は質に於ける觀念である、卽ち狹い社會、小さい天地で見れば同種同樣のものが集合し得る可能性がある。併かし百萬、五百萬の人口を有する都市社會は此

の質の觀念を中心とする事なくしては理解し難い。而して人口學的には、五百萬の都市には社會的分化が著しいとは教へて呉れるが、どう云ふ分化があるかは、別に研究を要する所である。例へば都市住民の職業別、生活標準別、學識智能別等に就いては、最早人口學の領域内の問題でなくなつて來る。是等の各種の系統の各〻に就いては再び統計學的數量の援助を藉りる事大なりと雖も、系統分類の方法は獨立のものである。人口學は、此の點、社會的會計學に過ぎない。以下、社會的分化を中心として、質の觀點に立つて、都市社會を一瞥して、以つて人口學的考究と對比してみよう。

五

社會生態學は、生態學の一方法として生物學の中に其の一地位を占むるものであるが、其の研究は吾々に少くとも質的觀點に立つ觀方を與へたものと云つていゝ。何故なれば、生態學は生物の生活關係に於ける環境に對する態樣の學問であるが故に、吾々は各種各類の生物を、各〻特殊の生物として見る事が出來る。同樣に社會生態學にあつても、吾々は人間を、人間と云ふ一般的型に於ける生物と見ないで、特殊の類及び種を持つたものと見る事が出來る。生物界に於いては各種各類の攝取する營養分は、或ひは異り、或ひは其の攝取の方法を異にする。それ故に一地域内に各種各類の生物が共同して共榮する事が出來、玆に一つの景觀を其の地域に與へる事となる。

人間社會の場合にあつては、生命の維持に關する營養分に就いては全體に異る所無しと假定しても其の攝取の方法に於いて異る各種各類を見出す事が出來る。卽ちその生活々動に於いて、全人類は決して單一でなくして、複合的である。譬へて云ふならば、現在の社會に於いての人間の營養素は貨幣價値である。之れは大體に於いて各人に共通な營養素とみて差支ない。然かるに各人は此の營養素の攝取の仕方に於いて決して一樣でない。他人の攝取した養分を中途に於いて略奪するものがあり、或ひは既に充分なる養分を貯藏せる者があり、更に多くは自から攻々として此の養分の吸收につとめてゐる者がある。此の養分の吸收に務める者の中にも色々な生活機能が眺められる。土を耕す者、鑛石を採る者、魚を獲る者、物を造る者、運搬する者、使役せらるゝ者、人を娯ばす者、智識を授くる者、治療する者、精神を慰むる者……等々がある。是等はいづれも各〻特殊の機能を發揮して其の營養素の攝取に努力してゐる。故に吾々は一般生物界にありて、動植物の間に共存共榮の實ある事を見るが如くに人間の社會にあつても共存共榮の形式を見るのである。巨大なる喬木の群生より成る森には、其の下に灌木藪あり更に草叢を具へ、最下には蘚苔類の生長がある。内に各種各類の鳥獸昆蟲を生棲せしめて、玆に堂堂たる景觀（ランドシャフト）を現出してゐる。人間の社會にあつても、巨大なる都市は之れにも比すべき堂々たる景觀である。中央政廳は、全國より收納せる收入によつて多くの人間を使役してゐる。商人は貨物の配給につとめんが爲めに蝟集する、工業家も製造貨物の便宜と勞働力市場の便とを計つて、人口の密集地に生活の基礎を置く。消費力の優勢なる土地に、教育、娯樂、其の他の機關が整頓し、之れに關係する生活者が集合する。都市はかくの如く、生物學的の事實であり、群生態である。都市は自然的景觀に對して社會的景觀である。

斯くの如き質的觀點に立つ觀方、社會生態學的研究は生物學―社會學―經濟學的態度である。此處に於いては都市人口の五百萬は、單なる數の五百萬として現はれないで、幾許かの類種の合成する、五百萬となつて現はれて來る。元來、此の現象は社會的分化、分業の現象であつて、從來都市社會の特徴的存在とされてゐる。スペンサア、ジムメル、デュルケム等の社會學者を俟つまでもなく、凡べてが此の機能的分化及び分業を以つて社會的發展の傾向と目してゐる。スモールは機能的分化の傾向を逐つて『社會發展史』を書いた（Small and Vincent: An Introduction to the Study of Society. 1894. Natural History of a Society）。ソロキンは社會的分化を以つて都鄙社會の對照的特徴の一にしてゐる（Principles of Rural-Urban Sociology）。アンダァスン・リンドマンは超專門化の弊に注意するを怠らない（Urban Sociology. Over-specialization）。農村に於いては各種の生活機能が單一的に綜合されてゐる、之れに反して都會に於ける機能は極度に微細に分化されてゐる。

スモールは前揭書中に於いて興味ある言葉を吐いてゐる。卽ち、田舍の村落に於いて商業配給の機關は「萬屋」である荒物屋である。一軒の店に於いて凡べての日常品が處理される商店である。然かるに都會が膨脹し、發展するに連れて、之れは一度は專門店に分化し專門化したのであるが、再び一經營の下に各種の配給種目が綜合せらるゝの現象、換言すれば田舍の「萬屋」式形態で再生して來た、曰く「百貨店」の出現である。誠に現在の百貨店は、昔の「萬屋」よりも、一層複雜な內容、商品を綜合したものである。若し一形態に綜合されたものが、非分化的專門的と云ふ意味で田舍的村落的だと云ふならば「百貨店」は最も原始的村落的のものだと云へようではないか。併かし何人も敢てさうは考へぬ程、百貨店は大都會的である。依然として分業的專門化的である。

例へば盛り場に於ける飮食店を調査するとあらゆる種類の喰物屋飮食店がある。牛屋、鳥屋、天ぷら、そば、すし、蒲鉾、日本料理、支那料理、西洋料理―特に又、街にトンカツ店の如何に多き事よ―喫茶店、汁粉屋、おでん屋、バー、カフェ等々。而して又飮食店界の百貨店とも云ふ可き「食堂」なるものがある。斯くの如く「綜合」されてゐる事は必すしも分化に反する現象ではない。「食堂」又は「百貨店」の綜合は、特殊商のそれと同じ丈けの專門化の基礎の上に立つてゐる。專門的技術が獨立のものとして成立してゐれば、其れが自立的の特殊商であらうと又は、他の綜合的經營の一部門であらうと、其の差別は問ふ所ではない、從つて又其の專門的性質の融通性例へば一人が二種以上の種目の擔當者となる事も決して重要な例外ではない。各種目に對して獨立の專門的技術及び其の訓練が要求され、それに從つて人間が生活し得るならば、而して此の意味に於いての專門化が一般に承認せられてゐるならば、それで充分なのである。

現在に於ける專業化の實情を此の機會に於いて詳細に報告する事は聊か退屈である。產業又は職業統計が都市研究に於いて利用せらるゝに就いては、通常其の特殊性を示す爲めに、所謂、大分類が用ひられてゐる、卽ち（一）原始生產業（二）工業（三）商業（四）交通業（五）公務自由業（六）家事（七）其の他の產業、及び最後に（八）無業。

是等の中（一）―（五）に至るものが細分再細分せらるゝのは明白である、今假りに內閣統計局の公にした『國勢調査ノ結果表章ニ用フベキ產業分類及職業分類』を利用して其の中・小分類を示せば、產業分類に就いては

大分類　中分類　小分類
農業　五　一四

水産業	一	三	
鑛業	二	五	一五〇
工業	一六	七	五七
商業	七	一	一三
交通業	一	三	三四
公務自由業	七	一	一
家事	一	二	二
其の他の産業	一	一	一
無業	一		

全部を合計して中分類にして四十二、小分類にして二八〇を算ふる。同じく職業分類に就いては

大分類	中分類	小分類
農業	四	二四
水産業	一	四
鑛業	四	二一
工業	一四	二一三
商業	三	二四
交通業	二	三三
公務自由業	一	二
家事使用人	一	八
其の他の有業者	一	九
無業	二	三七六
(計)	四一	

更に是等の小分類の中に分類包含せらるゝ産業又は職業の實際形態に就いてみれば、同内閣統計局發表の示す所に從へば、更に其の複雜性を增加するのである。例へば産業分類中大分類—工業、中分類(一四)—其の他の工業、小分類(一六八)—文房具製造の中には四十三種名の實際形態が集められてゐる、同、小分類(一六九)—運動用具遊戲品玩具製造の中には四十九種名が綜合されてゐる、(前掲書、『産業分類各項目ニ含ム産業名例示』)是等の「産業名例示」を各分類の諸項目について詳細に述べる暇はない。以上によつて大體を豫測せられゝば結構である。勿論是等の「産・職業名例示」は調査申告に對する整理の規準を爲すものであれば産業職業名の相違は必ずしも業務實體の相違を語るものとは考へられぬ。併かし乍ら前記の四十數種名の內には、適當に其の專門的技術又は職業部門を示してゐるもの少しとしない。

所で以上の産業及び職業分類中、都會的のものと見らるゝものを揭ぐれば、工業、商業及び交通業、公務自由業等が特に都會的特徵を示すものとして揭げらるゝに論を俟たぬ。例へば舊東京市に就いて云ふならば、同舊市人口

の産業及び職業的人口分布は次の如くである。（昭和五年十月一日現在、『東京市市勢統計原表』、第五卷、産業及職業篇上卷による）

全人口		二、〇五四、八七四
內 無業者人口		一、〇八六、五九四
有業者人口		九六八、二八〇
有業者人口の産業別構成		有業者千人に就いての各業比
有業者總數	九六八、二八〇	五
原始生産業	四、六七七	三二八
工業	三一七、八四二	四三二
商業	四一八、二五七	四五
交通業	四三、四二三	九四
公務自由業	九〇、七八四	九三
家事	八九、七七〇	
其の他	三、五二七	三

都會的産業及び職業である工業及び商業が前記國勢調査に關する職業及び産業分類中で最も多數の中、小分類項目を有するものである事は、前揭の數字に於いて明瞭であらう。

要するに機能的分化は、現在に於いて、技術的分業專門化と共に微細に互つた事については、擧證の煩しさを犯す必要ない程、明瞭な事實と認め得る。唯吾々は、此の微細なる分業の結果、人間の生活々動及び其の過程が非常に複雜となつて來た事を認めればいゝ。米國の經濟學者バッテンの如く慾望の變化と複雜とに社會の進歩を認めるにせよ、認めざるにせよ、兎に角慾望の複雜化と共に之れに對する施設も複雜化して來た。この社會に於ける人々は、この複雜性の中のいづれにか取り附いて、其の生活を確立しようと努める。營養素の攝取に努力する。玆に於いて一地域内に色々の職業の分布配合による構成が生じて來る。かくして出來た一大都市及び其の各局部は一つの社會的景觀となつて現はれるのである。

社會的景觀に就いては、吾々は通常何等深い意義に就いて知悉する事なくして、日常認めてゐるところのものである。大都市の風貌と云ひ町の姿と云ひ、皆、景觀に外ならない。下町、山の手、郊外に夫れ〴〵の風貌があり色街、盛り場、學生街、職人街に夫れ〴〵の景觀がある。社會觀察に就いて一方面を開いた今和次郎、吉田謙吉兩氏の『モデルノロヂオ』は次の點に就いて興味ある調査及び觀察を示してゐる。早稻田大學東京帝國大學及び慶應義塾大學をそれ〴〵中心とした學生街の調査—飲食、被服、學藝、娯樂等々に關して學生的交渉のある商店施設の分布配合の調査、銀座神田等の盛り場に於ける飲食店分布の調査等、それである。銀座一劃に、如何に飲食店の多き（『モデルノロヂオ』扉圖參照）。之れによつて吾々は飲食に關する多種のサーヴィスが群生的に構成されてゐる事實を見る。食傷新道なぞと呼ばれる特別の形態を持つた一街、其處にあつては、同じく飲食に關する色々の店が密集的に生棲してゐる。此の事實は是等飲食店等に反撥的作用よりも寧ろ吸引的作用を相互に働かしてゐる事を雄辯に物語つてゐる。

盛り場に就いて云へば有閑階級の趣味嗜好に投じ其の他學生、サラリーマン、主婦、子女等々の需要に應じて、諸般の職業が群生する。故に商店の經營者及び其の他の者は其の經營上かゝる職業的分布又は生態學的傾向に注目する事を緊要とする。敏感なる商人は既に、之れを、其の學理的說明なくして實行してゐた。近代の大規模な、合理的な商業經營法は此の方面の學理研究に充分の努力を惜まないであらう。

斯くの如くして分化は同時に組成である。以上の說明に於いて人間はその社會的關係に於いては最早單一、平等な數的單位として取扱ふの不可能なるを示して來た。併かし、以上揭げた專業的分化は徒らに技術的乃至は職業的の分類に外ならなかつた。此の分類に基いて、都市研究は更に一步を進めねばならぬ。それは、技術的職業的構成から更に進んで社會學的經濟學的構成に於ける質の研究へ入らねばならぬ。次に都市生態學に就いて若干の考察を試みる。

六

都市社會學の內部にあつて、近來頗る勢力を張つてゐる分派に社會生態學（Human Ecology）の傾向がある。生態學とは生物學殊に植物學上の研究方法で、之れを人間社會の場合に當て嵌めたのである。元來、生態とは一定の地域に於ける生物の各種各類の集團的生活樣相を意味する。與へられたる條件の下に於いて、一定の地域に生存する生物——植物は各種各類の聚合に當つて或る均衡を保つ、之れが生態である。若し條件に變化があれば、此の生態上の均衡が破壞されて變化を生じ、新しい別の均衡へ移動する事となる。若し此の植物生態の狀況を知らうと思ふならば、自然を眺めるといゝ。松、杉、檜等の針葉樹がある。榎、欅、樫、櫻等の闊葉樹がある。是等喬木に對して灌木がある、草がある、苔がある。或る地域をとつて見ると、是等の植物が整然と繁茂してゐる狀況を見るであらう。其處には針葉樹又は闊葉樹の群生。更に灌木草苔が之れに附加叢生してゐる。若し土地が異れば此の狀況は全く違つて來る。例へば熱帶寒帶乃至は高度の相違に基いて生態の變化がある。

又之れに動物其の他の生物的要素を加へると、更に生態的現象が明白になる。獸類、鳥類、蟲類の棲息は環境によつて規定される。故に森林が伐採されたり、原野が開墾されたりすると、直ちに此の動物の生態に變化を來す。之れ均衡の變化である。いづれにもせよ、生態現象は生物と其の生存との地域的關係による生活の態樣である。

此の現象を人間社會に於いて眺める時、社會生態學が生ずる。人間集團中の生存競爭に於いて、社會組織は一定の地理的地域の居住者間に存在する空間的食物的關係に適應すると云ふのが社會生態學の命題である。斯くして人間及び其の集團は生存の爲めに最も良き土地を選んで分布する（生活的には全經濟機構內に嵌入して其の制約を受ける事を意味する）。玆に生態的分布が現出する。斯くの如くして現はれた生態現象の因子となるものは、（一）地理的因子、（二）經濟的因子、（三）文化的技術的因子、（四）政治的行政的因子に分けられる。是等の因子は肯定的又は否定的の作用をする。或るものを吸引し或ひは排斥する。從つて是等の因子の作用を受けて玆に生態學的過程が生ずる。卽ち、

（一）集中。一定地域又は地方に人間が增大的に集合する現象。

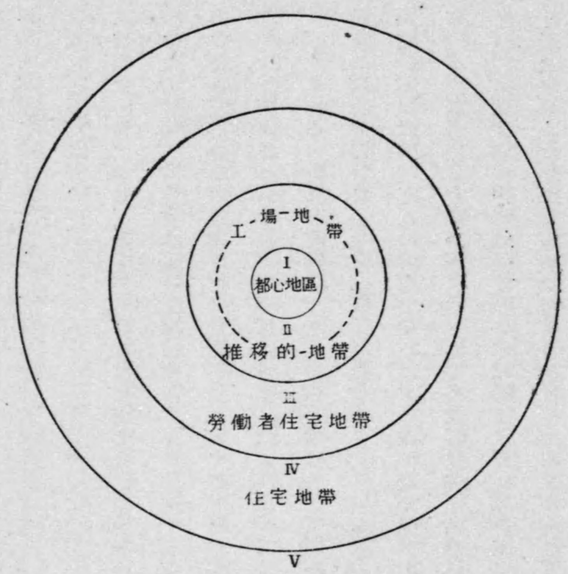
（二）中心化。集中現象が單なる集合であるに反し、中心化には遠心・求心兩力の作用を受ける。に一定地點に集合する傾向の所産である。從つて中心化

（三）隔離。淘汰力の作用によつて一定社會內に人口諸典型の集中が行はれる。其の結果が卽ち隔離である。淘汰力中最も重要な力となるものは經濟關係で、之れに基く隔離が最も明瞭となる。其の他、人種、言語、風俗等が同一の作用を爲す。

（四）侵入。集團排除の過程で、一つの隔離地域が他の地域を侵略するを云ふ。

（五）繼承。異つた典型によつて其の地域が占居せられる過程を指す。從つて侵入の結果が定著した場合に繼承となる。

以上の五つが生態的現象の過程であるが、いづれも一定の地域を限定しての過程である事を忘れてはならぬ。先づ靜態的に觀察すると、現在の都市に、所謂都心地があり。都心地區は、之れによつて生活する事の出來る人口集團を集めてゐる。此の中心に於いて生活する事の出來ない者は排除されて了ふ。斯くの如くして、ビジネスセンタァがあり、高層建築があり、高級商店街があり、官廳公署があり、娛樂街がある。大中小、いづれの都市によらず、此の現象は中心部に見受けられる。之れ、生存を基底として社會的集團と地域との關係である。然かるに都市が膨脹すると斯かる中心部は外方に擴大する。從つて從來住宅地であつた所、工場のあつた地域が、中心部の官



第三圖　E. R. Burgess の定型による

廳街・商店街・娛樂街的な勢力の侵入を受け、再び玆に排除、隔離、繼承の過程を見る。他方、中心部から排除された人口は郊外に進出する。すると其處で再び此の侵入、排除、隔離、繼承の過程を見る。卽ち都市は一つの生態學的な存在である。

現代都市の膨脹を此の生態學的過程に於いて說明したものが第三圖である。之れによると全市が五つの地帶に分れてゐる。而して各地帶に特殊な生活、卽ち隔離が行はれてゐる。先づ之れを說明すると

（一）都心地區。此の地區は略ゝ都市の地理的中心點に當り、其の特色は商業地域たる點にある。其の都市の歷史的な中心でもあり、高級小賣商業の所在である。取扱ふ商品は高級・貴重・非標準的・非大衆的商品である。更に別の特色としては選擇的・組合せ的商品の販賣——其の典型は百貨店——である。第一の特色から流行品、贅澤品、高級品の店舖となり、第二の特色からは、

顧客が購入に際して選擇の幅の廣い商品、卽ち趣味又は價格乃至は品質等に於いて頗る選擇性のある商品の販賣を主とするものが存在する。此の外に都心地區に存在するものとしては、料理・飮食店を集團的に存在せしめ、又、政治・行政的乃至は文化的中心を形成する。更に具體的に分析すると、都心部又は其れに隣接して、卸賣商店街、特殊工業、取殘された住宅、高級乃至は大規模のホテル及び高級アパートメント、旅客交通機關の終點、娛樂街、金融及び事業經營の中樞等が指摘される。是等に就いて特に說明の必要は無いと思ふが、都心地區に置かれる特殊工業に就いて云へば、原則的には廣大な敷地面積を必要とせず、特に甚しき騷音、煤煙、惡臭、危險等が無く、且つ生產と同時に消費者に迅速に配給せらる可き性質の工業がそれであつて、具體的に云ふと、衣服裝身具工業、其の他殊に流行品的性質のもの、新聞を中心とする印刷工業等が之れに該當する。取殘された住宅とは昔、高級の住宅として使用されたものが、事情の變化した後になつても其の儘、一部分殘存してゐるものを指す。

要するにかゝる都心地區は、今日の大都會に於いて明かに指摘する事が出來る。東京に就いて云へば、日本橋・銀座の商店街、同じく料理・飮食店の集團、丸の內・霞ヶ關にかけての官廳地域、日本橋區の卸賣商店街、丸の內・銀座の新聞社街、帝國ホテルを中心とする大小幾多のホテル・旅館、東京驛・新橋驛に示される交通機關、歌舞伎座・帝國劇場・日本劇場等に示される娛樂興行街、丸の內の金融及び事業中樞等、明かに右の條件を具備してゐる。

（二）　推移的地帶。此の地帶は地理的には都心地の直ぐ外側で、都心地區が膨脹するに連れて、其の土地の用途を漸次變じなければならぬ土地である。從つて推移的性質を帶びる。換言すれば從來の土地用途に於いて安定する事が出來なくなつた地帶であつて、米國に在つては貧民窟地域となつてゐる。卽ち近き將來に商業地帶として發展するの豫想を持ち、然かも住宅又は工場地帶として從來の樣に使用するには不適當になつて來たので、玆に一種の放置的狀態に置かれるのである。從つて此の放置による空隙を充たす利用方法が考へられる。卽ち將來商業地となる迄の間、從つて恒久性のない利用法が其れであつて、貧民窟、間借人住宅等が之れになる。建築樣式の異なる我國都市に於いては屢〻空地となつて現はれる。此の土地は恒久性を持たぬが故に、凡べて積極的な顧慮を加へぬ。それ故凡べてが廢頹に委ねられる。之れを廢頹地帶と稱するのも此の理由に基く。居住者は既に述べた樣に貧民・浮浪者・犯罪者・惡德者・ボヘミアン・外國移民等でいづれを見ても正規な社會的規律を逸脫した生活者であり、從つて最も反社會的、非社會的な地帶である。暗黑街を含むのも此の地域である。此の第二の地帶に工場・鐵道敷地等が在る。

（三）　勞働者住宅地帶。勞働者住宅地帶の特色は職場に近いと云ふ事である。それ故、勞働者住宅は、第二の地帶の周圍に成立する。之れ下町的な勞働者・職人街である。

（四）　一般住宅地帶。此の地帶は社會的・經濟的に一般と上昇した社會層の住宅地帶であつて幾分「山の手」的な色彩を持つ。それ故、同じ住宅地帶でも前者卽ち勞働者街とは其の性質が異つて來る。

（五）　定期券通勤者地帶。所謂郊外であつて、交通機關の高度的發展の結果である。都市の最外側で、行政的には其の都市の市域外の場合もある。朝夕の通勤現象——ラッシュアワーを生ぜしむるのは此の地域的關係で、此の

現象は（A）都心地の完成、（B）郊外地の發展、（C）交通機關の整頓と云ふ三位一體の關係に現はれる。其れ故に郊外地は往々にして單なる寢床であつて、日常生活の大部分が都市中心部に行はれ、爲めに郊外地の社會的自立性を缺くに到る。實際には、郊外地に居住する人口と其の富力に比較して商店、娯樂機關、教育其の他の文化機關が極めて貧弱な事を觀察すればいゝ。是等の機關によつて充すべき必要は常に都心地に於いて充足されるのである。

以上が、現代都市の生態學的な形態である。都市それ自體の變化は、此の地域的構成の變化となつて現はれる。前に述べた、占居、集中、中心化、隔離、侵入、繼承の諸過程が行はれる。

第五節　現代都市の經濟理論

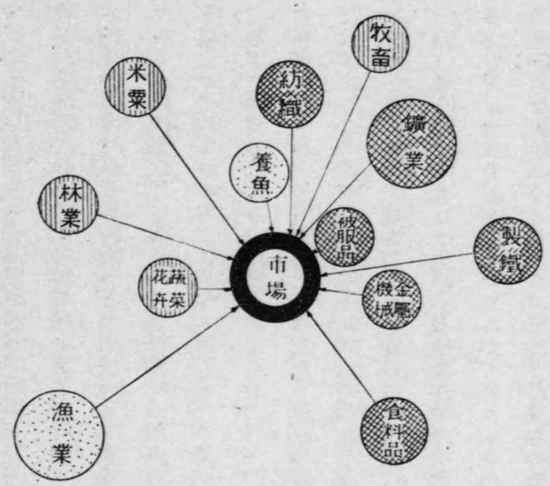
一

今日吾々が取扱ふ都市の典型的なものは、ロンドン・紐育・シカゴ・巴里・伯林・東京・大阪と云ふ樣な世界的大都市であると云ふ事を緒論に於いて明かにした。都市は社會的交通・交易の中心となる地點であり、今日の交通・交易が經濟的には國民・世界經濟的であるが故に現代の都市はいづれも一國の中心、世界の中心となつて表現されて來る。故に現代の都市の經濟理論は國民・世界經濟の理論でなければならぬ。經濟組織の空間的規模は小より大へと發展して來てゐる。家族的部落的規模から地方的領域的となり更に國民的世界的となつて來た。勿論、經濟組織の機構內部に於いても之れに伴ふ變化があつた理で、例へば土地經濟から資本經濟へ、奴隷經濟から賃勞働經濟へ、自由經濟から統制經濟へとの推移があり變遷がある。從つて現代大都市は、此の經濟關係の裡に成立したものであり、現代都市及び其の問題の理解は、此の根本的約束を無視しては求められぬ事となる。此の意味に於いて經濟理論を、あらゆる方面よりする都市研究の第一位に置く。

都市の本質に關する一般的命題を社會的生活の中心的機能の所在と云ふ點に基かしめると、經濟上では何を意味する事になるか。卽ち經濟上の觀點から見れば都市は經濟社會を組成して行く上に於いての中心機能の所在地だと云ふ事になる。從つて先づ第一には此の命題を取り上げねばならぬ。

經濟上で社會的に組織されると云ふ事は何を意味するか。根本的に見れば經濟とは人間の生活要求を滿たす手段に就いての考慮である。生活要求は衣食住の根元的なものから文化的精神的な要求にまで及ぶ。其の慾望を滿たす手段を調達する考慮が經濟であるが、假りに各自が銘々獨立して、他に依據しないで此の調達を行つてゐるとすれば社會的な組織とはならない。反之、自分の必要とするものを他によつて補ひ、自分は他人の必要に應じてやる樣になると、玆に組織が出來て來る。此の場合之れが所謂分業であるが、此の組織に二つの方法がある。一つは組織全體を統率する支配者又は意志があつて、其の命ずる所によつて分業を行ふ場合と、他はかゝる支配者又は意志がなくて、一つの社會的な仕組みとして分業を整頓して行く方法である。前者を共同經濟組織と云ひ、家族の如きは

此の組織の適例である。後者は今日では交易經濟組織となつて現はれてゐる。卽ち、物資又は勤勞の交換によつて分業が組織立てられてゐる經濟である。此の經濟組織では交易の行はれる場所が必要になる。交易の行はれる場所は卽ち市場である。故に經濟社會の組織が交易によつて成るとすれば交易の行はれる場所、卽ち市場が經濟的社會組織の中心的機能の所在と云ふ事になる。卽ち個々の分業を一つの組織に整頓統合する作用は市場の働きである。故に都市を中心機能の所在として見るならば、經濟上では市場のある所が都市だと云つて差支ない。普通、地理學教科書等が地方の都邑を敍するに當つて「物資の集散地にして」云々とあるが、之れが卽ち市場であつて、從つて經濟上では都市的なものである。



第四圖

普通に都市を商工業が盛んな所と云つて經濟上の定義の樣に看做すが之れは必ずしも正鵠を得てゐない。先づ工業に就いて云へば、個々の工業や產業の行はれる場合、之れを土地的に見れば土地の分業が行はれるのである。工業、其の內でも金屬工業・化學工業・紡織工業・製鹽業等々諸種の產業工業部門に適した土地がある。從つて其の土地に就いて色々の生產活動が行はれ、其の內にも、花卉・蔬菜・禾穀等又各〻その種類に適した土地の分業があるのに同じである。併かし是等の生產活動の現實に行はれる場所は、決して經濟上の中心地ではない。如何に澤山の農產物又は工業生產額があつても、それ丈けでは、個々の生產活動の現場たるに止まつてゐる。此の現場の活動を國民・世界經濟的に規定してゐる統合的な作用が別に存在しなければならぬ。此の作用が卽ち市場作用であつて、市場作用の土地は、又その必要に好適な土地を選定す可きであつて、或ひは實際に、さう選定されてゐる。その土地が經濟上で云へば都市なのである。此の關係を圖で示すと、第四圖となる。

唯、工業活動にあつては土地の選定に當つて農業の樣に豐饒な廣面積の土地を必要としない。むしろ勞働力又は消費市場に接近してゐる方が便利であつたりする爲めに、現在の都市又は其の附近に集合して來る傾向がある。或ひは工業が盛大になつて後に本格的な都市が出來た場合、卽ち工業都市の樣な例もある。併かし全經濟組織の上から云へば、工業が如何に一地點に集中してゐようとも、それ丈けでは組織の中心ではない。組織の中心は、此の盛大な工業活動を全體的意義に結びつける組織、卽ち市場に在る。此の點ははつきり區別して認識されねばならぬ。

一方は生產原地であり、他方は市場である。生產原地の活動は市場に結びついてのみ全體的意義を持つ。

故に中世的都市でも大抵の都市は市場を持つてゐる。形態的には市場（いちば）がある。市場觀念は單に此の場所的な市場だけには限られない。先きに物資の集散地と云つたが、今日では物資が生產原地から消費地に直送される場合が少

くない。併かし市場機能を持つた土地は別個に存在するので、此の場合所謂「市場」には現物の物資は集散しない。其れでも此の「市場」は立派に中心的働きを果してゐる。此の場合市場とは需要と供給の接合の機會又は接合點を意味するに止まる。かゝる場合には、商人が店舗を設けたり、商品を陳列したりする意味の場所的な「市場（いちば）」は存在してゐない。唯、營業事務所があつて電話郵便で簡單に濟ませ得てゐる。併かし、其れに拘らず、市場的作用は嚴として存在してゐる。かゝる市場的存在を全國民經濟、又は世界經濟的に見ると「取引所」現象が現はれて來る。從つて現代の都市とは、國民・世界經濟に全面的な關係を持つ取引所の所在地だと云つて差支ないかも知れない。

市場との關係から屢〻商業が都市的だと云はれる。現在、交易は商業として行はれてゐる。從つて、市場の在る所、商業的活動が旺盛である。現に、現在都市の人口を職業別にして見ると、工業人口は都市によつて其の率が非常に變化してゐるが商業人口の比率は比較的に浮動が少い。

上の表は昭和五年國勢調査による各都市の職業人口から作成したものである が、有業者人口中、商・工業人口の割合は、全國都市全體に於いては、商業三一%、工業三四%である。之れが各個の都市に就いてみると上表の樣な開きを示すが、其の內でも商業人口比率は比較的に隔差が少いに對して工業人口比率

市都た見から率比の口人業商

%	45以上	40〃	35〃	30〃	25〃	20〃	15〃	10〃	10以下
都市數	1	1	8	48	48	15	7	1	1

市都た見から率比の口人業工

%	80以上	70〃	60〃	50〃	40〃	30〃	20〃	10〃	10以下
都市數	1	—	1	7	18	52	44	7	—

は最高八〇%から最低一〇%にまで及んでゐる。商業人口は都市に於いて二五—三〇%の比率を普通とすると云へる。此の意味で商業的活動はいづれの都市にも此の比率で必在的であると云へるし、又都市的職業活動と云ひ切る事が出來るかも知れない。（農村—郡部職業人口では、全國の數字によると商業は一〇%、工業は一五%となつてゐる。）併かし單なる商業的活動は人口集團が少し大きくなると當然附隨して來るのであるから、其の意味で商業人口があると云ふ事を以つて直ちに玆で論ずる規模の都市とは云ひ切れない。商業の場合にも土地の居住者の需要に對する丈けの作用では、中心機能的とは云ひ難くなる。從つて、商業の場合に就いても全國的世界的商業活動でなければ中心的とは云へない。

經濟組織を交易の方面から見ると前述の如くであるが生產組織、經營組織の方面から見て行くと、生產經營の中樞と云ふ觀念を持つて來て都市に當て嵌める事が出來る。今日の生產經營は、所謂資本制的である。從つて商業によらず、工業によらず、いづれも資本活動の大小を以つて測定される。此の資本活動は、會社、カルテル、トラスト、コンツェルンの形式になつて現はれる。いづれも資本支配の形態である。從つて會社なりコンツェルンなりの中心地が、此の意味での中心機能と云へる。會社數や資本金額で之れを例證すると昭和六年の數字ではあるが、會社數が全國で六三、五四五、其の內東京に一二%、六大都市で三七%、資本金總額は全國で一、九七六、五八四（萬圓）其の內東京に三七%、六大都市で六五%、拂込資本の金額では、全國一、三七六、一〇三（萬圓）に對して東京では三七%、六大都市では六五%、積立金額が全國では、三三二、四〇八（萬圓）に對し東京は其の四五%、六大都市では七二

%、社債金額が全國で四三〇、五二四(萬圓)に對して東京は六〇・八%、六大都市では七七%に當る。又一會社當りの資本金額を見るに全國では三一(萬圓)であるに對して東京—九〇、大阪—四四、京都—一四、名古屋—一七、神戸—三七、横濱—三五(萬圓)となる。之れによつて見ると事業經營の中心勢力たる會社が如何に大都市に集中し、又會社の規模が大都市に於いて如何に大きいかを明瞭に物語つてゐる。

之れと同じ事は銀行に就いても云へよう。更に吾々は金融資本の時代と云ふ事を屢〻云ふ。現代の經濟機構の支配は從つて金融資本的支配となるが故に、吾々は現代經濟の中樞を金融資本の所在、卽ち其の活動の根源に求めれば現代の都市の本質に直面する理である。煩雜になるが故に此の種の數字の重複を避けるが、斯くの如くして、ロムバァド・ストリート、ウォール・ストリート、丸の內と云ふ名稱が各〻ロンドン、紐育、東京の代名詞となつてゐる事は誰でも知つてゐる。

斯くの如くして、經濟上の組織から見れば都市の機能は上述の如く產業的經濟的活動の組織化卽ち其の整頓統合に在る。若し經濟上の意味で、然かも社會的關係の中心としての都市を觀念しようとするならば、此の方法に據らざるを得ない。反之、なほ別の經濟的な觀點から都市の本質を把握しようとする試みがある。其れは都市の產業活動の特殊性を標識にするもので、都市が非農業的な土地である事は明白である。其れ故、都市とは農產物卽ち必要なる農業的食用物資を他の土地から何等かの方法で移入する事に依存してゐる地域團體である(ゾムバルト)。卽ち其の土地在住者の生活上必要な食料品竝びに農產物原料が自分の土地で生產されないで、他の土地から其の供給を受ける。之れも確かに都市の一特質である。此の點では一國又は世界產業の地方的分布が行はれてゐる。都市は幾許の人々が集る事が出來るかと云ふ事は、一社會內で全人口中どれ程の部分が農業に從事しないで濟むかと云ふ事によつて回答が得られる。假りに一國の人口をP量とすれば、其の必要な農業生產物X量を生產するに必要な人口a量を控除した殘餘の人口b量が都會的人口となり得る數字である。故に農業生產力が增大してa量が減少すれば、之れに應じてb量を增大する。a量の減少は所謂農民離村の現象であるが、農業生產力增大に伴ふ此の離村現象は決して憂ふ可きものでない。

扨、一國の場合はさうであるが、若し或る特定國の農業生產物が他國の生產に依據し得る樣な場合になると其の國の農業人口は更に激減する。そして其れ丈け都會的人口の潛在的分子が增加する。昔、英國でロンドンの將來人口を豫測した者があつた(Sir William Petty)。其の時、玆に述べた食料品生產との關係に留意して、前述の方法によつて將來人口を算出した。卽ち農業生產力の發展による農業人口の解放と人口增加による農產物需要の增加等を計算すれば、成程ロンドン市の人口が凡そ何年間にどの位增加し、其の限界はどうと云ふ事を豫想し得るであらう。然かるに現實には此の豫想を裏切つて非常に驚く可き程の人口集中が可能となつた。其の理由は何故か。卽ち計算の基礎が變化して了つたからである。ペティーに於いては都市人口一人に對して一人の農民の割合で計算し、更に都市食糧の搬入は三十五哩以上の遠方からは不可能であると見た。然かるに英國々民は其の農產物を露西亞、加奈陀、亞米利加に仰ぐ樣になつたからであつて、英國全土は、極端に云へば、全く農業を營む必要が無くなつたと云

つて差支なきに到つたからである。(A. F. Weber: The Growth of Cities in the Nineteenth Century. 1899. p. 452)

前の計算に於ける必要農産物X量は、必ずしも自國で生産する必要は無い。故に其の國が外國の農業人口をa量丈け、經濟的に政治的に支配する事が出來れば、論理的には全人口P量が都會人口に移行して差支ない理である。今日、農村・農民問題が重要視されてゐるのは、かゝる國際的分業による一國產業活動の偏依を一刻も忽せにする事が出來ないとする位、國際的危機を控へてゐるからである。

其れは兎に角として、非農業的な存在としての都市の本質を定限する此の命題は、經濟的觀點のものとして成立するか。若し經濟的と云ふ言葉を、米を作る、魚を獲る、機械を造ると云ふ意味に解釋するならば、此の命題は正しいと云ふ事が出來る。併かし是等の活動は經濟と云ふよりは、寧ろ產業的と云ふ可きである。經濟的現象は、既に述べた様に此の產業的活動を全體的關係に置く仕組みとして解釋されねばならぬ。成程、前に述べた命題は、「米を作らぬ土地」とは云はないで其の必要なる「米を他からの輸入に仰ぐ土地」と解釋してゐるが故に、單なる產業的活動でなくて、其の組織に關係せしめた命題だとも云へる。それにしても、此の命題には、時代的場所的な規定を缺くと思はれる。農業的食用物資の供給を他から仰がねばならぬ土地は現代でも實に澤山ある。その全部が、此の定義によると「都市」又は「都市的」になる。逆に最近の大都市では地域の大擴張を行ふので農業活動が多分に市內に入込んで來る。爲めに農會の如き團體が市民中に成立したりする。かゝる混同及び對象の純化統一を計れない所に、此の定義の缺陷がある。爲めに、多くの人々は更に他の條件をもつて來て、之れを補正してゐる。例へば人口數の比較的多量、密度の濃淡等の補助的條件を附加する。併かし斯くの如く、幾つかの條件を竝列せしめて概念を把握せんとする方法が當らざる事は既に述べた。

故に非農業的集團の一事を以つて充分とせず、他の人口數量及び密度の濃淡等を附加する事を避けるとすれば他の方向に概念規定を求む可きである。經濟と云ふ觀點に立つならば、其して之れを單なる產業的活動から區別して、一つの組織として見るならば、非農業的と云ふ事實よりも經濟活動の中心機能を求める方が合理的である。今日の國民經濟を活動せしめてゐる最も强力な要素、卽ち資本の活動が何處に集つてゐるかと云ふ事を見るのが、都市の本質を把握する上に最も賢明である。

二

前述した經濟活動の中心地である都市が人口の巨大集團となつて現はれて來ることは事實である。東京に六百萬、大阪に三百數十萬の人口が集つてゐる。今、觀點を變へて、かく集つた人々の方から觀察してみよう。卽ち、何故、人が東京又は大阪に集つて來るのか。

元來人間は自分の生活を維持しなければならぬ。其の爲めに働く、其して働きによつて得た手段を以つて、自分の好む樣に生活を樂しむ。個々の人間の個人的境地をとつて見ると、かうした關係のものである。働く生活を勤勞生活と云ふならば、次の生活は享樂生活と云ふことが出來る。働かないで濟む人々は、享樂生活だけが生活の全部

となる。いづれにもせよ、何處かに其の生活の一定した基地を設けて生活せねばならぬ。其の基地の選擇に當つて、特定の土地が生活の二方面、卽ち勤勞と享樂との關心によつて決定される。

先づ第一に勤勞生活に基いて問題を眺めよう。人間は自己及び自分に屬する者の爲めに働いて所得を得ねばならぬ。其の爲めに職場を求める。現在、此の勤勞生活者がどの位あるかと云ふと、全國で四六%、全國都市で四三%、全國郡部で四七%となつてゐる（昭和五年國勢調査による）。之れは幼少年と老年及び女子人口の大部分を控除した數字に換算しなければならぬ。昭和五年東京市の人口は約二百萬人であつたが、其の內有業者の割合は四六・七%に當る。若し比較的に有業者の少い女子人口（此の數字も其のうち二四%だけが有業者）を除き、更に男子人口中、幼老年者を除いて計算すると、壯年男子人口中九割强の大部分が職業についてゐる事になつてゐる。從つて職業の性質及び職業上の身分には非常の相違があるが、兎に角、多くの人々が働いてゐる事になつてゐる。

從つて、都市に集合する人々は先づ第一に働く爲めに集ると云つて差支なからう。若し其の都市に働く機會（所得獲得の機會）が豐富にあれば、それ丈け都市の人口は增加する筈である。反對に、都市に於いて生活機會の提供せられるものが少くなれば其れ丈け都市の人口は停滯するか又は減少する。農村を捨てゝ都會に赴く傾向は昔からあつた。「お江戶日本橋には金が轉がつてゐる」と云ふ言葉は、都會に於ける此の生活機會の存在を暗示したものに外ならぬ。つまり建設期の江戶にふさわしい諺である。又都市人口の增加の急激な現象は、大體に於いて其の國の興隆に步調を合せてゐる。日本に於いても、日露戰後及び世界大戰後に於いて都市人口の激增を示してゐる。反對に、數年前、地方人口の上京を防止する運動が東京を中心として躍起となつて行はれた事を記憶する人も少くないであらう。卽ち「不用意に上京なさつても、東京にも職はありません」と云ふ意味のポスタァが近縣に配布され、のみならず、既に在京してゐた多數の地方人が失業の擧句、故鄕へ逆戻りをすると云ふ現象が一時的ではあつたが現はれた。卽ち、都市人口の多少が如何に其の與へる生活機會の有無多少に依存してゐるか、其の事情が斯くの如くに明白になる。

生活機會を獲得する爲めとして、然からば都市はどんな機會を提供してゐるであらうか。都市の職業的機會としては商工業、公務自由業が主として擧げられる。昭和五年の全國都市で見ると工業三三・九%、商業三一・一%、公務自由業一三・六%となつてゐる。東京大阪等の大都市を見ると、幾分此の割合が强調されて、東京市では工業三三・五%、商業三一・四%であるが、公務自由業が一四・九%に達してゐる。大阪市では工業が三七・四%、商業が三三・四%に達し、其の代り公務自由業が一〇・六%の幾分低調を示してゐる。玆に兩都市の性質が幾分違つて現はれてゐるのが面白い。若し此の意味で特殊な事例を求むるとなれば、次の數市の場合を指摘しよう。

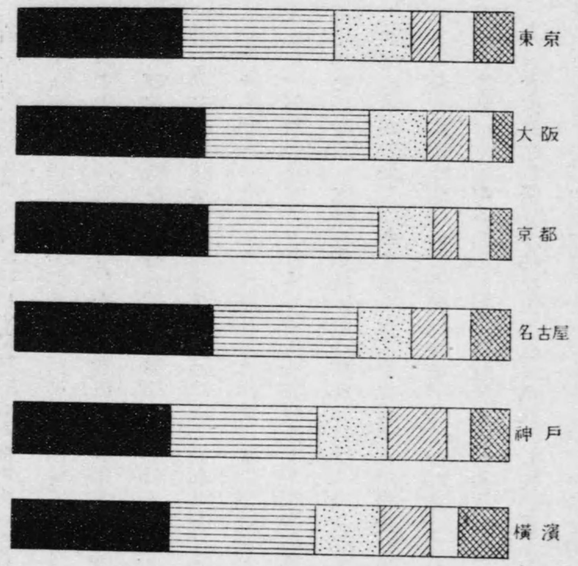
公務自由業的な都市として橫須賀、佐世保、吳及び浦和、高田、旭川、秋田、山口の諸都市を擧げる。何れも此の種の職業人口の比率が五〇%—二〇%に及んでゐる。各個の都市の特徵については說明するまでもあるまい。特に商業的都市としては尾道、別府の兩市が四割臺を示して特異的である。四割未滿三割五分以上の比率は京都、大津、岐阜、富山、宇都宮、福井、水戶、松江の八市に於いて見られる。工業的都市としては岡谷市の八割を筆頭に、

五割以上の比率には海南、瀨戸、豐橋、桐生、前橋、八王子、一宮、足利の八市があり、四割臺の都市は十八市に及んでゐる。併かし斯かる商・工業及び公務自由業的に特異性を示してゐる都市がいづれも大都市でない事は注目に値する。殊に工業人口の比率が絶對的なる都市は、岡谷、瀨戸の如きいづれも人口四萬人を超す程度のものでしかない。

交通業的都市としては同職業人口が三割五分に及ぶ福岡若松市を筆頭に、二割に垂んとする下關、一割五分の小樽、戸畑、唐津をあげ得る。一割の比率を有するものすら十市に過ぎないが、釧路、室蘭、函館、青森、横濱、尼ヶ崎、神戸、德山、直方、大牟田等、いづれも主に港灣都市である點に興味がある。鐵業都市は宇部、大牟田、飯塚の三市に限られる。

斯くの如くして個々の都市に就いては特殊な狀況を指摘し得るも、其の半面、都市其のものゝ規模が小さいと云ふ現象が附隨してゐる。試みに六大都市の職業人口の分析を示すと第五圖の如くである。

若し之れが、卽ち、商・工・公務自由業及び其の他の三要素が比較的に均衡してゐる構成が、百萬人級の都市の典型であるとしたならば、我國に於いて六大都市に次ぐ都市である福岡市の場合はどうなるであらう。北九州は一都市群地域として興味ある存在である。其の諸都市は各〻特殊な色彩を持つ。既に揭げた樣に若松、戸畑、大牟田に多少交通業的色彩が濃厚であり、大牟田、飯塚に鐵業的特色、八幡に工業都市を持ち、福岡市が其の中心となつてゐる。是等の諸都市の特色はそれぞれ特異的であるが、若し飯塚市を中心として十哩半徑の圓を描き、その內に



第五圖

入つて來る諸都市（久留米、大牟田、福岡、飯塚、直方、若松、八幡、小倉、門司、戸畑）を合計すると約百萬の人口を得、其の職業人口の比率を求めると、主な職業別比率は鐵業二・二%、工業三〇%、商業二六%、交通業一一%、公務自由業一二%となつて、各都市の特殊形相が失はれる所に興味がある。換言すれば北九州では大都市が個々に緊密な連絡を持つた地域的分業をしてゐると云つて差支ない。

扨、生活機會の獲得は、かゝる職業活動のみに限られない。大都市ではなほ、社會的には常道でない生活機會獲得の方法がある。第二は非社會的な方法で、都會生活の一特色である殘滓によつて生活する浮浪者的存在である。此の兩者はどれ程、都會的であるかは、嚴密なる統計的

數字によつて檢討する必要を持つが、複雜で變轉のめまぐるしい大都會にあつては、犯罪の機會に惠まれ、他方、非常に無駄浪費の多い都會生活樣式から「屑に據る生活」の可能性が成立する事は否定し得可くもない。

勤勞的生活機會の獲得に對して、都市に人口を集合せしむる第二の契機は、享樂生活によるものである。此の形式による純粹な典型は不勞にして生活資源を有する者、或ひは他の土地に於いて職業的所得を有し、生活丈けを都市に過ごす者の兩者となる。殊に前者は最も典型的なる者で、金利・配當生活者が充分な所得を有し都市の文化的生活を享樂せんとする場合に當る。後者は所謂不在地主的存在であつて、都市に集る事には何等勤勞的關係が無い。前者と同じ樣に消費生活の享樂の爲めに都市に集る者である。

生活を享樂すると云ふのは必ずしも道德的に非難の意味を含むものでない。例へば上級學校に勉學する學生の如きは此の部類に屬する。卽ち、地方農村の子弟で都會の學校に遊學する者は、自身又は其の父兄が他所に於いて得た所得を以つて、勉學の關心に基いて都市に遊ぶ者である。併かし既に述べた樣に、地方に於いて事業を經營し乍ら、其の所得の豐富なるに應じて都會生活の利便華美を追はんとする、所謂不在地主的存在も決して少くない。かかる場合には常に何等かの道德的非難が浴せられる。之れと同樣な場合が、所謂都會に憧れての地方人の離村である。地方農村の子女が盛んに村を捨てゝ都市に移住して了ふ事が、朝野の視聽を集めた事があつた。其の當時、多くの識者が之れを華美浮薄な風を追ふ現象として非難した。其の當否は、今玆で問題にしたくない。唯、都市に集る人々の中には、生活機會を目的にしないで、生活を樂しむ爲めに、又其れのみの理由で集つて來る者のある事を指摘すれば足りる。

扨、生活機會の獲得と生活利益の享樂との二つに就いて都市へ集合した人口を分析し得るとすると、六百萬の人口は偶然なる六百萬でなくして、經濟的社會的に一定の約束の下に立つた人口集團であると云ふ事が明かになるであらう。今日、何人と雖も生活機會を獲得するに當つて自分の思ふ勝手に其の機會を選ぶ事は出來ない。多少なりとも資本を持つてゐる者は其れによつて商賣を自ら經營する事も出來よう。資本なくとも技能又は學識の有る者は其れによつて、又身を立てる事も出來る。技能も無く學識も無い者は、それ相當の地位仕事を見出さねばならぬ。人口の多い事や社會及び生活の複雜な事は兎に角何らかの生活機會を提供する。

又、生活利益を享得するにしても、今日の都市に於いて生活利益を日光の如く、空氣の如く自由に享得する事は全然許されてゐない。凡べての利益が代價を要求する。それ故に生活利益の享得も亦、生活者の持つ生活能力、換言すれば所得に對應する事となる。富裕な子弟は充分なる學資を以つて最高學府に學ぶ事が出來るけれども、又文藝、趣味、娛樂に於いて其の求むる所を飽滿せしむるを得るが、豐かならざる者には是等の利益は禁斷の果實(このみ)である。生活利益の點に於いてすら、かくの如く經濟的社會的に規定されてゐる。否、單に商業的なサァヴィスだけが代價を要求するのではない。自由財たる可き空氣も日光も都會に於いては代價を要求する。淸澄な空氣、明朗な日光は、現代の大都市にあつては中〻得難い貴重財である。是等について良好な條件を持つた土地及び家屋は共に非常に高價である。日光及び空氣を求めに會〻都市を逃れ大自然の懷に飛び込まんとすると、其の場合にも代價を支

拂はねばならぬ、交通費が其れである。又優良小學校の附近の家屋の賃料が他所よりも高いと云ふ現象もある。

斯くの如く見ると、現代の大都市に集つてゐる人々は、生きる爲めにも、生活を樂しむ爲めにも、社會的經濟的約束に縛られねばならぬ。六百萬の人口は、此の約束に縛られて成立した姿なのである。富豪が居る、ルンペンが居る。遊蕩者がゐる、苦學生がゐる。重役がゐる、勞働者がゐる。藝術家がゐる、學者がゐる。政治家がゐる、勤人がゐる、給仕がゐる、女事務員がゐる。マネキンがゐる、藝者、女給がゐる、賣春婦がゐる。いづれの人間も皆、此の社會的經濟的約束に縛られて生活をしてゐる人々である。緒論で「六百萬の人口は、單に一人の人間の六百萬倍ではない」と云つたのは此の理由に基いてゐる。都市經濟理論が都市問題に對して必要なのは、玆である。密集的な地域に自然の恩澤から隔離されて生活してゐる市民を眺めた時、何人も彼等に良き空氣と充分なる日光とを與へたいと思ふであらう。實に都市の外側には廣い原野や崇高な山嶽、渺々たる海洋がある。併かし其處に出て限りなき自然の榮光に浴する者は限られてゐる。國立公園は成程必要である、併かし果して國民の何割が國立公園を充分に利用出來るか。都市々民の保健問題を考へる時、保健必要の差し迫つてゐる社會層は、如何なる經濟的社會的約束に縛られてゐるか、之れを直視しない事には保健問題の解決は困難であらう。都市を遠く離れた幽邃の大公園より、塵埃に綠を失つた樹木の疎にも有る市内の小公園の方が彼等にとつて最も利用價値の多い休息所となる事がある。

假りに都市人口の六百萬人がいづれも均等同質の分子的存在であるならば、其處に起る問題の處理は簡單である。否、若しさうであつたならば恐らく問題らしい問題は起るまい。否、更に一歩を進めて、均等同質のものとして集め得るならば、恐らく六百萬の人口は一都市に集中しないであらう。更に最後の斷案を下すならば均等同質の分子として六百萬の人口は集める事が不可能であると云へる。社會的經濟的に組合はされてゐればこそ六百萬なのであり、又此の組合せに基いてゐればこそ、六百萬の人口を持つ大都市を如何に非難し排斥した所で、さうは簡單に大都市の解消を實現し得ないのである。

現代の大都市は、現代の社會・經濟的約束を基底にして成立してゐる。其の成立に於いて數百萬の人口を抱擁してゐる。若し此の數百萬の人口を分散し此の巨大なる人口集團を解消せしめんと欲するならば、凡べてを此の基底から解放せねばならぬ。現在の社會・經濟的呪縛から解放せしめねばならぬ。問題の解決を計るものは、此の現狀を直視しなければならぬ。然らずして徒らに遠大の理想を追へば荒唐無稽に終る。重ねて云ふならば、現代の大都市に集る巨大な人口集團は、集る可き因緣があつて集つてゐるものである。其の因緣とは、現代の社會・經濟的約束に規定された、市民の運命である。

三

都市が人口を集合せしむるに當つて生活機會及び生活利益の提供を以つてすると云ふ理論からして、都市と都市人口との間に其の經濟力を中心としての關係が成立する。玆では此の問題を取扱つて見る。此の問題は著者に於い

てもなほ未完成のものである。從つて、都市經濟論中最も重要な命題と思はれるも、玆に說述する所が未だ不充分なる點あるも諒とせられたい。

都市に集る人々の側から觀察して、生活機會の獲得及び生活利益の享得の二點を契機としてゐるとすれば、是等の人々を養ふ丈けの經濟力が其の都市に存在する事を必要とする。アメリカ中部平原に發達した都市に就いて巧みに描迹された都市發生史がある。其の大意を傳へてみよう。(A. W. Small and Vnicent: An Introduction to the Study of Society.—Natural History of a Society. 1894)

人跡のない處女地に一組の夫婦が開拓者として移住する。此の開拓者は母國(舊社會)から農具、家畜、日用品等を持參した以外に、農耕、炊事、製作、其の他の知識技術を傳承して來てゐる。開墾がはじまる。勞々辛苦の生活である。畑、菜園をつくる、牧舍を設ける、小屋を建てる。播種、除草、施肥、刈入れ、脫穀、製粉等の農事の外、二人でやらねばならぬ仕事は多い。併かし收穫が豐富になり前途が有望に思はれるので遠く離れた町に遙々出掛けて行つて若者を雇傭して來る。此の町との連絡によつて、農場製品を搬出して賣却し工業製品其の他を購入して來る。農場が盛大になつて移住者が殖える。部落となり村となり町となり市となる。此の發展の過程中に於いて農產物許りでなく、石炭が採掘されたり、木材が產出されたりする。何と云つても著しい刺戟は土地の將來性を見通して外部からの投資が行はれた事である。其れが土地の開發と共に町の發達のテムポを急激化する刺戟になる。

以上の簡單な記述で、此の土地と之れが養ふ人口に就いて見ると、先づ第一に豐饒な土地と開拓者の持つてゐた生產用具とが注目されねばならぬ。更に彼等は、第一期の生產が完了するまで生命を維持するに足る食料を持つてゐた。卽ち彼等は最惡の場合にも、直ちに餓死する事から逃れる丈けの用意があつた。此の用意が彼等をして土地に先づ落著かせた契機であり、その後に於いて定住を可能ならしめたのは、彼等の持つてゐた資本(生產用具)と土地力とである。若し彼等が最初に用意した補給的食料の量が多かつたならばもつと多勢の人間が其の土地に落著き得たであらう。併かし此の場合は、資本と勞働と土地との組合せに於いて生產力が增大し、家族二人以上の生計を維持する事が可能になつて、始めて雇人が雇傭され、勞働力の增加、資本の充實は更に生產力を發展せしめて、開拓者家族の人口增加を許す。此の土地の有利な狀況が知れて他の移民が來る樣になるが、彼等の場合も、最初は第一の開拓者と全然同じ事情に在る。

扨、此の關係からして、此の土地では經濟生活、生產活動に著手する以前には、(一)人口を養ふ可き既存の生活資料の數量が土地に生活す可き人口數を決定する。生產活動に從事してからは、右開拓者の場合では、(二)土地の生產力が人口數を決定した。次いで(三)此の生產餘剩を勞働及び資本へ轉化して、農場の擴大により再びより大なる收穫と共により大なる人口が養へる。此の點に於いては、土地生產力と資本及び勞働の組合せが、人口數を決定する事になる。更に換言すれば土地生產力は、此の過程に於いては資本化されるので(餘剩が資本化されて雇人を雇傭したり、農具の改良となつたりする結果)、資本量又は資本たる可き富の量が人口量を決定して來る。

第二の段階では農業以外の產業活動が開始せられるに到るが、此の場合は、次の如き經過をとる。(一)最初は

農場の餘剩を以つて、他所から購入して來たものを、(二)次には、其の餘剩で、土地の資源を開發したり、または職人を雇つたりして其の土地で生産せしめる。此の場合、餘剩の數量丈け、其の土地に人間を增加せしむる事となり、再び餘剩産物が資本化されて來る。前述の事例では最初の開拓者が鍛冶屋を經營する事となる。此の場合鍛冶に從事する人口丈けが新しく土地に增加した事になる。若し他の生産活動にも此の過程が及べば、それ丈け人口は增加する。いづれの場合にも、生活資料の餘裕又は資本の增加が人口量の增加を決定してゐる。

次に重要なのは、前に述べた、舊い社會からの投資である。此の新しい資本は、土地の生産から造出されたものでない。土地の埋藏資源を目當てに投下されたものであるが、其の資源は未だ充分に價値を實現されてゐない限り、資本は全然、外部から來入したもので、其の額の大小に應じて此の土地の人口を急激に增加せしめる（此の力は間接には、資本を招來した土地の資源と云ふ事になるが）。之れに反して、從來の農耕による餘剩收益の資本化は、飽くまでも現實化された資源に外ならぬ。外部の投資が其の土地の發展に就いて持つ重要な意義は特に說明を加へないでも充分吾々の周圍に日常、見聞する所である。

此の外部の投資に匹敵すべきものは、非經濟的關係に於いての外部資金の來入である。例へば、國費による官公署の創設、學校の設立等。前者は外部の資金によつて大なり小なりの役所公署が出來て、所謂公務自由業者の人口を增加せしめる。之れに支拂ふ經費の財源は（其の土地の者も租稅公課の形式で一小部分を負擔するとしても）全體的には外部から吸收されたものである。學校の如きも、地方的關係に止まる小學校なぞの場合は別として、高等教育機關となると、他の地方の人口を吸收し、其の人口が支拂ふ額丈けは、其の土地の力によらずに新たな人口を增加せしむる。

斯くの如きが、都市が人口を支持する經濟力なのであるが、今其の性質に就いて考察すると、(一)外部から導入された富、(二)内部の資源開發による富の兩者に區別する事が出來る。第一の富には既に述べた樣に、租稅公課等によつて他の土地より吸收されて、然かも此の土地に放出される富、又は學生、觀光旅客乃至は不在地主等の費消する富が之れに當り、出稼人の送金も同じ性質である。第二の富は、土地に於ける生産の餘剩收益、即ち資源價値の實現、富の增加に該當するものである。此の兩者に對して、前述の投資の如きは經濟的關係に於いて土地資源を目當てにするものである限り、兩者の中間に置かれる可く、又土地資源に直接關係のない場合の投資、例へば、資源又は勞働力とは無關係に工場を建設するが如き場合には、第一のものに屬する。對外商業による利益も第一種に屬する。蓋し其の純收益は、それ丈け其の土地の富を增加せしめ、然かも其の源泉が外部に在るからである。

之れと反對の場合には人口量に對して消極的作用を爲す。即ち外國への投資、送金、留學、旅行等の如きは直接的には、其の土地の人口量に對して消極的な效果を及ぼす。

扨、是等の關係に基いて、如何なる事情に因るにせよ、都市が人口を集合せしむるには、此の經濟力の存在する事が先決要件である事を知つた。そこで、都市經濟の中樞理論は、此の經濟力の分析解剖でなければならぬ。具體的に云ふならば、

第五節　現代都市の經濟理論

（一）其の都市にどれ丈けの富が在るか。
（二）其の富が如何なる徑路を以つて都市に存在してゐるか。
（三）其の富が如何なる方向に分割配置されてゐるか。
（四）此の富によつて如何なる人口が如何に養はれ、利益を得てゐるか。
（五）其の富が集り、且つ散じ、再び集る過程に一定の法則が在るかどうか。

是等の諸點を明かにする事が出來れば、都市經濟の根本問題を究明し得たものと云へよう。卽ち都市經濟學と云ふ事を云ひ得るならば、都市經濟學の根本命題は、此の現象に對する法則性の問題であらう。

然からば、斯かる問題を研究する方法はどうか。今假りに學校に就いて見よう。既に述べた樣に現在、都市は學藝の中心でもあり、從つて高級の教育機關を充分に備へてゐる。此の機關の利用者は、其の性質上、其の都市の在住者にのみ限られないで全國的な利用者を持つ。其處で、學校の經費を假りに授業料を以つて支辨するものとし、一〇〇の經費に對して授業料一〇〇とすれば、假りに地方學生が四割を占めるとすると、學校を維持する經費中、四〇%丈けは地方の富の流入による事となる。若し關係を單純化して、此の經費が全部人件費となるとすれば、學校の教職員中十分の四は地方の所得によつて養はれてゐる事となる。此の場合、此の地方よりの富の流入が增大すればする程、之れによつて養はれる人間は增加し、從つて比率が六〇―四〇でなくなつて來る。他の條件に變化がなければ、都市の人口がそれ丈け增加する事になる。所が地方の所得によつて養はれる人々が得た所得は、生活の

爲めに、此の都市に於いて放出される。其處で彼等の衣食住に對して具體的に配給する人々が生活する事となる。再び他の複雜な條件を考へないと、地方人の學費は教職員の一部と更に彼等に衣食住を給付する營業者の一群とを扶持する事となる。反之、都市內部の學生の學費によつて養はれる部分は、之れを再び都市に放出する事によつて、循環する丈けであつて何物も增加せぬ。最も單純な場合を豫想して、教職員に物資を配給する營業者が同時に子弟を入學せしめて學資を支拂ふものとすれば、此の循環過程は最も明瞭になる。都市の住民に其れ丈けの富力、つまり學資があれば、假りに子弟を學校に送らないとしても、何等かの形式で其の富力に應じた丈けの人口を都市內に扶持してゐる筈であるから、外部から富の或る量が流入する場合とは性質が全然異つてゐる。

又、地方所得によつて生活する教職員――從つて物資を給付する營業者達も、その給付する物資を地方から購入してゐるとなると、再び地方より流入した富が、全部乃至は一部分丈け流出して、玆に循環現象を起すことになる。併かし、此の循環現象があつても、地方所得が一度流入すると、それ丈け、都市人口の增加を招來する事情には變化が無い。

斯くの如き富及び所得循環の徑路を、各方面に就いて明かにし精密に調査して行けば、自ら何等かの法則を見出し得るのではなからうかと思ふ。其の爲めには充分なる統計的調査が必要であり、且つ試作としては比較的に小規模な且つ自立的な都會に就いて著手するのが賢明である。

要するに、都市は人口を集中せしめる半面に、之れに該當する經濟力を持つ事になる。此の經濟力が經濟的關係

に於ける都市の本質に繋がる。社會經濟の組織に於いて中樞的な都市は、其の經濟力に於いても最も强力なものとなる。此の强力な經濟力に養はれ、又は對應する所の人口は、當然巨大となる。現代の都市現象はどこ迄も此の社會・經濟的制約の上に立つ。

第二章　現代の典型的大都市

第一節　都市の發展

現代に於ける都市の勃興と其の發展は確かに驚異の的となつてゐる。前に揭げた樣に人口二百五十萬を超す都市の數は世界中でも必ずしも多くはないが、一都市の人口が五百萬八百萬を算へ更に千萬にも達するの勢を示してゐる事に對して何人も驚きの眼を向けるであらう。東京に於ける約六百萬の人口が、人口量として何を意味するか、之れを調ぶれば、先づ第一に內地都市人口の十分の三卽ち約三割が東京市民である。之れは昭和十年の國勢調査の數字であり、「東京市」市民の數丈けであつて附近の準市民は之れに算入してない。準東京市民の數字を加ふれば更に大となる。兎に角それでも內地人口中約十二人中一人の割で東京市民となる。外國都市の狀況は如何であらう。英國では十人中の一人がロンドンに、獨逸では十六人中の一人が伯林に、佛蘭西では十四・五人中の一人が巴里に、北米合衆國では、十八人中の一人が紐育市に住んでゐる割合を示すからして、是等の先進國に於いては內地人口の十乃至二十人中の一人と云ふ割合で各首都に生活してゐる理である。之れによつて數百萬の人口を持つた現代都市

の巨大さが一應理解し得たであらう。

扨、かゝる驚異すべき現代都市の發展の過程はどうであつたか。現代都市の發達を非常に古く遡らしめる必要は無いであらう。東京を江戸時代にまで遡及せしめる事は、研究の價値が無いではないが、現代東京の發達を知る上には其處まで行く必要がない。然かも統計的數字的に頗る危險が多い。吾々は高々、百年以後の傾向を取扱ふを以つて充分とする。百年と云へば既に可なりの變化を示してゐる。勿論、國の新舊によつて甚しく異るが、例へば、シカゴ市の如き今日でこそ三百三十七萬（一九三〇年）の人口に及んでゐるが約百年前の一八三七年最初の市勢調査では四千百七十人の人口しか無かつた。ボストン市、ニューヨーク市は北米では比較的に早く開けてはゐたが、其れでもボストン市は現在の七十八萬人に對して一八四六年には二萬四千人、ニューヨーク市は現在六百九十三萬に對して一八〇〇年の調査では六萬四百八十九人を示してゐるに過ぎない。反之、舊文明國ではいづれも相當な人口數が早くから示されてゐる。例へば、ロンドン、巴里の兩市の如きは其れで、現在の人口が各〻四百三十九萬、二百八十九萬、（各一九三一年）であるに對して、十九世紀の初葉に兩市の人口は既に八十六萬、六十七萬に達してゐた。伯林は都市の歴史に於いて比較的に新しいものではあるが（十七世紀初葉の人口約二萬）、一八〇四年には十八萬の人口を持つてゐた。我國でも、昔の人口數字は信用を置く事が出來ないが、江戸の人口が享保十六年（一七三一年）に五十六萬（但し、町人丈け）の數字を示し曖昧ながら、文政天保の盛時に二百萬を推測されてゐるが、要するに十八世紀に於いてロンドン、パリを凌ぐ人口の在つた事は認めていゝと思はれてゐる。明治十年（一八七七年）には五十

八萬と計算されてゐる。

要するに古く文化の開けた國と新開國との間には以上の如き相違があつて、此の點については何人も異論はない。此の都市發展の傾向を示す爲めには大體左の方法を採る。

（一）都鄙人口比率の躍進的變化、卽ち一國全人口中に於ける都鄙人口の割合が急激に都市人口の優勢に變化しつゝある數字で、少し古いけれどもA・F・ウェーバァと云ふ人の研究によると、歐洲及び米國の都市人口（一萬人以上の都市についての人口）の全人口に對する割合が歴史的に如何に躍進したかは上の如くである。最後の最近人口統計は增補した部分でウェーバァによる數字は一八九〇年迄で終つてゐる。

年代別都鄙人口比率	1800	1850	1890	1926–1931
イングランドウエールス	22.2	39	62	73
スコットランド	17	33	49	59
ベルギー	14	21	35	42*
オランダ	29	28	39	64
北米合衆國	4	12	27.5	48
フランス	4.5	14.5	26	38
デンマーク	11	9	24	37
アイルランド	8	10	18	22† 43‡
ノールウェー	3.5	6	17	23
スウキス	4	7	17	30
ロシア	4	6	6	9	—

各國都市人口比率

＊1920　†アイルランド自由國　‡北部アイルランド

我國に於ける數字は、國勢調査を基礎として計算すれば一九二〇年に一八％であつたものが一九三五年には三二・七％に達してゐる。其の以前の數字は嚴正を缺くが、明治三十一年（一八九八年）に於ける人口二萬五千以上の都市の人口は、總人口に對して一三％にしか當らない。斯くの如く、十九世紀以來殊に

二十世紀に近く、都市人口の著しい躍進があり、全國總人口に對する比率を增大しつゝある。此の方法と同系の關係にある方法は、一國の增加人口中、都市で何人、農村で何人增加したかと云ふ事を算出する方法で、之れによると例へば大正九年から昭和五年迄の間に增加した我國人口は八百五十萬に垂んとするが其の九割九分が人口一萬人以上の市町村に吸收されてゐる。かゝる方法で都市人口と農村人口との增加率を對照して都市發展を知るも一方法である。

（二）次に都市發展の傾向を示すものは、人口數階級別による都市發展の傾向である。都市人口の增大は如何なる都市に於いて最も顯著であるか、例へば一般に中小の都市が新しく發生し、之れに依つて都市人口の增加する場合もある。此の際には、全國の都市總數が增加する。次には、從來の、大・中都市が人口益〻集中して、其の增大を致し、爲めに都市人口の增加を來す場合があり、此の際には、都市總數に增加を來さぬ。時によると、大都市附近の中・小都市を併合する事によつて都市の總數は逆に減少する事がある。

今、此の方法によつて現代の都市發展を觀察すると、前記の我國の例を以つて云へば、內地全人口一、〇〇〇に對し明治三十一年より大正十四年に到る迄の期間に、十萬以上の都市人口は七七‰より一四六・三‰に增加し五萬以上十萬未滿の都市人口は一七‰より五七・七‰に二萬以上五萬未滿の都市人口は三八・五‰より七四・三‰に變化してゐる。從つて、此の比率中、最大の增加を示してゐるのは十萬以上が一・九倍、五萬以上十萬未滿が三・四倍であつて、二萬以上五萬未滿は一・九倍となつてゐる。一萬以上二萬未滿の人口集團は約二倍に增加してゐるが、一萬以下のものは漸く增加率が少く、五千以下に於いては遂に比率の減少を見せてゐる。外國都市の例を以つて云ふと、米國都市の一八九〇年以降一九三〇年に至る期間の全人口に對する階級別都市人口の比率の變化は上表の如くである。

人口數別都市	1930	1921	1910	1900	1890
1,000,000+	12.3	9.6	9.2	8.5	5.8
500,000—1,000,000	4.7	5.9	3.3	2.2	1.3
250,000—500,000	6.5	4.3	4.3	3.8	3.9
100,000—250,000	6.1	6.2	5.3	4.3	4.4
50,000—100,000	5.3	5.0	4.5	3.6	3.2
25,000— 50,000	5.2	4.8	4.4	3.7	3.6
10,000— 25,000	7.4	6.6	6.0	5.7	5.4
5,000— 10,000	4.8	4.7	4.6	4.2	3.8
2,500— 5,000	3.8	4.3	4.2	4.1	4.0
全都市人口比率	56.2	51.4	45.8	40.0	35.4

米國都市人口比率の增加(Gist and Halbert, p. 42)

に（其の間、全人口の增加約九五%の增加を無視してはならぬ）中・小都市の人口率は大した變化を見せてゐない。百萬未滿五十萬以上の都市人口が一・三%より四・七%に增大した事は頗る顯著な變化であり、更に百萬以上の都市が五・八から一二・三に迄、二

人口數別都市	1920—1930			1910—1920		
	都市數	人口增加率	人口の減少都市數	都市數	人口增加率	人口の減少都市數
1,000,000+	4	24.1		3	19.3	
500,000+	8	21.8		5	20.0	
250,000+	13	15.4		11	34.9	
100,000+	43	20.2	4	31	22.3	
50,000+	77	23.0	12	59	31.0	2
25,000+	142	26.3	9	120	26.5	8
15,000+	210	24.0	32	154	29.4	15
10,000+	263	26.2	45	222	23.2	32
5,000+	712	25.3	143	601	21.6	90
2,500+	1,238	25.0	287	1,048	22.6	246
全市部	2,710	23.1	532	2,254	24.5	393
非市部		8.8			6.8	

米國都市人口增加比率 (Gist and Halbert, p. 41)

倍の變化を示してゐる。次に、之れに對照すべき別表を揭ぐれば前表（前頁下段）の通りである。

之れによると一九一〇―二〇年と二〇―三〇年の兩期の變化に就いて一萬五千以下の人口集團及び二萬五千以上五萬以下の都市には著しい變化が無いが一萬五千以上二萬五千級の都市及び五萬―十萬級の都市、二十五萬―五十萬級の都市には人口增加率の激減が見られる。反之、百萬以上の都市の增加率は頗る著しい。

是等の數字によつて吾々は現代の都市發展の傾向として大都市現象を明瞭にする事が出來ると思ふ。此の傾向は更に次の數項の說明によつてなほ判然とするであらう。

（三）典型的都市の發展に關する統計　現代に於ける都市の發展は、單に一般普通の都市の增大を指すのでなくて寧ろ主として大都市の發展を意味してゐるものゝ如くである。卽ち現代都市發展は大都市の發展である。從つて前述した考察に基いて現代の典型的な大都市の發展を專ら闡明する事によつて、都市發展の現代的特徵を示す方法がある。玆に論ずるのは其れであつて、從つて、先づ第一に大都市とは何かと云ふ事が問題になる。何處からが「大」都市であるか。我國行政法でも、人口三萬から市制を施行してゐる。他方に數百萬の人口集團がある。兩者を同列に取扱ふ事の出來ない事は旣に述べた通りである。我國では別に此の廣い幅を持つ都市の間に著しい區別を設けない。唯、所謂六大都市と云ふ名稱を以つて東京、大阪、京都、名古屋、橫濱、神戶の六市を區別し、行政上でも「區制」を認める事等によつて他の都市と取扱を別にし、又「特別市制」なるものを問題にしてゐる。此の六大都市の人口を見ると東京市の六百萬と橫濱市の七十六萬とでは非常な相違がある。所が六大都市を除くと、之れに續く都市は急に小さくなつてしまふのである。廣島、福岡の兩市が其れで僅かに三十萬人級である。其處で問題は此の三十萬人級の都市と七十萬人級の都市と二・三百萬人級の都市と、六百萬人以上の都市との相違、區別はどうかと云ふ事になる。此の問題は、要するに斯かる人口的相違が、實際生活の組織及び特質竝びに便益の上にどんな本質的の相違を伴ふかによつて決定するものである。

扨、同じ市制の下に斯かる相違があるので、勢ひ大都市、中都市、小都市と云ふ樣になり、又市、町、村と云ふ樣にもなる。通念的には英語のシティー、タウン、ヴィレッジ等に該當するものである。米國では、人口集團の粗密を基底として、オープンカントリー、ハムレット、ヴィレッジ、タウン、シティー、メトロポリスと順に呼んでゐる。獨逸では田舍町、小都市、中都市、大都市と區別して二千―五千、五千―二萬、二萬―十萬、十萬以上の諸階級に當てゝゐる。東京市政調査會が編纂する都市年鑑の日本都市一覽圖では二十萬以上、十萬以上、十萬以下の市及び人口二萬以上にして都市計畫法適用の町村等を標示してゐる。從つて、いづれに於いても人口十萬乃至二十萬を以つて大都市の標準としてゐる。併かし本論では此の標準で困る事は前述の如くである。十萬二十萬と數百萬の違ひは、決して數量の差に止まらぬのである。故に二十萬級の都市を大都市と呼ぶと、百萬級の都市は更に區別して、巨大都市或ひは過大都市と云ふ。過大都市と云ふ名稱には、此の現象に對する非難の意味が含まれてゐる。更に世界都市の名稱がある。世界都市とは世界的國際的關係に立つ都市であるが故に單に二十萬人級の大都市ではない。かゝる都市としての資格は百萬人級を標準にする事が出來る。獨逸では、此の巨大都市を稱して百萬都市（ミリオーネンシュタット）

と呼んでゐる。

現代都市の典型的代表は此のミリオーネンーシュタットにある。其れ故、今、此の階級の都市の發展を檢討する事は、現代都市の發展を說明する手段となる。先づ我國に於ける「大都市」として東京、大阪に例をとるならば、上の様な發展を示してゐる。

之れによると略〻毎十年の人口增加率は、

	明二一—三一	三一—四一	四一—大九	大九—昭五
東京 %	九	一三	一〇六	四八
大阪 %	八五	四九	四四	三八

の傾向を示してゐる。此の數字はいづれも最近に於ける市域擴張による面積についての人口であり、從つて當時では未だ東京市又は大阪市ならざりし土地に於ける人口も含んだ數字である。大正九年以降の國勢調査の數字を以つて、兩大都市と全都市總數に於ける兩者の比率を示せば次表の如くである。（次頁上段の表）。

	東京		大阪	
	實數	指數	實數	指數
明治21年	1,313,299	100	442,658	100
31年	1,440,121	109	* 821,235	185
41年	1,626,103	124	1,226,647	277
大正9年	* 2,173,201 *3,358,597*	164 *253*	* 1,252,983 *1,768,295*	283 *399*
14年	1,995,567 *4,109,525*	152 *313*	2,114,804	478
昭和5年	2,070,913 *4,986,913*	157 *380*	2,453,573	554
10年	* 5,875,667	447	2,989,874	675

* 此の年度市域擴張，イタリックの數字は現在の市域に於ける市域擴張前の人口量卽ち當時未だ東京市，大阪市ならざりしものを含む

之れによつて見ると兩市は共に全國總數に於ける增加比率を遙かに凌いでゐる。外國の大都市に就いて見ても、ニューヨーク市は一九一〇—三〇乃至三五年迄の三期に於いて四七六萬—五六二萬—六九三萬　卽ち一八%—二三%の增加率を示し、シカゴ市は同じ年度に於いて二一八萬—二七〇萬—三三七萬となつて二三%—二五%の增加率を示す。

伯林市は歐洲大戰を含む一九一〇年—二〇年間の增加率は二%であるが、二〇—三六年に於いては二五%の增加率を示してゐる。ロンドン、パリの兩市に就いては其の數字を一應補正しないと、其の儘の數字では此の現象を示し難い事情がある。卽ちパリ市の人口は殆ど增減が無いのである。卽ち前記年代に於いて、二八九萬—二九一萬—二八九萬であつて毫も變化が無い。ロンドンでも四五二萬—四四八萬—四四〇萬（一九三一年）の實數は變化を示さぬのみならず減少してゐる。之れが何を物語るかは、昭和七年市域擴張以前の東京市の人口、卽ち、舊市内人口に就いて見ると略〻同じ傾向があるので、了解される所があらう（前の東京市人口增加率の表を參照一五〇頁）。故に行政市區域でない都會地區の人口增加率を算出すれば修正が出來る理で、合併以前の東京の規模を見るのに、舊市外の新市域を算入して推計したと同じ方法による可きである。此の方法で大ロンドン、大パリの人口增加を計算すると一九〇一、一九一一、一九二一、一九三一年に亙つて大ロンドンでは一%、三%、九・六%（但し、大ロンドンを構成する外側地區の增加率は三三—一〇—二七%の割合である）大パリでは一三—六—一三%で幾分ではあるが增加率を示してゐる。

	都市總體	東京	大阪
大正9——14年	17.13%	22%	19%
大正14—昭5年	15.90%	21%	16%
昭和5——10年	15.52%	18%	22%

かゝる諸都市が、現代の典型的都市であると云ふ事は、外國の或る學者が調べた次の事實によつても分る。卽ち

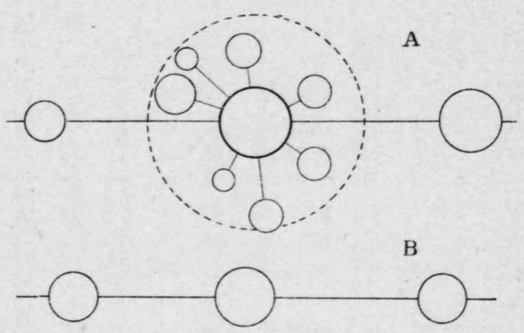
昔から現在に到る世界で有名な大都市を集めて、其の人口數に於いて順位を作ると、之れが年代の變化に從つて變化を受けた事が次表に示すが如く判然とわかる。(Gist and Halbert: Urban Society, p. 30. A. F. Weber: The Growth of Cities, p. 450)

世界大都市の順位

各都市名	1500年	1600年	1800年	1930年
ニューヨーク	—	—	—	1
ロンドン	—	9	1	2
ベルリン	—	—	—	3
パリ	—	2	1	4
フィラデルフィア	—	—	—	5
モスクワ	—	—	8	8
デトロイト	—	14	6	9
ロサンゼルス	—	—	—	10
シカゴ	—	—	—	11
ボストン	—	—	—	12
ヤンキーシティ	—	—	—	13
ネーポリ	—	—	—	19
ジェノア	—	—	—	20
ブエノスアイレス	—	—	16	21
ブダペスト	—	—	13	28
ロッテルダム	—	—	8	32
ハンブルグ	3	3	3	33
ミラノ	3	5	15	34
メルボルン	—	—	—	36
ブエノスアイレス	—	—	21	43
ゲーテボルグ	—	—	17	45
ルブノーイ	—	—	9	46
ボルドー	—	—	5	52
ニース	8	12	18	56
セビリヤ	3	2	4	64
ハセテンチセ	5	—	19	68
コペンハーゲン	—	10	14	—
シッドニー	—	—	—	—
スタヴァンゲル	—	1	—	—
ムスキー	—	6	—	—
ユンンス	—	4	—	—
(マリリヴ)	—	—	—	—

要するに、數百萬の人口を持つた都市の勃興が現代都市の典型であり、こゝに「問題的」なるものが存在してゐると云ふ事については疑問の餘地がない。

（四）大都市地方の發生による發展特色　既に現代都市發展の特徴を述べたが、其の典型的な大都市、百萬都市は、更に著しい特色を示してゐる。其れは、都市の存在が、單一でなくて、一國内の或る地點に、一つの都市群が出來る事である。此の都市群は、之れを構成する各都市間に有機的組織的關係の無い事もあらうが、大體は、巨大な都市を中心として之れに叢生するのである。第二圖にも示した様に（五頁）我國内地の中軸とも云ふべき東海道線に於いても、かうした都市群が、東京、名古屋、大阪の三地點に成立してゐるのが判然としてゐる。斯ゝる都市群を稱して大都市地方と呼ぶ。米國では之れをメトロポリタン・リージョンと呼んでゐる。何故かうした巨大な都市集團が發生するか、如何なる經過を以つて成立したか等は別に説明を加へよう。玆では、單一的都市の型態でなく、かうした都市群が現代都市現象の特色で、其の内には約一千萬人を超さうとする人口群が含まれると云ふ事態を説明するに止める。



第六圖

元來、從來の都市現象は、大都市―中・小都市―農村の形態をとつた。然かるに現在の都市現象は、都市―農村と云ふ形態をとつてゐる。圖解すれば第六圖の通りである。

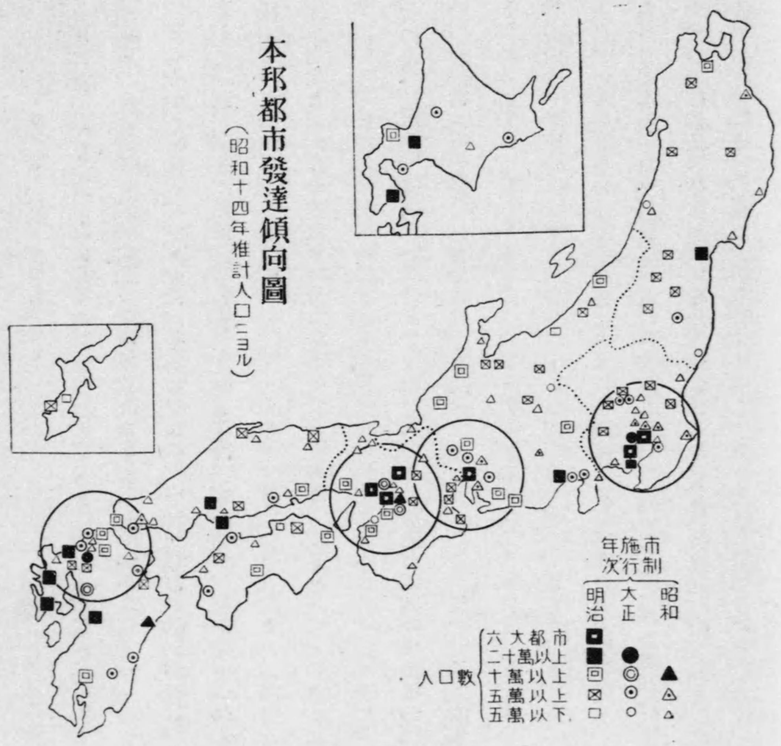
都市の成立が社會關係、從つて廣義の交通關係に基くものである事は、前に述べたが、第六圖に示す二つの都市の型は、交通組織及び機關の相違に基くものでB圖は鐵道時代の都市型でありA圖は自動車時代の都市型である。最も極端なる對照としては舊時五十三次の宿驛分布と現代の都市分布を比較をすればいゝ。斯かる大都市地方の研究は、之れが現代の都市發展の本質的な特色である事を念頭に置いてなされねばならぬ。

次に我國の都市發達の經過を少しく注意してみよう。明治初年にあつては舊來からの大藩の城下が最も人口の多い都市であると云ふ事が出來る。恐らく精確な數字は不明であらうが東京・大阪等を除けば、是等の城下町に數萬（二・三萬）の人口があつた様に思はれる。明治二十一年の數字によつて見ても此の傾向は窺ひ知る事が出來る。當時人口三萬を超える都市は其の數三十に過ぎない。其の內、東京市は既に百萬を超えてゐたが大阪市は四十四萬、京都二十七萬、名古屋・横濱・神戸の三市に十萬臺である。此の數字がどれ程正しいか否かは別として大體の傾向は知る事の出來るものと假定して其の後、本邦都市の發達がどんな風に變化したかを調べてみよう。上の表は明治二十一年、大正九年、昭和十年（後の二回は國勢調査）の各都市人口數を其の順位に整理し

	昭和10年	大正9年	明治21年		昭和10年	大正9年	明治21年
東京市	1	1	1	鹿兒島市	20	16	16
大阪市	2	2	2	和歌山市	21	18	12
名古屋市	3	5	4	✕金澤市	22	12	7
京都市	4	3	3	下關市	23	17	27
神戸市	5	4	6	岡山市	24	19	19
横濱市	6	6	5	堺市	25	25	17
廣島市	7	7	8	濱松市	26	30	86
福岡市	8	9	15	小樽市	27	23	107
*吳市	9	10	—	豊橋市	28	26	111
長崎市	10	8	20	新潟市	29	28	18
仙臺市	11	13	9	小倉市	30	33	82
函館市	12	11	13	岐阜市	31	32	38
*八幡市	13	21	—	尼ケ崎市	32	47	103
静岡市	14	15	21	✕德島市	33	27	10
札幌市	15	24	85	門司市	34	29	—
熊本市	16	14	14	大牟田市	35	34	—
*川崎市	17	31	—	高知市	36	36	29
*佐世保市	18	22	—	甲府市	37	37	44
横須賀市	19	20	28	姫路市	38	35	41

昭和10年國勢調査に於ける人口10萬以上の都市

＊は新興都市，✕は衰退都市　10萬以下の都市にして明治21年に於ける順位を示せば下の如し。數字は明治21年の順位。（ ）內は昭和10年度順位　富山11（45）　福井22（42）　高松23（48）　松山24（51）　千葉52（49）　盛岡26（61）　長野34（52）　大津45（58）　宇都宮47（47）　前橋51（46）　久留米53（41）　桐生66（50）　青森77（39）　松本80（56）　岡崎95（53）　西ノ宮119（44）〔日本都市年鑑，昭和15年用（9）による。〕



第七圖

てみたもので昭和十年の數字によつて順位をつけ、其れに他の二年次の順位を竝列してみた。之れによつて見ると明治年代前半に於いて比較的に上位にあつた都市が其の後充分な發展を見せず、反對に其の頃大した人口も無かつた土地が大正年代を經て急激に勃興し來つて昭和年代の順位では上位に進んだ經過が明瞭である。之れを圖解して見ると第七圖の如くなるが、之れによつて見ると、どの方面の都市が古いか、又どの方面の都市に發展性があるかゞ容易に明瞭となる。裏日本と表日本、東北

と東海、近畿、山陽、北九州等の對照は歴然である。然かも、既に述べた様に東京、名古屋、大阪、北九州に著しい都市群の發達せる形勢は此の圖中にも頗る顯著なものがある。

更に今一つ特徴を示すものは、是等諸都市中、中央的都市の膨脹が著しい事である。北海道の札幌は顯著な例を示し、東京、仙臺、靜岡、名古屋、大阪、廣島、福岡等の諸都市はいづれも全國的乃至は地方的中央集權の實狀に添ふて、舊來からの主要な順位を依然維持しつゞけてゐる。玆で云ふ地方と云ふのは東北、關東、中部、近畿、中國、九州と云ふ意味の大きい地方であつて、近來地方計畫（Regional Planning）と稱せられるものゝ對象となる地方である。此の地方的集中過程に乘り出す事の出來なかつた都市が先きに述べた衰退的傾向を示す諸都市（金澤、德島、富山、福井等）で積極的減少を見せないまでも相對的には其の成長率が頗る脾弱である。從つて是等は大體一縣の中心都市（其の意味での地方都市）に過ぎなくなつてゐる。反之、地方的集權的大都市でなくて躍進的な勢力を示してゐる都市は、現代的な交通・工業・軍事都市である。前掲の表中に於いて呉、函館、八幡、川崎、佐世保、小樽等の名を擧げれば大體に於いて其の性質が理解出來るであらう。

今、參考の爲めに是等の諸都市の人口增加率を示してみよう。明治四十一年を基點にして見ると（明治四十一年―大正九年―大正十四年―昭和五年―昭和十年）前述した都市の傾向に照應した增加率が見られる。例へば八幡、川崎、大牟田の三市は各期に亙つて增加率が大であり、前期（明治、大正年間）に大なる增加率を持つたものに札幌、函館、靜岡があり六大都市中では神戸が目につく。小樽も同じ經過を示すと云つてよからうが後半の增加率減少が目に立ち過ぎる。反之、後期（大正末期、昭和年代）に於いて增加率の優越を示せるものが、横須賀、佐世保、呉の三市であるのも是等都市の性質上興味が深い。仙臺は幾分增加率の減少を示し廣島も著しい躍進を示してゐない、福岡も亦同じである。六大都市では横濱は前期に弱く、大阪も亦之れに似る。名古屋は大正年間に躍進を示し、京都は漸次低調を辿るものゝ如くである。金澤、福井、德島、富山、長崎の五市にあつては其の增加率、頗る低調を極めてゐる事は表で見る如くである。此の間、福井市が後期にやや增加率を復活してゐるのに氣がつく。

各年次人口增加率	明治41年 大正9年*	大正9年 大正14年	大正14年 昭和5年	昭和5年 昭和10年
東京	33.6	22.4	21.3	18.2
大阪	2.1	19.6	16.0	21.9
名古屋	13.6	26.5	18.2	19.9
京都	33.6	17.7	15.2	13.5
神戸	59.3	9.3	11.8	15.8
横濱	7.2	2.7	18.3	13.1
廣島	12.4	23.0	13.3	14.7
福岡	16.1	15.6	19.5	16.3
呉	29.4	5.7	12.5	21.6
八幡	340.2	14.8	30.9	24.1
川崎		32.7	31.4	29.1
佐世保	−6.4	11.0	19.4	28.2
横須賀	26.6	6.7	16.9	27.2
札幌	86.9	42.0	16.7	12.8
大牟田	41.0	50.6	58.4	52.2
仙臺	21.4	21.1	15.7	12.1
靜岡	38.2	19.7	11.8	14.9
函館	64.7	13.2	20.3	6.3
小樽	18.4	24.4	7.7	6.0
金澤	16.4	7.2	6.7	4.5
德島	4.4	9.4	7.0	7.6
富山	7.6	10.7	9.3	6.5
福井	12.3	6.9	14.0	18.9
長崎	0.03	3.4	7.6	6.7

日本都市年鑑より

＊此の年次は人口調査當時の市域による。後の三期は昭和14年7月1日現在の市域による。

之れで見ると都市人口の增加率からしても本邦都市の發達の傾向が前述した所に一致してゐる事が判る。而して前章にも論じた様に（第一章第五節）現代の代表的な都市形成が大きく世界國民經濟的に規定されてゐる事、又地方の大都市が日本國民經濟發展の過程に於いて生成してゐる事等が明瞭にされる。例之、北海道の諸都市、札幌・函館・小樽の如き

は、北海道の經濟發達史に照應する過程を示してゐるのではなからうか。

殊に本邦都市の發達は地理的に見ると東京、大阪、名古屋及び北九州（それに近來は中國沿岸地方）に限られてゐる事は、最も顯著な事實である。換言すれば前に述べた樣に現代都市の特徴は東京・大阪と云ふ樣な大都市にあるので、其れ等の大都市は其れ自體が數百萬の大都會であるのみならず、周圍に幾多の大・中・小の都市を群生せしめてゐる。從つて東京といふ大都市は東京市丈けの面積に局限されてゐない事になる。昭和七年の東京市域擴張は實質的に東京的であつた隣接地域を合併して名實共に東京市としたが、今なほ其れ以外に、直接間接に幾多の地域が實質上の東京となりつゝある。從つて前に利用した、行政市域を基礎にした統計は此の意味で實質的には幾分當らざるものを含むかも知れない。東京及び大阪附近の、發達の急激な諸都市、例へば市川、川口、川崎、武藏野又は尼ケ崎、精道、西ノ宮、布施、豐中等々は統計上は獨立の都市となつてゐるけれども、事實は東京・大阪の擴大に外ならない。そこで、實際に現代の大都市はどこまで擴つてゐるかを調べる事が肝要となる。之れが次節の課題である。

第二節　大都市生活圈

——東京都市生活圈の調査——

前述した如く現代の大都市が行政區域内に止まらないで、多くの場合之れを漲溢すると、現代大都市の境域は那邊に定むる可きやが大きな問題となつて來る。卽ち、一例を擧げるならば、何處までが「東京」なのであらうか？

勿論行政地區としての「東京」は既に定まつてゐる。之れによれば東京驛を中心として半徑十哩を以つて描かれた一圓、之れが現在の「東京市」を大體に於いて包含する幾何圖形である。其れ故に直線距離にして見れば、中心より見て、東西南北、四方への距離はほゞ等しい理である。併かし、具體的に云へば、此の幾何學的圖形の外にある川崎、鶴見等の地區は、同圖形の内部にある、卽ち北東邊、北西邊——地域名で云へば、足立區花畑、板橋區赤塚練馬の地方——に比してより東京的では無からうか。更に其の土地に於ける一部分の者の生活かも知れないが、湘南地方、殊に鎌倉の如きはもう一層「東京的」ではなからうか。

玆に現代の大都市は、一體何處までが其の領域であるかの問題が生じて來る。行政上の市域の問題とても同樣である。現在「市域」であるものと、行政論的に見て當然「市域たるべきもの」との間には、充分考へねばならぬ關係がある。大東京以前の東京市は舊市域が行政上の「東京市」であつたが、之れを行政的に見て當然東京市たる可きものにする爲めに、新市域を編入して、現在の「東京市」を作り上げた。此の新市政境域と「東京的」なる地域とは、更に行政的に統一せらるる可きものであるか、否かは、行政論的にも考慮すべき問題であらう。東京府の大半を占むるに至つた東京市に對して特別市制、乃至都制案の必要が決定的に認められてゐる事に徵して分明する樣に現在の市制には、行政論的に見て其れに妥當する市域がある筈である。都市が膨脹して巨大となつた時には、從來の市制からみて地域の擴大が行政的には不適當であるかも知れない。それ故に、現在の東京市以上の地域を行政上で統一する可否能否は、唯單に、社會的經濟的文化的に東京市が現市域以上に擴大したからと云ふ理由で解決を求

める理には行かぬ。行政論上の考慮が必要となつて來る。此の場合にも、既に述べた様に現在の制度を以つてする適否と、新制度を以つてしての適否とが別途に考究されねばならぬ。

故に現在の様な大都會主義（主義と云ふものゝ一つの傾向に過ぎぬ理であるが）の時代にあつては、地方計畫又は綜合都市計畫なるものが考究されつゝある。大都市中心の地方計畫は大體一九一〇年にはじまると云はれるが、我國でも昭和五年頃から紹介されはじめて、昭和七年には大東京を中心とした半徑百キロの大圈圓を描く綜合都市計畫が發表され、又更に進んで、内務省では之れを全國に及ぼして「經濟連繫を目標に」した五大都市の地方計劃を考慮し、東京地方計劃、大阪地方計劃、名古屋地方計劃、福岡地方計劃、北九州地方計劃等が名指されたことがある。（昭和八年九月二日、時事新報）之れと關聯して行政上何等かの連絡も考慮されねばならぬ。其れ故「地方ブロックの示唆」についての議論も當然起つて來る。即ち「地方の實情は今日都市計畫を越えた地方計畫を必要として居る如く、府縣行政を更に聯結すべき地方ブロックの必要に逢著し始めた。併かしそれは單なるブロックで終らず、更に進んで地方行政體系の再吟味を督促するものとして重大なる意義を持つものと思はれる」（昭和九年五月九日、地方長官會議に關する東京朝日新聞社說）

斯くの如き事情から、今一度、與へられたる行政單位としての市、及び市域を離れて大都市の境域について論ずる事は重々必要な事であらう。以下、此の點に就いて諸方面から論及してみたい。

一

第一には玆で問題になる大都市である。何が大都市であるか、之れに就いては既に前の機會に於いて人口百萬を以つて單位となし得る程度のものを指すと述べた。此の級の都市、就中、數百萬の人口を有する都市を以つて人々は大都市、世界都市（ミリオネンシュタット、ウェルトシュタット）、又はメトロポリスと呼んでゐる。吾々が今、玆で對象とする都市も大體、かゝるものと定めたい。

此の範圍の都市を我國で嚴密に求むれば、恐らく東京、大阪の兩地方であらう。地方と云つたのは、此の場合、前者では川崎市、横濱市、後者では神戸市、阪神地方等が共に兩者の勢力範圍内に置かれてゐると考へたからである。即ち此の地域は各〻東京都市地方、大阪都市地方とも稱すべきもので、最近都市地方――シティー・リージョン――なる言葉を以つて呼ばれてゐるものに該當する。又はメトロポリタン・エリアとも呼ばれ、此の地域社會を稱してメトロポリタン・コムミュニティーとも云ふ。其處で此のシティー・リージョン又はメトロポリタン・エリアなるものは何かと云ふ事が先づ究明されねばならぬ。

是等の名稱は、市とか町とか云ふ呼稱が行政的意義をのみ、含めてゐるのに對し用ひられたものと云つて差支ない、それ故に、此の都市地方なるものゝ構成には、中心點たるべき市、又は母市と其の附近の隣接地域とが要素となつてゐる。或者は後者を名づけて、後背地（ヒンタァランド）と呼ぶ。かゝる存在を特別に注意する様になつたの

は、大都會の膨脹の結果であるには違ひないが、交通機關の發達が多大の影響を及ぼしたのを看逃してはならぬ。『メトロポリタン・コムミュニティー』の著者であるマッケンジーは、此の關係に於ける鐵道と自動車との及ぼした影響の著しい相違を指摘してゐる。卽ち、鐵道時代にあつては、全國交通網の形成に際して、都市たる可きもの の地點を決定した。併かし、此の時代にあつては、未だ、斯く決定せられた地點卽ち都市の內部的外部的の特色まで變化させるには到らなかつた。併かし、此の交通網を基準としての其の後の發展は、自動車時代に這るに及んで先きに定められた地點としての都市の形相を全然一變せしめるに到つた。どう云ふ風にかと云ふと、自動車交通の發展によつて、都市の膨脹が地域的に其の擴大を可能ならしめて、從來の地點であつた都市が其の附近に勢力の觸手を伸ばし得て、之れを都會化して來た事である。換言すると、從來の都會では、都會と其の周圍との關係は截然と「都會と田舍」であつたものが、今日では都會——郊外——半都會——田舍と云ふ樣な形態を帶びるに到つたと云ふのである。

卽ち現代大都市成立の基礎條件として近距離交通機關の發展整備が玆で問題になる理である。東京市の如く面積が五七二方粁、中心から半徑が十哩(十六粁)にも及ばんとしてゐる大地域に於いては近距離交通機關の整頓がなければ、かゝる面積的な擴張は實現が不可能である。其處で地方鐵・軌道の發達も看逃す事は出來ないが、自動車交通の驚く可き急速の進步が大都市集中の實現を可能ならしめたと云つても敢て過言ではあるまい。「鐵道が交通を獨占する性質を失ひつゝあり、之に代つて輕快で迅速な自動車が登場し、遠距離の商賣及び遊樂に利する外に尙ほ各地方・地區を糾合する作用を持つてゐる。」(Donald Davidson : The Attack on Leviathan. Regionalism and Nationalism in the United States. 1938)

斯くの如くして大都市地方形成の技術的可能性が與へられるのである。殊に所謂大都市地方の人口の集中的分散は此の段階に於いて可能になつて來る。郊外發展、大都市の地域的膨脹は低廉な近郊交通機關が用意されねば實現されない。後に述べる樣に郊外電車事業の發展と近郊自動車網の發達が注目されて來るが、東京に就いて見れば、東京市の膨脹の時代は交通機關の發展の時代に照應するもので、近郊電鐵が大正時代に、乘合自動車が昭和時代に飛躍的發展を遂げたと云つても過言ではない。

同時に都市に於ける「道路」の意義が再び其の重要性を復活した。幼稚な交通機關しか無かつた昔に於いては、道路は主要なる交通施設であつた、所謂「街道」が其れを物語る。反對に各都市に就いて見ると市內道路は比較的貧弱で差支なかつた。都市其のものゝ面積が狹少であるのと動きの甚しくない時代に於いて、壯大なる道路の必要は無かつた。若しありとすれば、公用・軍用に必要な大通丈けが稍〻整然としてゐたものと云ふ事が出來よう。併かし、唯一の交通施設としての「道路」も殊に「街道」も鐵道交通時代に入ると共に其の意義を失つた。此の時代に入ると都市の散分的な形態が漸次集中化して來て、遠距離交通手段としての道路の意義は鐵道に移つて了つた。此の事は街道聚落、殊に宿驛都市の沒落によつて最も有力に物語られてゐる。鐵道時代と共に、都市は現代的集中化の第一段階に入つたと云つて差支ない。併かし既に述べた樣に都市集中の現象は都市內部に、又は其の形態に變

化を及ぼして、玆に市内交通機關の必要を生み、更に郊外發達の現象を招來するに到つた。自動車の出現は斯くして當然要求されて來たのである。併かし一度自動車交通が完成するや、再び道路交通體系の意義は復活した、市内的には、最初であるが、遠・中距離交通施設としては「街道」の意義を再生せしめたのである。(Alfred Birk : Die Straße. Ihre verkehrs-und bautechnische Entwicklung im Rahmen der Menschheitsgeschichte. 1934)

自動車なるものゝ發達を見ると、最初は、一般交通要具としては高價な、從つて一部の獨占的用途にしか供せられなかつた。之れが大衆的從つて經濟的利用機關として普く利用されるに到つたのは比較的近來の事で、其れと同時に單なる乘客用から轉じて定期的交通機關に、更に有力なる貨物運送機關として發達して來た事は看逃せない點である。之れと共に、卽ち都市の地域的擴大、都市群の成立、中心都市の勢力圏の擴大、つまり大都市集中現象と共に自動車交通は必ずしも單なる近距離運送のものと限られなくなつて來た。單に大都市又は近郊に於ける定期不定期の乘用機關たる內は、之れに關聯する道路計畫も一地方自治體內の問題に限られてゐた理である。併かし現在に於いては、全國が可なりの程度まで自動車網の普及を見てゐると云ふ事が出來る。卽ち、都市を中心とした地方的道路網は相連絡して全國的な自動車道路網となり得るのである。更に貨物運送に到つては、從來鐵道に依つたものが非常な長距離は別としても、相當な距離まで自動車運送による事を得る樣になつて、愈〻全國的な道路計畫の體系は完備せしめざるを得なくなつてゐる。百貨店の無料配達の距離が擴大した事（後出）は自動車運送の利便によるものであつた。運送上の鐵道及び自動車の利害得失は玆で問題とするべき事ではない。唯、鐵道運送の競爭者乃至は補足物として自動車交通が、殊に大都市の出現と共に重要視されて來た事は注意に値する。

今、玆に僅かばかりの數字を參考にすれば左記の通り、自動車の發達と道路の發達とは竝行してゐる。

道路及び自動車發達の趨勢

		道路全長	府縣道*	市　道	自動車數
		粁	粁	粁	輛
大正10年	實數	884,215	51,788	17,547	12,116
	※指數	100	100	100	100
昭和2年	實數	946,375	89,315	20,481	51,862
	指數	107	172	111	428
昭和6年	實數	951,490	100,422	30,368	97,256
	指數	108	193	173	803
昭和11年	實數	956,994	110,461	46,999	
	指數	108	215	267	

＊ 地方費道を含む。※ 大正10年を100とする指數。（日本都市年鑑及び自動車年鑑より作成）

かくして、大都會を中心とした自動車交通網の發達と、併せて、之れと同意義を有する都市近郊軌道交通機關の發達について見るに先づ東京府關係の自動車總數を揭げると、大正七年を指數一〇〇として、次の如き增加が示される。

大正七年	一〇〇（二、〇七九輛）	同十四年	五四五		
同八年	一四七	昭和元年	六三四		
同九年	一七八	同二年	七七七		
同十年	一九七	同三年	九九一		
同十一年	二三三	同四年	一、〇八六		
同十二年	二一四	同五年	一、一三八		
同十三年	五〇七	同六年	一、一七八（二四、四九一輛）		

（一九三二年版自動車年鑑所揭警視廳調）

之れに對して乘合自動車の發達を調べると大正九年を指數一〇〇（車輪數）とすれば昭和二年には七七〇に增加してゐる（白鳥義三郎氏）東京市を中心とした乘合自動車の發達史は、大正二年四月京王電氣軌道會社の一時的連絡運轉に依るものを嚆矢とする。獨立の營業目的を以つて乘合自動車が出現

したのは大正八年三月の東京市街自動車株式會社に依る舊市内二四哩の營業運轉を最初とする。郊外に於ては同年十二月板橋自動車株式會社の三哩四分の營業線路が最も古い。之に續いて京濱乘合、葛飾乘合、代々木乘合等開通したが震災以前に於ける郊外乘合自動車の規模は未だ微弱であつた。昭和七年七月現在では郊外乘合自動車の經營主體が四五に及ぶが、其の開業年次別に之れを調査すると大正八年より大正十二年迄の間には九、同十三年より昭和二年迄には二十、同三年より七年までには十六と云ふ傾向を以つて增加して來てゐる。卽ち、關東大震災以後の著しい發展が窺はれる。(『東京市郊外に於ける交通機關の發達と人口の增加』東京市昭和三年。『大東京區域内に於ける交通機關の現勢』東京市電氣局庶務課昭和七年)

以上の營業成績發展に就いて見ると昭和二年七月現在では經營主體三三、線路亙長一六二粁强、乘客實數七、六〇八、四七二人、之に對し昭和七年新市部乘合自動車の經營主體は四四、營業線路亙長七四六・七粁、乘車人員一三六、九九五、二七五人である、右の事情から東京市交通機關乘客の機關別分布を示すと次の如くである。

	省電	郊電	市電	バス
大正八年	一一・七	八・六	七八・五	一・二
昭和三年	三一・〇	二二・〇	三九・〇	七・〇

昭和十三年五月十七日に行はれた東京市交通量調査によつて見ると此の割合は更に變化して來る。勿論其れは調査の標準が同一でないから同じ樣に取扱ふ理にはいかぬが其れでも一應は對照の參考になるであらう。之れによると

	省電	郊電	地下鐵	バス
昭和十三年(五月十七日)	三二・三二	二〇・〇九	二二・八四	二一・一〇	二二・六六

となり、バスの勢力は頗る優勢である。(東京市電氣局「調査資料」第二十卷第一號所載、『日本都市年鑑』第九卷より作成)

東京に於けるタクシーの發展を示すと次の如くである。(長尾半平「大都市交通とその對策」『都市問題』第十四卷三號)

大正十三年	同　三年	三、一三八	九、三〇〇
同十四年	同　四年	三、八二七	一〇、五〇〇
同十五年	同　五年(七月)	四、八七一	一〇、七〇〇
昭和二年		六、七四四	

(昭和七年の總數は二四、七五一、其の想定一日平均乘客は二、三二五、〇〇〇人に達す)。

次に大都市に於いて自動車交通と同樣な意義を持つものは近郊私設鐵道及び電氣軌道である。此の交通網は勿論自動車交通網と異つた機能を果してはゐるであらうが、近郊交通機關としては、先づ同一の役目のものであると云つて差支ない。之れが鐵道省の線路系統卽ち山手線、中央線、京濱櫻木町線、橫須賀線、東北京濱線(大宮線)總武船橋線(以上電車)及び湘南線(熱海、小田原線)を幹線として、多くの私設の郊外電車の系統を作り上げてゐる。此の交通網の發達も、又比較的近來のものである事が、次表によつて明白とならう。

東京近郊軌道、地方鐵道の現況(昭和六年現在)

	事業開始	營業粁	乘客數(昭和十二年度乘客數)
京濱電鐵	明三二	二九・〇	二四、八一四、二五八	四四、五〇九、〇〇〇

西武鐵道	三九	一五九・五	一二、二八九、〇〇〇	一八、三二九、三六六	
		二〇〇・四	五、四二七、〇〇〇	八、〇九五、八一九	
玉川電鐵	四〇	二二・七	二一、四二四、〇〇〇	一八、七八二、八〇二	
王子電軌	四四	一六・四	一八、〇六八、〇〇〇	一七、六六五、九七二	
京成電軌	大　一	七三・九	二七、九八六、〇〇〇	一九、一八六、四八一	
京王電軌	二	四五・八	二六、七〇九、〇〇〇	二〇、三八三、八六八	
城東電軌	六	一一・二	――	七、八七一、四〇九	
池上電軌	一一	二二・四		一三、四〇五、三二九	
武藏野鐵道	一一	六三・七	一二、二一八、〇〇〇	九、九五九、九二九	
目蒲電鐵	一二	二三・五	六九、二三六、〇〇〇	三二、五一二、九六四	
東武鐵道	一三	三八二・一	二六、四四三、〇〇〇	二三、〇六七、一二〇	
東橫電鐵	一五	二五・〇	三二、三六三、〇〇〇	一二、四五六、〇五四	
小田急鐵道	昭　二	一一〇・一	二〇、四五八、〇〇〇	一六、五〇七、七〇〇	

備考　「昭和六年度中若くは同年度現在」以上『日本都市年鑑』第三卷による。西武鐵道の欄に於いて營業粁及び乘客數の二項に二重の數字があるのは、地方鐵道及び軌道の區別によるものである。

尙ほ此の項に就いては、昭和三年迄の數字ではあるが前揭の改造社版『日本地理大系』第三卷「大東京篇」中、白鳥義三郎氏の「交通」の項を參照されたし。

以上は昭和六年の數字であるが、其の後には帝都電鐵（昭和八年）が一二・八營業粁（十二年度乘客數一二、一〇六、〇〇〇人）を以つて加つてをり、更に會社別では合併が行はれたりして多少の變化を見せてゐる。乘客數は今日では勿論增加し、前表下段に揭げた數字が其れで各〻最高約五割から三、四割の增加を示してゐる。

東京近郊の交通機關の發達（鐵・軌道）　每五ヶ年線路開設粁

三二・六	三五・六	四五・〇	七〇・〇	九・二	四〇・四	二九七・三	一七・二	五四七・三
明33	〃 38	〃 43	大 4	〃 9	〃 14	昭 5	〃 9	合計

備考　右數字は「鐵道停車場一覽」によるもの西武、武藏野、東武、同東上線、小田急、東京橫濱、帝都電鐵、目黑蒲田、池上、の諸地方鐵道、電氣軌道についての數字である。昭和九年は四月現在。

右の數字は決して最近のものではないが、此の表によつて明瞭でもある樣に、近郊の鐵・軌道は大正年間及び昭和の當初に於いて著しい發達を遂げてゐる。前記白鳥氏の調査によれば大正九年の乘客數指數一〇〇に對して二四〇の增加が昭和二年に示されてゐる。尤も、前表の營業距離の全部が東京近郊のものとは云へない。東京日日新聞社編の『日本都市大鑑』は昭和七年に對する數字として大東京關係の近郊電氣軌道の營業距離を四一三・一粁に計算してゐる。前表「交通機關發達」中の昭和五年末に於ける二九七・三粁には、同四年開通の東武本線松戸――日光間の九四・五粁が加算してある。併かし其れにも拘らず、既に述べた期間に於いて東京近郊の地方鐵道及び電氣軌道が著しく增加したのは否定する事が出來ないし、又、此の新發展が東京西南郊に於いて見られるのも周知の事實である。

斯くの如くして、大都會は其の發達と共に、周圍の隣接地へと其の觸手を延ばして行く、勿論、此の擴大は中心

から各方面に對して均等な距離に於いて行はれない。延び行く勢力の中に含まれる要素の性質と延び行く方向に所在する地域の性質とが、此の擴大過程の實際を決定する。之れは後段、交通時間距離を論ずる所で明白にならう。

以上の過程によつて郊外が出來、半都會地が出來上つた。又、從來郊外であつた所は、全く市內的になつて了つて、郊外らしい郊外は、更に外方に押しやられてしまつた。例へば大正初年の頃の大森は、立派な郊外であつた。其の昔に於いては、品川、目白、駒込附近は、郊外の名に應しいと云ふよりも、もつと田舍的の所であつたらう。本鄕駒込の邊が植木屋の地區であつた時代を知つてゐる人々すら、今日なほ現存するであらう。併かし、田園の間に散在する住宅形式と云ふものを以つて郊外とすれば、前に述べた樣に郊外と云ふものは、今日、更に一層外方に移つた。所によつて異るであらうが、現東京市の市域たる、中心より十哩半徑の周邊あたりにはじめて、現在では其れが求められるのではなからうか。加之、現在では、郊外の飛地とも稱すべきものが出來てしまつた。湘南地方に於ける、東京通勤者の住宅地域は當に其れである。

かくの如く大都市の日常生活に於ける勢力は擴大して了つた。此の日常生活上に於ける大都市の勢力の及ぶ範圍を都市勢力圈又は都市生活圈と名づける。故に大都市の境域を決定する事は、此の都市生活圈の決定に外ならぬ。從つて次には都市生活圈の實體について究明しなければならぬ。

二

行政的に區劃せられた都市に對して、其の經濟的社會的統一性を有する地域を呼ぶのに都市勢力圈又は都市生活圈なる言葉を以つてする。例へば昭和七年十月以前の舊東京市は行政的に見て統一體であるが、其の隣接市外地に於いて營まれた生活は既に、東京的であつた。故に東京の都市勢力圈又は生活圈は當時の市域より遠く外方に擴つてゐたと云つて差支ない。故に都市勢力圈又は生活圈なるものは、他の何等かの標準で別箇に定められる可きもので、其の方法を玆で論ずる理であるが、一般的に云ふと、前に述べたマッケンジーの樣に、大都市地域と商業取引地域に分けて觀察する事が出來る。「大都市地域（メトロポリタンデリア）」とは一地方人口の日常の經濟・社會活動が其の地方の共同な組織體系を通じて營まれる地域」を指し「本質的には中心都市の定期劵利用地域」であり、「水道、燈火、衞生、動力等の公益事業が共通の問題となる市街地域に相當する」。反之、商業取引地域は、都市勢力の及ぶ一段と廣範な地域に該當し「都市に隣接する地理的境域で經濟的に其の都市に附屬し、之れに對して其の都市が主要市場及び金融中心となつてゐる」地域である。商業取引の性質から、此の領域は小賣・卸賣別の勢力地域となつて現はれる。(Mckenzie: The Metropolitan Community, 1933)

確かに都市の商業的經濟的勢力は、前に述べた、大都市生活地域より遙か遠隔の地に作用する。殊に卸賣に於いて其の作用が甚大である。東北諸都鄙の商人が東京の問屋と連絡を有するが如き、其の例である。「經濟的に從屬する地域」と云ふのも必ずしも精密な概念とは云ひ得ない。考へ樣によつては全國、或ひは世界の有力なる部分が或る大都市の經濟勢力に隷屬してゐるとも思はれる場合がある。併かし一都市の經濟的勢力の作用を商業取引に因

るとして探る事は、商取引それ自體が性質上純粋なもので因子として好適なもの丈けに、此の方面に於ける研究上の精密は期し得る。此の方面で最も興味ある研究は川口丈夫氏の「都市勢力圏決定因子としての電信爲替の統計學的研究」であつた。(『大塚地理學會論文集』第一輯、昭和八年)

反之、都市生活の共通性に基く大都市地域の決定は、「都市生活」の內容を然かく簡單に解釋する事が出來ない故に、研究調査上に科學的な精密が期し難い點が頗る多い。水道電氣瓦斯衞生を共同的設備として有し、共同の問題として取扱ふ、と云ふ事は、どの程度に解釋されるべきものであるか。同一經營體の下にある場合にのみ共同的設備と云ふか、經營體は別でも、「其の地にも同じ樣に是等の問題が存在する」地域をも含むか、例へば水道の問題に就いて見れば、現在の東京市域の全部に亙つて同一經營體による上水が供給せられてゐるわけではない。東京市の場合に於いては、玉川水道の買收の如く經營者が統一される可能性があるが、現在の樣に廣い地域に亙つて都市生活が營まれる場合、上水供給の事業が全部同一經營者の手に歸するものとは、考へられない。或る經營者による水道の設備のある地域と全然此の設備のない地域が隣接する場合は兎に角として、後で法律的因子の所で同じ樣な問題について述べる樣に經營者は異つてゐるが、上水設備を持つた地域が連鎖的に存在する場合も考へられる。

社會的經濟的に日常生活を共同にすると云ふ考へ方は、明瞭の樣で、本質的には不明瞭なものを多分に含んでゐる。併かし、都市生活の境域が確かに行政區劃の內外に存在してゐる事は、疑を容れない。其處で不充分乍ら此の問題をつきつめて行かねばならない。

川口氏は都市勢力圏と云ふ名稱を用ひられ、主として商業活動を因子として之れを定められてゐるが、之れに對して矢張、大都市生活地域を示す言葉としては、都市生活圏の言葉を適當としよう。此の二つの名稱は前記マッケンジーの兩地域區別に對して最もよく適應するものと云へる。そこで、都市生活圏はどうして定めるか。之れが問題になる。

著者は、以下各項で論ずる樣な諸因子を摘出して見た。曰く定期券旅客交通量、交通等時間距離等の交通的因子、新聞市內版配達、百貨店無料配達等の社會的因子、電話卽時通話、速達便配達等の郵便・行政的因子、都市計畫法・市街地建築物取締法・借家法借地法等の法律・行政的因子等々。是等は都市生活に何等かの關係を持つてゐるもので、從つて之れを因子として、都市生活圏の決定を多少乍ら正確になし得ると思ふ。既にマッケンジーによつて指摘された諸因子も之れと相似たものがある。彼は、定期券旅客交通を注意し、更に都市に至る幹線道路に於ける自動車交通量を利用する(前揭書八五―八八頁參照)更に米國國勢調査局の一九三〇年國勢調査に際し大都市地域決定の爲めに提案された米國商務省の案による諸因子を紹介してゐる。其れによると、是等の諸因子は、電話・電力・小賣配達・定期券發行・水道・瓦斯・新聞配達・郵便配達・配電限界地域・下水・社交競技倶樂部の會員地域制限・地方不動產會社の取扱地域・集聚路線等の諸項目である。(同上、九五頁)

著者が揭げた諸項目も殆ど全部が此の中に含まれてゐる。故に大都市生活圏の決定に先づ是等の諸因子は用ひて適當のものと思つて差支あるまい。そこで嘗て慶應義塾都市問題研究會及び都市社會學專攻の學生を動員して、東

京都市生活圏の調査に就いて得た所の結果を次に紹介しよう。

三

先づ交通因子を以つてはじめる。社會は交通である、其れ故に交通上の或る特色は、之れによつて同一社會への歸屬を立證する事が出來る。其れには、先づ交通の頻繁性と交通時間の特定限界とが注目される。前者は定期券交通であり、後者は交通時間距離である。そこで此の意味の交通因子として、玆に採用されたものは、東京附近の定期券旅客の交通量と、東京驛を中心とする交通等時間距離の調査である。前者は鐵道省調査の定期券旅客に就いての「發著關係驛別旅客人員年報」（昭和七年度）によつたものである。此の調査は定期券の利用日數を一ヶ月三十日、一年三百六十日として之れによる人員の想定計算で、從つて一ヶ月定期を持つてゐるものは、其の發著關係驛の項に三〇と云ふ數字で現はれて來る事になる。此の調査を基本として、東京市に集まる（嚴密に云へば、或ひは東京市から出る者もあるが故に、東京市内各驛に發著關係のある）旅客の總數を、山の手循環線、中央線千駄ヶ谷萬世橋間、それに東方では淺草橋兩國間丈けに就いて計算した。卽ち東海道方面では、「大井町以南櫻木町、横濱線、横須賀線全部、熱海線小田原迄、」中央線方面では「大久保以西立川迄」東北京濱線（大宮線）では「赤羽以北大宮迄」東京東部にあつては「錦糸町以東千葉迄」常盤線では「三河島以東我孫子迄」竝びに以上の諸線に接續する近郊私鐵についての定期券旅客の全部を上記東京市内各驛との發著關係に於いて各驛別に調べた。

之れによると、上記東京市内の各驛（山の手循環線全驛、中央線―千駄ヶ谷萬世橋間各驛、淺草橋兩國兩驛）に對して前記各方面の諸驛（大井町以南、大久保以西、赤羽以北、錦糸町、三河島以東、竝びに是等諸線に接續する各私鐵及び山の手線諸驛に直接々續する諸近郊鐵道の各驛）と發著關係にある定期券旅客總數は昭和七年度に於いて五一、六八七、六五〇となつてゐる。此の内、東海道線筋の各驛（大井町より櫻木町、横須賀、小田原、横濱線原町田に至る各驛及び此の間に接續する私鐵の各驛）との發著關係の數が二二、六三六、八三〇に上り、全體の四三・七%に達する。中央線筋では（大久保以西立川間の各驛及び接續の私鐵各驛）一六、七四九、六七〇で全體の三二・四%、赤羽以北の京濱東北線（大宮）では、二、九五七、六五〇で全體の五・七%、總武線では（錦糸町―千葉）二、七七八、六三〇で全體の五・三%、常盤線は（三河島我孫子間）一、三三一、四四〇で二・五%、之れに前述の山の手循環線の諸驛（卽ち品川、五反田、目黒、澁谷、新宿、池袋の各驛）に直接々續する近郊私鐵による總數が五、二三三、四三〇で、之れは全體の一〇・一%に當る。此の最後の近郊私鐵による定期券旅客の數字では、新宿、品川間の西南郊地域に其の大部分が占められてゐる事は豫想通りである。

此の東京を中心として定期券旅客の發著關係驛別調査で、更に東京に於ける山の手循環線圓内（卽ち中央線一部を含む）及び兩國、淺草橋の各驛關係の總計を田町―神田間と（卽ち中心地域）其の他とに區分して調査すると面白い結果が出る。卽ち、此の圈圓及び兩國、淺草橋の一線を加へた各驛に發著關係のある總數は上記の如く五一、六八七、六五〇であるが、此の内二五、四〇二、八三〇が田町―神田間の中心區域の諸驛に關係を有するもので、其の割

合約五〇%に及ぶ。

又、之れを各方面別に調査すると、東海道沿線では一六、四〇七、九八〇が此の中心部に關係し本沿線の總數の七二・八%に當り中央線は四、五三二、一〇〇で二七%、總武線は六九四、七九〇で二五%、常盤線は五二九、〇七〇で四六・七%、大宮線は一、二七五、八四〇で四三・一%、近郊私鐵直接々續の分は一、九六三、〇五〇で三七・五%に當つてゐる。(註)

又、各方面の各驛別に見ると甚だ興味もあるがあまり複雜に過ぎるので省略する。

(註)　常盤線、東北京濱線で都心部への關係の割合が大きく出たのは赤羽—田端及び池袋間の一地帶の數字を省いた爲めであると思はれる。

此の調査の數字が次表となるが、千以下を削除して、各路線系統について驛名順に配列してみた。同一驛名括弧の分は同驛に連絡する私鐵よりの旅客數である。之れによつて山の手線循環圓（兩國、淺草橋兩驛を含む事、前述の如し）に發著關係ある各驛の勢力が示された。京濱・横須賀線で見ると、六百萬の大井が首位を占め大森五百萬弱で之れにつぎ、蒲田は四百萬で聊か下るが川崎鶴見に於いて可なり減少し（百萬强）、此の頽勢東神奈川に最も甚しく（三十萬級）横濱に於いて川崎、鶴見級に上り櫻木町は此の系統での第四位ではあるが川崎鶴見を聊か凌駕するに過ぎない（百七十八萬）。保土ケ谷の十萬臺は戸塚、大船、北鎌倉と萬位の數字を以つて漸次に著しき衰勢を加へ、鎌倉に於いて突然飛躍して四十萬臺を示し逗子之れに續いて二十萬臺にあり、田浦は再び萬位に低落して横須賀の十六

東京に集まる定期券旅客交通量

總武線		中央線		京濱横須賀線	
錦糸町	320	大久保	987	大井町	5,172
龜戸	546	東中野	2,853	〃	(1,037)
平井	482	中野	3,084	大森	4,789
新小岩	109	高圓寺	2,881	蒲田	3,744
小岩	438	阿佐ケ谷	2,277	〃	(120)
市川	229	荻窪	1,416	〃	(230)
中山	151	西荻窪	1,325	川崎	1,234
船橋	209	吉祥寺	778	鶴見	1,125
津田沼	42	三鷹	152	東神奈川	327
幕張	87	武藏境	141	横濱	1,262
稻毛	16	小金井	105	〃	(31)
千葉	145	國分寺	157	〃	(44)
		國立	328	櫻木町	1,778
		立川	228	保土ケ谷	188
		〃	(28)	戸塚	71
		八王寺	139	大船	48
				北鎌倉	33
				鎌倉	463
				逗子	218
				田浦	33
				横須賀	164

近郊私鐵市內連絡	
京濱（品川）	759
池上（五反田）	780
目蒲（目黑）	1,803
東横（澁谷）	585
小田急（新宿）	1,167
東武（池袋）	137

常盤線	
三河島	192
南千住	161
北千住	460
龜有	101
金町	155
松戸	136
馬橋	23
北小金	17
柏	55
我孫子	28

大宮線	
赤羽	1,384
川口	204
蕨	126
浦和	843
與野	86
大宮	313

横濱線	
菊名	2
小机	5
中山	6
長津田	4
原町田	5

東海道線	
藤澤	233
辻堂	35
茅ケ崎	57
平塚	77
大磯	36
二の宮	13
國府津	8
鴨宮	1
小田原	27

本表の數字は千單位を表す

萬に終る。東海道本線の方面では藤澤は二十萬臺を以つて、逗子に伍し、東神奈川と近似するが、以西の諸驛は、いづれも萬位に止まつて云ふべきものがない。横濱線の數字は、唯、此の方面についての參考に供したるのみ。

更に中央線に赴くと、大久保は、百萬に達せんとし、東中野、中野、高圓寺は三百萬内外にあり、阿佐ケ谷之れに次いで二百萬臺を占め荻窪、西荻窪は百萬臺で之れに續く。吉祥寺は七十七萬を占めてゐるが以西の諸驛は遽に勢力を減じて、その各數は十五萬乃至十萬を往來してゐる。國立、立川の兩驛が各〻三十萬、二十萬臺に復活したのみ。八王子をとつてみると十四萬弱の數字が出て、此の點、横須賀に類似してゐる。

赤羽以北の東北京濱線にあつては、赤羽が百萬級で斷然多く、川口、蕨、大宮は三十萬—十萬の間を往來し、與野は著しく弱勢、唯、浦和市が八十萬臺で第二位に居る。

龜戸、市川、千葉の方面では、百萬級のもの無く、龜戸の五十四萬を筆頭に、津田沼、幕張、稻毛を除く外は新小岩の十萬を低位に其の間を往來し、千葉は十五萬弱を示す。松戸、我孫子の線は最も數字的に貧弱で北千住の四十六萬を筆頭に、第二位は三河島の十九萬となり、最低では我孫子の三萬弱に終る。

之れを通觀すると、中央線、東海道方面には、一寸共通な傾向が見える、卽ち、藤澤、鎌倉、逗子の存在と國立、立川の存在とがそれである。此の兩局地は、前者は大井町蒲田間、後者は東中野西荻窪間の優勢が其れより中心を遠ざかるに從つて漸次衰退しつゝある所で急に二十萬乃至五十萬の勢力に回復するのを示してゐる。此の地方の數字は、他の方面系統に於ける、有力な從つて東京に近接せる驛の數字に比して、必しも劣らざる力を持つてゐると云つて差支ない。此の點、東京生活圏の發展は、西部、殊に南部に延びてゐると云ふべきである。何となれば藤澤、鎌倉の地方は東京驛中心の半徑圓では三十哩圏に當るに反して、西部では立川國立は二十哩圏に沿ふ。然かも中央線の直線的なのに比して東海道線は可なり曲折が多い。從つて此の遠距離にも拘らず充分此の方面が開發されてゐる理である。反之、此の點で甚しく、未發達なのは東部で、千葉市は二十哩圏に當る、北部では、大宮浦和が前後して、十・二十哩圏のそれぞれ中間に位してゐ

鎌倉、逗子驛——東京横濱間の定期券旅客分布

品川	三九	二四	高田馬場	一八	四	千駄ケ谷	〇	二
田町	一〇八	一八	新大久保	〇	〇	淺草橋	八	二
濱松町	三	六	新宿	二四	三	兩國	二	二
新橋	二三三	八七	代々木	〇	一			
有樂町	三三	一八	原宿	〇	二	大井町	〇	三
東京	五二六	一八五	澁谷	二七	七	大森	五	五
神田	四二	二六	惠比壽	三	一	蒲田	七	五
秋葉原	五	三	目黑	一八	六	其他東京市内	〇	七
御徒町	一〇	四	五反田	八	二			
上野	一七	五	大崎	二	一	川崎	一七	九
鶯谷	一	〇				鶴見	二二	三
日暮里	二	二	萬世橋	七	四	東神奈川	三〇	五
田端	三	一	御茶ノ水	七三	一九	横濱	三〇八	九九
駒込	三	二	水道橋	二五	一〇	櫻木町	一四八	三〇
巢鴨	五	二	飯田橋	二六	一二	其他横濱市内	二八	九
大塚	五	〇	市ケ谷	一四	二			
池袋	一〇	一	四ツ谷	九	一	總計	一、八七八	六四二
目白	四	二	信濃町	〇	〇			

上部數字は鎌倉、下部數字は逗子驛の數

備考　鎌倉驛の數字は昭和八年夏、同驛の調査、逗子驛の數字は、昭和九年九月一日現在有效の同驛發行定期券の數である。